

STILL ALIVE

国際芸術祭

あいち2022

2022.7.30—10.10

International
festival of
contemporary art,
performing arts and
learning programs
in Aichi

プレスリリース

2022年3月30日 国際芸術祭「あいち」組織委員会

「あいち」の国際芸術祭

2010年から3年ごとに開催されており、今回で5回目を迎えます。国内最大規模の芸術祭の一つであり、国内外から多数のアーティストが参加します。愛知芸術文化センターのほか、県内の都市のまちなかにも広域に展開します。現代美術を基軸とし舞台芸術なども含めた複合型の芸術祭で、ジャンルを横断し、最先端の芸術を「あいち」から発信します。

開催目的

- ・ 新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・ 現代芸術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・ 文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。

目次

開催概要	1-2
コンセプト	3-4
ロゴ	5
企画体制	6-10
主な会場	11-12
現代美術展	13-40
パフォーマンスアーツ	41-48
ラーニング	49-54
連携事業、アンバサダー	55-56
現代美術展チケット情報	57-58

開催概要

- 名称** 国際芸術祭「あいち^{ニゼロニゼロ}2022」
- テーマ** STILL ALIVE
今、を生き抜くアートのちから
- 芸術監督** 片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議(CIMAM)会長）
- 会期** 2022年7月30日(土)～10月10日(月・祝) [73日間]
- 主な会場** 愛知芸術文化センター／一宮市／常滑市／有松地区(名古屋市)
- 主催** 国際芸術祭「あいち」組織委員会（会長 大林 剛郎（株式会社大林組代表取締役会長））

- 事業展開**
- 現代美術**
- ・国内外の82組のアーティスト及びグループの新作を含む作品を展示し、最先端の現代美術を紹介します。
 - ・愛知県美術館を含む愛知芸術文化センターや、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市)での作品展示など、県内での広域展開を図ります。
- パフォーマンスアート**
- ・国内外の先鋭的な演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術作品や関連プログラムを、愛知県芸術劇場および愛知芸術文化センター周辺で10演目程度上演します。
 - ・現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートにも注目し、パフォーマンスをより横断的に楽しむためのレクチャーやトークなどを企画します。
- ラーニング**
- ・「アートは一部の愛好家のためのもではなく、すべての人がそれぞれのやり方で楽しみ享受するもの」という基本的な考え方をコンセプトの核とし、幅広い層を対象とした様々な「ラーニング・プログラム」を実施します。
 - ・「あいち2022」会期中だけではなく、開幕までの期間を含め、フェーズ毎に目的を設定し、プログラムを構成します。
- 連携事業**
- ・県内の芸術大学を始め、多様な主体との連携による事業を展開します。
 - ・参加アーティストによる短期間の巡回展示を県内4市(長久手市、蒲郡市、半田市、西尾市)の文化施設などで開催します。
 - ・企画公募により選考された7組の地元文化芸術団体と共催で、舞台公演を行います。
- オンライン展開**
- ・会場での作品展示や上演等のほか、オンラインでの映像配信やプログラムなどを実施します。

STILL ALIVE

今、を生き抜くアートのちから

ポストコロナの時代、いかに日常生活や社会経済活動を回復し、持続可能でより平等な世界を築いていくかは、全世界が直面する喫緊の課題です。2022年はこのパンデミックからの回復期にあたり、コロナが浮き彫りにした現代社会のあり方に対して、環境、政治、経済、文化といったあらゆる領域から新しい提言が求められる時期となるでしょう。見通しの立たない時間のなかで、その現実に向き合い、不確かさのなかから未来を生み出すことは、現代を生きるわれわれ全てに課せられた責務でもあります。

現代美術やパフォーマンスアーツといった芸術は、その歴史を振り返っても、常に時代を反映し、真実を追究し、不確かさのなかから新しい価値観を提示してきました。90年代以降、欧米中心の価値観が多方向に分岐し、世界がさらに複雑化した今日では、多様な文化に対する理解や敬意を求める多様性(ダイバーシティ)や包摂性(インクルージョン)がますます重視されています。とりわけパンデミックが明らかにした社会構造の脆弱さはアーティストや芸術機関の活動にも多大な影響を及ぼしていますが、そのなかでも世界のアートコミュニティは差別や格差などの社会問題に対して連帯をもって立ち向かい、持続可能な世界の在り方を追究しています。

国際芸術祭「あいち2022」のテーマ「STILL ALIVE」は、愛知県出身で世界的に評価されるコンセプチュアル・アーティスト河原温が、1970年代以降電報で自身の生存を発信し続けた《I Am Still Alive》シリーズに着想を得ています。

「あいち2022」は、この「STILL ALIVE」を多角的に解釈し、過去、現在、未来という時間軸を往来しながら、現代美術の源流を再訪すると同時に、類型化されてきた領域の狭間にも注目します。そして、芸術表現を通して不確かさや未知の世界、多様な価値観、圧倒的な美しさと出会い、そこからいかに理想的で持続可能な未来を共に作りあげられるのかを考える機会となるでしょう。一方、コロナによって国境を跨ぐ活動が制限され、人々の意識は自身の拠って立つ地域へも向けられました。地方都市における芸術祭の特徴のひとつ、地域再発見という観点からは、愛知県の誇る歴史、地場産業、伝統文化などを視野に入れ、現代を起点にそれらをいかに蘇らせられるのかを探究しつつ、同時に世界各地のローカルをいかにグローバルに繋げていくのかという問いにも、クリエイティブに応答していくことになるでしょう。

「STILL ALIVE」を考えるために、以下のビジョンを掲げます。これらは独立して存在するものではなく、優劣の関係にも無く、相互に関連し、ときに相対しながら国際芸術祭「あいち2022」の全体を構成するものです。

過去から未来への時間軸を往来しながら「STILL ALIVE」を考える

100万年後の未来における地球や人間の存続を考える

現代世界を自然の営みや宇宙の法則といった大局的な視点から捉え、100年後、100万年後の未来にも地球が美しく存続し、人類が平和に生きるための意識喚起や提案を重視します。環境問題やサステナビリティへの意識は、「あいち2022」の前身「あいちトリエンナーレ」が、2005年の愛知万博「愛・地球博」のレガシーとして創設された歴史を継承するものでもあります。

過去の多様な物語をいかに現代に蘇らせるのかを考える

地球の歴史、人類の歴史に光を当て、世界各地のローカルな文脈を現代に照らして再考します。愛知県は江戸時代までは尾張と三河という二つの国であり、そこでは戦国時代から安土桃山時代にかけて日本の統一に貢献した三英傑など数々の武将が輩出されています。歴史はしばしば正史とされる物語とそれ以外の多様な物語が、異なる視点から語り継がれるものです。「あいち2022」では世界の多様な物語を現代に蘇らせませす。

現代を、この瞬間を、どう生き抜くのかを考える

2020年のパンデミックが引き起こした未曾有の健康危機、コロナ禍によって表面化した人種、ジェンダー、民族的な差異に対する差別や不平等などは、すべての人々の「命の重さ」を改めて考えさせることとなりました。自ら命を絶つ人々、なかでも女性と子供の自殺者数が増えていることも、日本社会が直面する大きな課題のひとつです。「あいち2022」では、「生きること」と芸術制作が強く結びついた力強い表現を通して、困難な時代の「生」について考えます。

現代美術の源流を再訪しつつ、類型化されてきた芸術分野の狭間に光を当てる

コンセプチュアル・アートの源流を再訪する

河原温が《I Am Still Alive》シリーズを始めた1970年代は、作品の視覚的な表現よりもその概念や意味を重視する概念芸術(コンセプチュアル・アート)が花開いた時期です。この考え方は今日なお、世界の現代美術の底流をなしています。愛知県からは河原温、荒川修作など国際的に評価されたコンセプチュアル・アーティストが輩出されていますが、「あいち2022」では世界各地のコンセプチュアル・アートにも光を当てます。

伝統工芸、先住民の芸術表現などを現代美術の文脈から再考する

愛知県には地場産業、伝統工芸、食文化など固有の文化的伝統があります。海、山、川のある豊かな自然環境によって窯業や繊維業も発展してきました。近代以降、陶芸や染織などは「工芸」として「美術(ファインアート)」とは一線を画すものとされてきましたが、近年では多様な文化圏における近代美術の発展が再考され、工芸と美術を横断する表現、先住民の芸術表現なども再評価されています。「あいち2022」ではこうした芸術領域を固定概念から解放し、同時代に生きる表現として再考します。

言葉と記号による芸術表現を再考する

河原温は《I Am Still Alive》シリーズの他にも、日付や起床時間など数字や言葉を使った作品を残しています。ソーシャルメディアが発達した現代社会では短い言葉や記号によるコミュニケーションが広がっていますが、「あいち2022」では文字を使った美術表現やポエトリー(詩)の領域にも注目します。

身体表現や五感でアートを体感する

身体表現や五感で体感する表現などは、生きていることを直接的に実感させるものです。「あいち2022」では、現代美術とパフォーマンス・アーツという領域が共存してきたあいちトリエンナーレの歴史を踏襲しつつ、現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートに特に注目します。ここでも個々の領域の枠組みや空間にとらわれず、それぞれが有機的に融合するかたちを模索します。

生きることは学び続けること。未知の世界、多様な価値観、圧倒的な美しさとの出会う

ラーニング・プログラムを通じて、体験や感動を未来に継承

初めて出会う現代美術作品は、しばしば難解であると言われるますが、それぞれの制作背景やアーティストの生きた時代や文化などのストーリーを学ぶことで、世界の遠い場所に住む人々や世代の異なる人々の感情や意識への共感にも繋がります。「あいち2022」では、さまざまなラーニング・プログラムを通して、作品をより深く理解し、国際芸術祭での体験や感動がみなさんの記憶に刻まれ、その先の人生に活かされる知恵や知識、精神の糧となるよう取り組みます。

美しさに心を動かす

詩人のウィリアム・ワーズワースは、空に虹を眺めるときに踊る心を唱えました。大人になっても、年齢を重ねてもそうでありたい、と。国際芸術祭「あいち2022」もまた、芸術の圧倒的な美しさに感動し、人生のどの一瞬にあっても明日を生きるためのポジティブなエネルギーに繋がる、心躍る出会いや体験の場になることを目指します。

国際芸術祭「あいち2022」芸術監督
片岡 真実

ハートのかたちは、芸術監督とのディスカッションのなかで、愛知県全体の形状と、知多半島と渥美半島に囲まれる三河湾の形状が二重のハートを連想させることと、「STILL ALIVE」というテーマから「生きる」意味を象徴する心臓をイメージさせるというインスピレーションから生まれたものです。

それを起点にロゴを考える過程で、県名が「愛」知県であることや、この地への「愛」情という意味なども重なってきました。

色は、「猩々緋(しょうじょうひ)」や「常滑焼」など、愛知県をイメージする複数の赤を集約しています。猩々は猿に似た中国の伝説上の生き物で、名古屋市南部を中心に地域のお祭りで親しまれており、今回の会場の一つである有松地区の有松天満社の秋祭りでも天狗と共に登場します。猩々緋の羅紗は戦国時代に織田信長や豊臣秀吉などの武将が陣羽織に仕立てたという歴史もあり、愛知にもゆかりがある色です。

県民の皆様にあいさつをしながら、日本、そして世界へと発信されていく、シンボリックなロゴマークを目指しました。

国際芸術祭「あいち2022」公式デザイナー 田中 義久



STILL ALIVE

国際芸術祭

あいち2022



写真:野村佐紀子

田中 義久 Tanaka Yoshihisa

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館(2019年、イタリア)、Tokyo Art Book Fair(2020年)、東京都写真美術館などのVI(ビジュアル・アイデンティティ)計画や、アーティストと数多くの作品集を制作している。また、アーティストデュオ「Nerhol」として活動しており、近年の展覧会に「第八次椿会 ツバキカイ8 このあたらしい世界」SHISEIDO GALLERY(2021年、東京)、「New Photographic Objects 写真と映像の物質性」埼玉県立近代美術館(2020年)、個展「Promenade」金沢21世紀美術館(2016年)がある。

芸術監督



Photo:
Ito Akinori

片岡 真実

Kataoka Mami

[森美術館館長／国際美術館会議(CIMAM)会長]

ニッセイ基礎研究所都市開発部、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館(東京)。2020年より同館館長。

2007～2009年はハイワード・ギャラリー(ロンドン、英国)にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ(2012年、韓国)共同芸術監督、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督(2018年、豪州)。2014年から国際美術館会議(CIMAM)理事を務め、2020年より会長(～2022年)。

キュレトリアル・アドバイザー



Photo:
Trevor Yeung

コスミン・コスティナス

Cosmin Costinaș

[パラサイト エグゼクティブ・ディレクター／キュレーター]

2011年よりパラサイト(香港)のエグゼクティブ・ディレクター／キュレーター、2021年のカトマンズ・トリエンナーレ(ネパール)芸術監督も務める。

過去には、ダカール・ビエンナーレ(2018年、セネガル)やダッカ・アート・サミット(2018年、バングラデシュ)のゲスト・キュレーター、第10回上海ビエンナーレ(2014年、中国)共同キュレーター、第1回ウルル・インダストリアル・ビエンナーレ(2010年、エカテリンブルグ、ロシア)共同キュレーター、BAK(ユトレヒト、オランダ)キュレーター(2008-2011年)、『ドクメンタ12 Magazines』編集者(2005-2007年、ウィーン、オーストリア／カッセル、ドイツ)を歴任。

パラサイトでは、2015年の施設の大規模な拡張と新居地への移転を監督し、次のようなものを始め、多くの企画をキュレーションしてきた。「Koloa: Women, Art, and Technology」パラサイト(2019年)／ラングフォヌア(2019年、ヌクアロファ、トンガ)／アートスペース(2020-2021年、オークランド、ニュージーランド)、「A beast, a god, and a line」ダッカ・アート・サミット(2018年、バングラデシュ)／ワルシャワ近代美術館(2018年、ポーランド)／トロント Heim・アートギャラリー(2019年、ノルウェー)／マイアム(2020-2021年、チェンマイ、タイ)、「Is the Living Body the Last Thing Left Alive? The new performance turn, its histories and its institutions」パラサイト(2014年)、「グレート・クレセント 1960年代のアートとアジェーション——日本、韓国、台湾」パラサイト(2013-2014年)、森美術館(2015年、東京)、MUAC(2016年、メキシコシティ、メキシコ)、「A Journal of the Plague Year」パラサイト(2013年)／The Cube(2014年、台北、台湾)／Arko Art Center(2014年、ソウル、韓国)／Kadist & The Lab(2015年、サンフランシスコ、米国)。



ラーナ・デヴェンポート

Rhana Devenport

[南オーストラリア州立美術館館長]

2018年より南オーストラリア州立美術館(アデレード)館長を務める。以前は、ニュージーランドのオークランド美術館(マオリ名:トイ・オ・タマキ)館長(2013-2018年)、ゴベット・プリュスター美術館・ライ・センター館長(2006-2013年)を歴任。活動は美術館に留まらず、ビエンナーレやアートフェスティバルにも携わる。

アジア・太平洋地域の現代アートを中心に、タイムベース・メディアを用いた作品や、ソーシャル・プラクティス・アートに造詣が深い。これまでに、リー・ミンウェイ、ナリニ・マラニ、フィオナ・バディントン、リン・ティエンミャオ、ワン・ゴンシン、ジャン・ベイリー、ジュディス・ライトの個展を企画。ヴェネチア・ビエンナーレのニュージーランド館にて「リサ・レイハナ:エミッサリーズ」(2017年、イタリア)のキュレーターを務めたほか、豪州においてシドニー・ビエンナーレ、シドニー・フェスティバル、アジア・パシフィック・トリエンナーレ(クイーンズランド州立美術館)の上級職に従事。2018年にニュージーランド・メリット勲章オフィサーを受勲。



Photo:
Diana Tamane

マーティン・ゲルマン

Martin Germann

[インディペンデント・キュレーター]

ケルン(ドイツ)在住、キュレーター。「アナザー・エナジー展」森美術館(2021年、片岡真実との共同キュレーション)の他、「オリバー・ラリック展」OCAT上海館(中国)、「ラウル・デ・カイザー展」Mウッズ(北京、中国)、「トーマス・ルフ展」国立台湾美術館(台中)などの個展を企画。

2012年から2019年まで、ゲント現代美術館(ベルギー)の芸術部門を率い、コレクションやテーマ別の展示のほか、ラウル・デ・カイザー、ジャン・ベイリー、ヒワ・K、ゲルハルト・リヒター、マイケル・E・スミス、ナイリー・バグラミアン、ジェームス・ウェリング、リー・キット、ミハエル・ブーテ、ジョーダン・ウルフソン、レイチェル・ハリソンなどの個展を企画。リリ・デュジュリーの個展「Folds in time」(2015年)では、ベルギーの最優秀展覧会に贈られるAICA賞を受賞。

過去には、ケストナー・ゲゼルシャフト(ハノーバー、ドイツ)やブエロ・フリードリヒ(ベルリン、ドイツ)のキュレーターを務め、ベルリン現代美術ビエンナーレにも参画。数多くの展覧会カタログやモノグラフを出版し、『Frieze』、『Mousse』、『032c』などのアート専門誌に寄稿。HISK(ヘント、ベルギー)で定期的に教鞭をとり、ブリュッセルのEtablissement d'en Faceのボードメンバーを務める。



Photo:
Heinz Peter Knes

ウンジー・ジュー

Eungie Joo

[サンフランシスコ近代美術館キュレーター]

サンフランシスコ近代美術館(米国)の現代美術キュレーター。最近では、グループ展「SOFT POWER」(2019-2020年)を企画し、社会の一員、市民としてのアーティストの役割に注目。

安養パブリック・アート・プロジェクト/APAP 5(2016年、韓国)芸術監督、シャルジャ・ピエンナーレ12「The past, the present, the possible」(2015年、アラブ首長国連邦)キュレーター、イニョチン・インスティテュート(ブラジル)芸術文化プログラムディレクター(2012-2014年)などを歴任。2007年から2012年までは、ニューミュージアム(ニューヨーク、米国)において、キース・ヘリング・ディレクター兼教育パブリックプログラムのキュレーターを務め、ニューミュージアム・トライエニアル「The Ungovernables」(2012年)の企画、「ミュージアム・アズ・ハブ」プログラム主宰、『Rethinking Contemporary Art and Multicultural Education』(2009年)の編集にも携わる。また、第53回ヴェネチア・ピエンナーレ韓国館「濃縮・ヤン・ヘグジュ」展(2009年、イタリア)コミッショナー、REDCATギャラリー(ロサンゼルス、米国)創設ディレクター及びキュレーター(2003-2007年)を務めた。



Photo:
Sabelo Mlangeni

ガビ・ンゴボ

Gabi Ngcobo

[ジャベット・アート・センター キュレトリアル・ディレクター]

ヨハネスブルグ(南アフリカ)を拠点とするアーティスト、キュレーター、エドゥケーター。2020年11月より、プレトリア大学ジャベット・アート・センター(Javett-UP、南アフリカ)のキュレトリアル・ディレクターを務める。2000年代初頭より、南アフリカ国内外において芸術及び教育のプロジェクトに参画。

最近のキュレーションには「All in a Day's Eye: The Politics of Innocence in the Javett Art Collection」Javett-UP(2020年)、「Mating Birds」KZNSAギャラリー(ダーバン、南アフリカ)などがある。第10回ベルリン・ピエンナーレ「We don't need another hero」(2018年、ドイツ)キュレーター、第32回サンパウロ・ピエンナーレ(2016年、ブラジル)共同キュレーターも歴任。ヨハネスブルグを拠点とする共同プラットフォームであるNGO(Nothing Gets Organised)(2016年-)及びヒストリカル・リエナクトメント・センター(2010-2014年)の創設メンバー。ヴェネチア・ピエンナーレ南アフリカ館「The Stronger We Become」(2019年、イタリア)のカタログや、「Public Intimacy: Art and Other Ordinary Acts in South Africa」サンフランシスコ近代美術館/YBCA(2014年、米国)、ヴェルビエ・アート・サミット「We Are Many: Art, the Political and Multiple Truths」(2019年、スイス)、雑誌『Texte Zur Kunst』(2017年9月号)に寄稿。



Photo:
Federico Romero

ヴィクトリア・ノーソーン

Victoria Noorthoorn

[ブエノスアイレス近代美術館館長]

2013年よりブエノスアイレス近代美術館(アルゼンチン)の館長を務める。近年、同館では彼女のリーダーシップのもと、展示スペースを倍増させ、主にアルゼンチンのアーティストに焦点を当てた74の展覧会を開催し、48の出版物をバイリンガルで発行。また、教育プログラムを拡大し、年7000人の教職員が参加。

以前は、ニューヨーク近代美術館のドローイング・センター(米国)、ブエノスアイレス・ラテンアメリカ美術館(アルゼンチン)などを経て、インディペンデント・キュレーターとして第29回ポンテベドラ・ビエンナーレ(2006年、スペイン)、第41回Salón Nacional de Artistas(2008年、カリ、コロンビア)、第7回メルコスール・ビエンナーレ(2009年、ポルト・アレグレ、ブラジル)、第11回リヨン・ビエンナーレ(2011年、フランス)などの国際展を企画。

ブエノスアイレス近代美術館では、レオン・フェラーリ、マルタ・ミヌヒン、トマス・サラセノ、セルヒオ・デ・ローフ、アナ・ガラルド、ザネレ・ムホリ、トレイシー・ローズ、ラウラ・リマ、ベルナルド・オルティスなどの展覧会や、またブエノスアイレス近代美術館とフランクフルト現代美術館(ドイツ)で展示された「A Tale of Two Worlds」(2017-2018年)などのグループ展を企画。2019年より国際美術館会議(CIMAM)の理事に就任。



トビアス・オストラダー

Tobias Ostrander

[インディペンデント・キュレーター]

メキシコシティ(メキシコ)在住、キュレーター。

マイアミ・ベレス美術館(米国)のチーフ・キュレーター兼キュレーション担当副ディレクター(2011-2019年)を務めた。カリブ海地域のアーティスト、キュレーター、クリエイターのためのプラットフォーム「Tilting Axis」創設メンバー(2014-2019年)。エル・エコ実験美術館の館長(2009-2011年、メキシコシティ)、タマヨ美術館チーフ・キュレーター(2001-2009年、メキシコシティ)、inSITE2000アソシエイトキュレーター(1999-2001年、サンディエゴ、米国/ティファナ、メキシコ)、ニューミュージアム(ニューヨーク、米国)が主導する「ミュージアム・アズ・ハブ」の創設メンバー(2007-2012年)を歴任。その他、第24回サンパウロ・ビエンナーレ(ブラジル)、エル・ムセオ・デル・バリオ、ブルックリン美術館(共にニューヨーク、米国)にも携わる。



Photo:
Sabelo Mlangeni

ラルフ・ルゴフ

Ralph Rugoff

[ヘイワード・ギャラリー館長]

2006年よりヘイワード・ギャラリー(ロンドン、英国)の館長を務める。同ギャラリーでは、「Psycho Buildings」、「The Painting of Modern Life」、「The Infinite Mix」など数多くのグループ展のほか、エド・ルシェ、トレイシー・エミン、ジェレミー・デラー、カデル・アチアなどの個展を企画。

リヨン・ビエンナーレ(2015年、フランス)のゲスト・キュレーター、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ(2019年、イタリア)芸術監督を歴任。渡英前は、カリフォルニア美術大学ワティス・インスティテュート(サンフランシスコ、米国)のディレクターを務め、トーマス・ヒルシュホルン、ロニ・ホーン、アン・ヴェロニカ・ジャンセンズ、マイク・ケリー、マイク・ネルソンなど数多くのアーティストの個展を企画。

デイヴィッド・ハモンズ、ポール・マッカーシー、リュック・タイマンズ、ジャン＝リュック・ミレーヌ、映画監督のジャン・パウルヴェなど多数のアーティストについて、カタログや書籍に寄稿。米国のペニー・マッコール財団が主催するオードウェイ賞(批評・キュレーション部門)の初代受賞者(2005年)。



島袋 道浩

Shimabuku

[美術家]

1990年代初頭より世界中を旅しながら、そこに生きる人々の生活や新しいコミュニケーションのあり方に関するパフォーマンスやインスタレーション作品などを制作している。詩情とユーモアに溢れつつメタフォリカルに人々を触発するような作風は世界的な評価を得ている。近年はモナコ国立新美術館やクンストハレ・ベルン(スイス)などで個展が開催される。ヴェネチア・ビエンナーレ(2003、2017年、イタリア)、サンパウロ・ビエンナーレ(2006年、ブラジル)、あいちトリエンナーレ2010、ハバナ・ビエンナーレ(2015年、キューバ)、リヨン・ビエンナーレ(2017年、フランス)などに参加。リボンアート・フェスティバル2019(宮城)ではキュレーターも務める。

チーフ・キュレーター (学芸統括)



Photo:
ToLoLo studio

飯田 志保子

Iida Shihoko
[キュレーター]

東京都生まれ。名古屋市在住。1998年の開館準備期から11年間東京オペラシティアートギャラリーに勤務。2009年から2011年までプリズベンのクイーンズランド州立美術館／現代美術館(豪州)の研究機関ACAPAに客員キュレーターとして在籍。韓国国立現代美術館2011年度インターナショナル・フェローシップ・リサーチャー。アジア地域の現代美術、共同企画、芸術文化制度と社会の関係に関心を持ち、ソウル、豪州、ニューデリー、ジャカルタ各地域で共同企画を実践。第15回アジア・アート・ビエンナーレ・Bangラデシュ2012、あいちトリエンナーレ2013、札幌国際芸術祭2014キュレーター、あいちトリエンナーレ2019チーフ・キュレーター(学芸統括)を務めた他、2014年から2018年まで東京藝術大学准教授。国際美術館会議(CIMAM)、国際ビエンナーレ協会(IBA)、美術評論家連盟(AICA Japan)会員。

キュレーター (現代美術)



中村 史子

Nakamura Fumiko
[愛知県美術館主任学芸員]

愛知県生まれ。東海圏から関西圏を拠点に活動。専門は視覚文化、写真、コンテンポラリーアート。2007年より愛知県美術館に勤務。美術館で担当した主な展覧会に「放課後のはらっぱ」(2009年)、「魔術/美術」(2012年)、「これからの写真」(2014年)がある。また、美術館では若手作家を個展形式で紹介するシリーズ「APMoA Project, ARCH」(2012-2017年)を立ち上げた他、2010年からあいちトリエンナーレに主会場のスタッフとして携わり、美術館活動と芸術祭の連携に取り組んできた。2015年より日本と東南アジアのキュレーターが協働で調査、展覧会企画を行う美術プロジェクト「Condition Report」(国際交流基金主催)に参加し、2017年にはタイのチェンマイにてグループ展「Play in the Flow」を企画、実施する。



Photo:
Kai Maetani

堤 拓也

Tsutsumi Takuya
[キュレーター/グラフィックデザイナー]

滋賀県生まれ。大津市在住。2011年旧京都造形芸術大学卒業後、2013年から2016年まで同大学付属施設ARTZONEディレクター兼キュレーター。同年よりボズナン芸術大学(ポーランド)にて1年間のレジデンスを経て、2019年アダム・ミツケヴィチ大学大学院修了(カルチュラルスタディーズ専攻)。主なキュレーション実績に「類比的鏡/The Analogical Mirrors」(滋賀、2020年)、「ISDRSI 磯人麗水」(兵庫、2020年)など。展覧会という限定された空間の立ち上げや印刷物の発行を目的としつつも、アーティストとの関わり方を限定せず、自身の役割の変容も含めた有機的な実践を行っている。2018年より共同アトリエ「山中suplex」プログラムディレクター。

パフォーミングアーツ・アドバイザー



藤井 明子

Fujii Akiko
[愛知県芸術劇場プロデューサー]

1992年より愛知県文化情報センター学芸員(音楽)、現在は、愛知県芸術劇場チーフプロデューサー兼企画制作部長。野村誠「ブルの音楽会」(2010年)、小杉武久「MUSIC EXPANDED #1、#2」(2016年)、三輪眞弘+前田真二郎モノローグ・オペラ「新しい時代」再演(2017年)ほか、現代音楽、民族音楽、ジャンルにとらわれないミュージシャンや作曲家に焦点を当てたコンサートや映像、ダンスとのコラボレーション公演の企画・制作を行う。あいちトリエンナーレ2010、2013、2016パフォーミングアーツ・プロデューサー、キュレーターを務めた。



Photo:
Ryuji Miyamoto

前田 圭蔵

Maeda Keizo

[アートプロデューサー]

多摩美術大学芸術学科卒。世田谷美術館学芸課に勤務後、株式会社カンパセーション&カムパニーで、音楽やパフォーマンスの企画制作や、レコード・レーベル運営等を手掛ける。また、2001年より、ウェブサイト・マガジン『realtokyo』の編集／運営に携わる。2005年に愛知県で開催された日本国際博覧会では、複数の国際プロジェクトを担当。フェスティバル/トーキョー2011制作アドバイザー、あいちトリエンナーレ2013パフォーマンス部門プロデューサー、六本木アートナイト2014プログラムディレクターなどを歴任。また、2012年以降は、公益財団法人東京都歴史文化財団東京芸術劇場のスタッフとして、国内外のパフォーマンスの企画制作等に携わっている。

キュレーター (パフォーマンス)



Photo:
Yurika Kawano

相馬 千秋

Soma Chiaki

[アートプロデューサー/NPO法人芸術公社代表理事]

岩手県生まれ。NPO法人芸術公社代表理事・アートプロデューサー(2014年-)。フェスティバル/トーキョー初代プログラム・ディレクター(2009-2013年)、あいちトリエンナーレ2019キュレーター、シアターコモンズ実行委員長兼ディレクター(2017年-)など、演劇、現代美術、社会関与型アート、VR/ARテクノロジーを用いたメディアアートなど、領域横断的な同時代芸術のキュレーション、プロデュースを多数手がける。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章、2021年芸術選奨(芸術振興部門・新人賞)受賞。2021年より東京藝術大学大学院美術研究科准教授、ドイツで開催される世界演劇祭テアター・デア・ヴェルト2023プログラム・ディレクター。

キュレーター (ラーニング)



会田 大也

Aida Daiya

[山口情報芸術センター(YCAM)アーティストティック・ディレクター]

2003年開館当初より11年間、山口情報芸術センター(YCAM)の教育普及担当として、メディアリテラシー教育と美術教育の領域にまたがるオリジナルワークショップや教育コンテンツの開発と実施を担当する。2014年より東京大学大学院ソーシャルICTグローバル・クリエイティブ・リーダー(GCL)育成プログラム特任助教。あいちトリエンナーレ2019ラーニング・キュレーターを経て、2021年現在、YCAM学芸普及課長を務める。



Photo:
Kato Hajime

山本 高之

Yamamoto Takayuki

[アーティスト/スクール・イン・プログレス・コディレクター/オンゴーイング・スクール・ディレクター]

愛知県生まれ。子どもの会話や遊びに潜在する創造的な感性を通じて、普段は意識することのない制度や慣習の特殊性や個人と社会の関係性を描き出してきた。近年は地域コミュニティと協働して実施するプロジェクトや、一般を対象としたオルタナティブなアートスクール・プログラムにも取り組んでいる。

これまでに第6回シャルジャ・ビエンナーレ、シャルジャ・アートセンター(2003年、アラブ首長国連邦)、「笑い展:現代アートに見る『おかしみ』の事情」森美術館(2007年、東京)、あいちトリエンナーレ2010、旧石田ビル(2010年)、「アジアの亡霊」アジア美術館(2012年、サンフランシスコ、米国)、「ゴー・ビトゥイーンズ展:こどもを通して見る世界」森美術館ほか(2014-2015年)、第3回コチ=ムジリス・ビエンナーレ、アスピノ・ウォール(2016年、インド)などに参加。2017年にはアートラボあいちにて個展「山本高之Children of men」を開催。

愛知芸術文化センター

国内外の20世紀美術を中心に充実した作品を所蔵する愛知県美術館、大ホール、コンサートホール、小ホール、リハーサル室などを有する愛知県芸術劇場、アートのスペース、アートライブラリー、アートプラザで構成される愛知県文化情報センターからなる複合文化施設。

愛知県の文化芸術の拠点として、名古屋市の中心部に1992年開館。



提供:愛知芸術文化センター

常滑市

知多半島の中央、西海岸に位置する人口約6万人の市。平安時代末期頃から「古常滑」と呼ばれる焼き物の産地として知られ、瀬戸、信楽、越前、丹波、備前と並び、日本遺産に認定された日本六古窯の一つ。江戸時代以降は急須、明治時代からは土管、タイルなど時代に合わせた焼き物を生産し、現在でも窯業は主産業となっている。昭和初期の風情を随所に残す「やきもの散歩道」を中心に、旧製陶所や廻船問屋瀧田家、INAXライブミュージアムなどで展示予定。



一宮市

愛知県の北西部に位置する人口約38万人の尾張地方の中核市。尾張国の「一宮」が真清田神社であったことから、その門前町であるこの地域が「いちのみや」と呼ばれるようになった。江戸時代より綿織物の生産が盛んとなり、絹綿交織物の生産を経て、毛織物(ウール)生産へと転換、「織物のまち一宮」となった。一宮駅周辺のオリナス一宮、旧一宮市立中央看護専門学校などのほか、県内唯一の丹下健三建築である、一宮市尾西生涯学習センター墨会館を始めとした尾西エリアで展示予定。



有松地区(名古屋市)

名古屋市南東部に位置し、慶長13年(1608年)、尾張藩により開かれた東海道沿いのまち。有松・鳴海絞の製造・販売により発展し、現在も江戸時代の浮世絵さながらの景観が東海道沿いに広がっており、有松・鳴海絞のほか、町並みや山車などの伝統的な文化を今に伝えている。名古屋市「町並み保存地区」、国「重要伝統的建造物群保存地区」、文化庁「日本遺産」。東海道沿いの歴史的な建造物や、工房などで展示予定。





愛知県(名古屋駅)までの主なアクセス

- 電車 東京から | 東京駅 ————— [JR東海道新幹線「のぞみ」/約1時間40分] —————> 名古屋駅
大阪から | 新大阪駅 ————— [JR東海道新幹線「のぞみ」/約50分] —————> 名古屋駅
- 飛行機 中部国際空港セントレア ————— [名古屋鉄道「ミュースカイ」/約28分] —————> 名鉄名古屋駅
※常滑会場へは、中部国際空港セントレア — [名古屋鉄道常滑線/特急約5分] —> 常滑駅
県営名古屋空港 ————— [あおい交通 空港バス/約30分] —————> 名古屋駅

名古屋駅から各地区へのアクセス

- 愛知芸術文化センター 名古屋駅 ————— [地下鉄東山線/約5分] —————> 栄駅
- 一宮市 名鉄名古屋駅 — [名古屋鉄道名古屋本線/特急約14分] —> 名鉄一宮駅
名古屋駅 ————— [JR東海道本線/新快速約9分] —————> 尾張一宮駅
- 常滑市 名鉄名古屋駅 ————— [名古屋鉄道常滑線/特急約35分] —————> 常滑駅
- 有松地区(名古屋市) 名鉄名古屋駅 ————— [名古屋鉄道名古屋本線/約30分] —————> 有松駅

テーマ「STILL ALIVE」に沿って、各会場(愛知芸術文化センター、一宮市、常滑市、有松地区(名古屋市))のコンテキストに
 応答するアーティストを選定しています。

○はパフォーミングアーツへも参加。 芸文:愛知芸術文化センター 一宮:一宮市 常滑:常滑市 有松:有松地区(名古屋市)

アーティスト名(グループ名を含む)		生/結成年(没年)	出身/結成地	活動拠点	展示会場	掲載頁
○ 足立 智美	ADACHI Tomomi	1972	日本	ドイツ	芸文	20, 45
ホダー・アフシャール	Hoda AFSHAR	1983	イラン	豪州	芸文	20
AKI INOMATA	AKI INOMATA	1983	日本	日本	有松	40
NEW ローリー・アンダーソン & 黄心健(ホアン・シンチェン)	Laurie ANDERSON & HUANG Hsin-Chien	1947/1966	米国/台湾	米国/台湾	芸文	26
リリアナ・アングロ・コルテス	Liliana ANGULO CORTÉS	1974	コロンビア	コロンビア	芸文	22
レオノール・アントゥネス	Leonor ANTUNES	1972	ポルトガル	ドイツ	一宮	32
荒川 修作+マドリン・ギンズ	ARAKAWA and Madeline GINS	1936(2010)/ 1941(2014)	日本/米国	米国	芸文	24
カデル・アティア	Kader ATTIA	1970	フランス	ドイツ	芸文	19
ローター・バウムガルテン	Lothar BAUMGARTEN	1944(2018)	ドイツ	ドイツ/米国	一宮	30
ディードリック・ブラッケンズ	Diedrick BRACKENS	1989	米国	米国	芸文	22
ロバート・ブリア	Robert BREER	1926(2011)	米国	フランス/米国	芸文	17
マルセル・ブロータース	Marcel BROODTHAERS	1924(1976)	ベルギー	ベルギー/ ドイツ/英国	芸文	21
曹斐(ツァオ・フェイ)	CAO Fei	1978	中国	中国	一宮	32
ヤコバス・カポーン	Jacobus CAPONE	1986	豪州	豪州	芸文	25
ケイト・クーパー	Kate COOPER	1984	英国	英国/オランダ	芸文	21
パブロ・ダヴィラ	Pablo DÁVILA	1983	メキシコ	メキシコ	芸文	18
クラウディア・デル・リオ	Claudia DEL RÍO	1957	アルゼンチン	アルゼンチン	芸文	25
メアリー・ダパラリー	Mary DHAPALANY	1950	豪州	豪州	芸文	24
遠藤 薫	ENDO Kaori	1989	日本	日本	一宮	31
シアスター・ゲイツ	Theaster GATES	1973	米国	米国	常滑	34
潘逸舟(ハン・イシュ)	HAN Ishu	1987	中国	日本	芸文	23
服部 文祥+石川 竜一	HATTORI Bunsho+ ISHIKAWA Ryuichi	1969/1984	日本	日本	常滑	35
ニーカウ・ヘンディン	Nikau HINDIN	1991	ニュージーランド (アオテアロア)	ニュージーランド (アオテアロア)	常滑	35
許家維(シュウ・ジャウエイ)	HSU Chia-Wei	1983	台湾	台湾	一宮	30
NEW アンネ・イムホフ	Anne IMHOF	1978	ドイツ	ドイツ/米国	一宮	31
石黒 健一	ISHIGURO Kenichi	1986	日本	日本	一宮	30
ミット・ジャイイン	Mit JAI INN	1960	タイ	タイ	有松	38
ジャッキー・カルティ	Jackie KARUTI	1987	ケニア	ケニア	一宮	30
河原 温	On KAWARA	1932(2014)	日本	米国	芸文	16
ユキ・キハラ	Yuki KIHARA	1975	サモア	サモア	有松	40
バイロン・キム	Byron KIM	1961	米国	米国	芸文	24
岸本 清子	KISHIMOTO Sayako	1939(1988)	日本	日本	芸文	25
小寺 良和	KODERA Yoshikazu	1957	日本	日本	芸文	23
鯉江 良二	KOIE Ryoji	1938(2020)	日本	日本	常滑	37
アンドレ・コマツ	André KOMATSU	1978	ブラジル	ブラジル	芸文	19
アブドゥライ・コナテ	Abdoulaye KONATÉ	1953	マリ	マリ	芸文	24
近藤 亜樹	KONDO Aki	1987	日本	日本	一宮	28
小杉 大介	Daisuke KOSUGI	1984	日本	ノルウェー	一宮	29
黒田 大スケ	KURODA Daisuke	1982	日本	日本	常滑	36
グレンダ・レオン	Glenda LEÓN	1976	キューバ	スペイン	常滑	34
タニヤ・ルキン・リンクレイター	Tanya LUKIN LINKLATER	1976	米国	カナダ	有松	40
ニャカロ・マレケ	Nyakallo MALEKE	1993	南アフリカ	南アフリカ	一宮	31

現代美術展参加アーティスト一覧

2022年3月30日時点、アルファベット順。

アーティスト名 (グループ名を含む)		生/結成年(没年)	出身/結成地	活動拠点	展示会場	掲載頁
ミシェック・マサンヴ	Misheck MASAMVU	1980	ジンバブエ	ジンバブエ	芸文	17
升山 和明	MASUYAMA Kazuaki	1967	日本	日本	一宮	29
バリー・マッギー	Barry MCGEE	1966	米国	米国	一宮	28
ミルク倉庫+ココナッツ	mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts	2015結成	日本	日本	芸文	23
三輪 美津子	MIWA Mitsuko	1958	日本	日本	芸文	18
宮田 明日麿	MIYATA Asuka	1985	日本	日本	有松	39
モハンマド・サーミ	Mohammed Sami	1984	イラク	英国	芸文	22
○ 百瀬 文	MOMOSE Aya	1988	日本	日本	芸文	22, 47
デルシー・モレロス	Delcy MORELOS	1967	コロンビア	コロンビア	常滑	34
迎 英里子	MUKAI Eriko	1990	日本	日本	一宮	32
奈良 美智	NARA Yoshitomo	1959	日本	日本	一宮	28
NEW 縄(愛知県芸チーム initiated by 奈良美智)	Nawa (Aichi Kengei Team initiated by Nara Yoshitomo)	2022結成	日本	日本	芸文	26
トゥアン・アンドリュウ・グエン	Tuan Andrew NGUYEN	1976	ベトナム	ベトナム	常滑	35
尾花 賢一	OBANA Kenichi	1981	日本	日本	常滑	36
大泉 和文	OIZUMI Kazufumi	1964	日本	日本	芸文	20
奥村 雄樹	OKUMURA Yuki	1978	日本	ベルギー/オランダ	芸文	16
ローマン・オンダック	Roman ONDAK	1966	スロバキア	スロバキア	芸文	16
小野澤 峻	ONOZAWA Shun	1996	日本	日本	芸文	16
ガブリエル・オロスコ	Gabriel OROZCO	1962	メキシコ	日本/メキシコ	有松	39
カズ・オオシロ	Kaz OSHIRO	1967	日本	米国	芸文	19
ティエリー・ウッス	Thierry OUSSOU	1988	ベナン	オランダ	常滑	34
リタ・ボンセ・デ・レオン	Rita PONCE DE LEÓN	1982	ペルー	メキシコ	芸文	18
プリンツ・ゴラーム	Prinz Gholam	2001結成	ドイツ/レバノン	ドイツ	有松	39
ジミー・ロベール	Jimmy ROBERT	1975	グアドループ (フランス)	ドイツ	芸文	19
フロレンシア・サディール	Florencia SADR	1991	アルゼンチン	アルゼンチン	常滑	36
真田 岳彦	SANADA Takehiko	1962	日本	日本	一宮	28
ファニー・サニン	Fanny SANÍN	1938	コロンビア	米国	芸文	18
笹本 晃	SASAMOTO Aki	1980	日本	米国	芸文	21
イワニ・スペース	Yhonnie SCARCE	1973	豪州	豪州	有松	40
○ 塩見 允枝子	SHIOMI Mieko	1938	日本	日本	芸文	17, 44
塩田 千春	SHIOTA Chiharu	1972	日本	ドイツ	一宮	31
NEW シュエ ウツ モン (チー チー ターとのコラボレーション)	Shwe Wutt Hmon in collaboration with Kyi Kyi Thar	1986	ミャンマー	タイ	芸文	23
NEW デイムト・シュトレベ	Diemut STREBE	1982	ドイツ	米国	芸文	21
田村 友一郎	TAMURA Yuichiro	1977	日本	日本	常滑	36
和合 亮一	WAGO Ryoichi	1968	日本	日本	芸文	17
渡辺 篤(アイムヒア プロジェクト)	WATANABE Atsushi (I'm here project)	1978	日本	日本	芸文	26
西瓜姉妹(ウォーターメロン・シスターズ)	Watermelon Sisters	2017結成	台湾/ シンガポール	台湾/ドイツ	一宮	29
ケイリーン・ウイスキー	Kaylene WHISKEY	1976	豪州	豪州	一宮	29
イー・イラン	YEE I-Lann	1971	マレーシア	マレーシア	有松	39
横野 明日香	YOKONO Asuka	1987	日本	日本	芸文	20

アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。ただし、出身国や地域の慣習またはアーティスト自身の希望により、姓名順ではない表記も一部あります。
参加アーティストの生没年、出身地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

現代美術展とパフォーマンスアーツの両分野を横断し、ラーニング・プログラムがアートと観客を繋ぐ、国際芸術祭「あいち2022」の最も象徴的な場所。現代美術展では、愛知県出身で20世紀の美術史に名を刻んだコンセプチュアル・アーティスト河原温を起点に、過去・現在・未来という時間の概念を往来します。そのなかでは、コンセプチュアル・アートの起源を再訪し、文字や言葉による表現、ポエトリーにも注目します。また、世界各地で平行に発展した複数のモダニズムの系譜から、絵画や彫刻の概念を再考します。

一方、現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートに注目し、写真や映像、パフォーマンスなどの表現メディアを通して、身体性をポストヒューマン、政治化された身体、人種やジェンダー、移住や時に強制された移動の多様な表象、失われた身体の記憶といった観点から考えます。また、生きることの意味、生と死といった根源的なテーマを、メンタルヘルス、ヒーリング、祈りといった視点から考え、自然界、超自然界から宇宙空間に広がる「世界」の多層的な解釈を巡ります。

愛知芸術文化センターで展示するアーティスト

アーティスト紹介は推奨する鑑賞ルート順で、左から右に列記しています。

地下2階	小野澤 峻		
10階	河原 温 和合 亮一 (8階) 塩見 允枝子 パブロ・ダヴィラ カズ・オオシロ ホダー・アフシャール 大泉 和文	奥村 雄樹 ロバート・ブリア 三輪 美津子 (8階) ファニー・サニン カデール・アティア 足立 智美	ローマン・オンダック ミシエック・マサンヴ リタ・ポンセ・デ・レオン アンドレ・コマツ ジミー・ロベール 横野 明日香
8階	マルセル・プローターズ (10階) ケイト・クーパー ディードリック・ブラッケンズ リリアナ・アングロ・コルテス 潘逸舟 (ハン・イシュ) 小寺 良和 荒川 修作+マドリン・ギンズ バイロン・キム 岸本 清子 ヤコバス・カポーン 渡辺 篤 (アイムヒア プロジェクト)	デイムート・シュトレーベ 笹本 晃 百瀬 文 モハンマド・サーミ シュエ ウツ モン (チー チー ターとのコラボレーション) ミルク倉庫+ココナッツ メアリー・ダバラニー アブドゥライ・コナテ クラウディア・デル・リオ ローリー・アンダーソン&黄心健 (ホアン・シンチェン)	
地下2階	縄 (愛知県芸チーム initiated by 奈良美智)		

小野澤 峻

Onozawa Shun

1996年群馬県生まれ。東京都拠点。

群馬県立前橋高等学校卒業。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。ジャグリングパフォーマンスの感覚を切り口として、文化や地域を超えた身体や意識の深いところにある、根源的な好奇心を刺激する現象を追求している。

主な展覧会に「Sense Island -感覚の島- 暗闇の美術島」(2022年、神奈川)、「Media Ambition Tokyo」渋谷スクランブルスクエア(2020年、東京)／森アーツセンターギャラリー(2021年、東京)、「Smart Illumination Yokohama」象の鼻テラス(2019年、神奈川)、「技藝フェス tech×art festival」100BANCH(2019年、東京)など。



《演ずる造形》2021

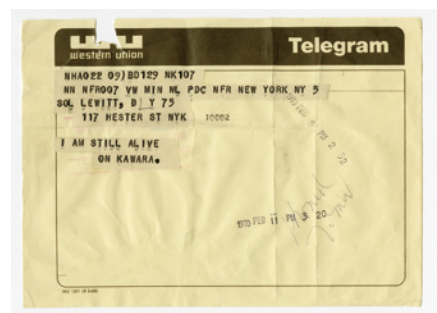
河原 温

On Kawara

1932年愛知県生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2014年、同地に没。

国際的に知られるコンセプチュアル・アーティストの一人である河原温は、「デイト・ペインティング」による《Today》シリーズ(1966-2013年)などで高い評価を得ている。一枚の絵画を一日で完成させるという自らに課したルールに従い、48年間に渡って、約3000枚の単色のキャンバスに制作当日の日付を描いた。また「I AM STILL ALIVE(いまだ生きている)」というメッセージだけが記された電報を送った《I Am Still Alive》シリーズ(1970-2000年)もよく知られている。「あいち2022」のテーマとコンセプトは、送り手も受け手も一過性の存在であることを再認識させるこのメッセージから着想を得ている。

主な個展は「河原温 連続／非連続 1963-1979」(1980-81年、国立国際美術館他)、「河原温 反復と対立」(1991年、ICA名古屋他)、「On Kawara - Silence」(2015年、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、米国)など。



ソル・ルウィットに宛てた電報、1970年2月5日
《I Am Still Alive》(1970-2000)より
LeWitt Collection, Chester, Connecticut, USA
© One Million Years Foundation

奥村 雄樹

Okumura Yuki

1978年青森県生まれ。ブリュッセル(ベルギー)及びマーストリヒト(オランダ)拠点。

翻訳者の特殊な主体性に触発されつつ異なるアーティストたち(しばしば奥村自身を含む)の作品及び人生を結ぶことでその重なりと隔たりから世界の本質的な平行性と意識の根源的な相互連結性を探究している。近年は自身のパーソナリティを極限まで削減しようと試みた60-70年代のコンセプチュアル・アーティストたちの方法論に「身体的自己」の表出と「自他合一」への志向性を感知しながら遠い時空から響く彼女らの声に耳を傾けている。主なプロジェクトに《孤高のキュレーター》(2021年)、《彼方の男》(2019年)、《帰ってきたゴードン・マッタ=クラーク》(2017年)、《奥村雄樹による高橋尚愛》(2016年)、《グリニッジの光りを離れて——河名温編》(2016年)などがある。



《彼方の男》2019
Courtesy of MISAOKO & ROSEN, Tokyo and LA MAISON DE RENDEZ-VOUS, Brussels

ローマン・オンダック

Roman Ondak

1966年ジリナ(スロバキア)生まれ。ブラチスラヴァ(スロバキア)拠点。

ローマン・オンダックがつくり出す空間では、日常の様々な出来事が人類学的調査のように配置され、普段は意識することのない日々のルールや社会に対しての違和感が示される。彼にとって空間とは、物質的な存在に限られず、社会的な規範、区分、規制、そして人々の理解や認識によって形成されるものだという。客観的でも同時的でもないわたしたちの知覚は常に、知識、感情、興味に浸され、とりわけ記憶の影響を大きく受ける。すなわち空間は静的ではなく、動的な時間を通して定義され、本質的には物理的な存在にとどまらない時間的なものとなる。その空間は常に時間の中に存在し、変化や変容を経て、記憶そのものが空間固有のアイデンティティを構築する。オンダック作品の多くは、そのような流動的な時間や記憶という視点を交え、空間そのものを扱っている。



《事象の地平面(Event Horizon)》2016
オールボー近代美術館蔵 Photo: Andy Keate
Courtesy of the artist and Kunsten Museum of Modern Art Aalborg

和合 亮一

Wago Ryoichi

1968年福島県生まれ。福島県拠点。

詩人。中原中也賞(1999年)、晩翠賞(2006年)、萩原朔太郎賞(2019年)などを受賞。2011年、東日本大震災直後の福島からTwitterで連作詩「詩の礫」を発表し、同年5月、世界三大コンサートホールであるオランダのコンセルヘボウに招致され朗読した。詩集『詩の礫』徳間書店(2011年)がフランスにて翻訳・出版され、第一回ニユンク・レビュー・ポエトリー賞(2017年、フランス)を外国語部門で受賞。フランスでの詩集賞の受賞は日本文壇史上初となり、国内外で大きな話題を集めた。現在、新しい翻訳詩集の出版の準備中。詩のパフォーマンスが海外でも高い評価を得て「サムライリーディング」と称される。合唱曲やオペラ、戯曲の執筆も行う。みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2016などの芸術祭にも参加。



展示風景: 個展「わたしたちはまだ林檎の中で眠ったことがない」
第27回萩原朔太郎賞 受賞者 和合亮一展「水と緑と詩のまち」前橋文学館、群馬
Photo: 本暮伸也、写真提供: 水と緑と詩のまち 前橋文学館

ロバート・ブリア

Robert Breer

1926年デトロイト(米国)生まれ。パリ(フランス)拠点に活動後、2011年ツーソン(米国)にて没。

ロバート・ブリアの作品は、映画とアートのダイナミックな相互作用によって成り立っている。映像彫刻、ドローイング、絵画など、多様で複雑で奔放な彼の作品は、テクノロジーなど常に新しい領域との対話を実践。実験、偶然性、永遠性などの概念を、ユーモアと哲学で表現するのも特徴である。

1980年、ホイットニー美術館(ニューヨーク、米国)で初の回顧展を開催後、個展多数。1981年、フィルム・フォーラム(ニューヨーク)の外壁に大型の壁画を制作。受賞歴にオーバーハウゼン国際短編映画祭(1969年、ドイツ)マックス・エルンスト賞、スタン・ブラッカー・ジ・ビジョン賞(2005年、デンバー、米国)など。2010-2012年にティンゲリー美術館(バーゼル、スイス)、バルティック現代美術センター(ゲーツヘッド、英国)、ポルドー現代美術館(フランス)で回顧展。近年の個展にシャルジャ芸術財団(2016年、アラブ首長国連邦)、アントニオ・ダレ・ノガレ財団(2021-2022年、イタリア)など。



(FLOAT) 1970
Courtesy of Kate Flax and gb agency, Paris
Commission : Sharjah Art Foundation

ミシェック・マサンヴ

Misheck Masamvu

1980年ベンハロンガ(ジンバブエ)生まれ。ハラレ(ジンバブエ)拠点。

主に画家・彫刻家として活動するミシェック・マサンヴは、自身の作品を抽象と具象の間で揺れる「ミュータント(突然変異体)」と表現する。その活動は、政府によるイデオロギー統制や人間性の追求の破綻に対する闘争である。存在の証として捉えられるその作品群は、彼の実体験をそのまま提示するだけでなく、精神的な空間をも指し示す。キャンバスに重ねられた絵具の層や筆跡がこれまでの葛藤や決断に向き合うよう促すのだ。

近年は、個展「Talk to me while I'm eating」グッドマン・ギャラリー・ロンドン(2021年、英国)、「Allied with Power」パレス・アート・ミュージアム・マイアミ(2020年、米国)、第22回シドニー・ビエンナーレ(2020年、豪州)に参加。その他、第54回ヴェネチア・ビエンナーレ(ジンバブエ代表、2011年、イタリア)など。



(Still Still) 2012-現在
Courtesy of the artist and Goodman Gallery (Cape Town, Johannesburg, London)

塩見 允枝子

Shiomi Mieko

1938年岡山県生まれ。大阪府拠点。

パフォーマンスアートにも参加 ▶ p.44

1961年東京藝術大学楽理科卒業。在学中より級友達と「グループ・音楽」を結成し、テープ音楽の制作や即興演奏を行う。64年渡米し、フルクサスの活動に参加。65年スペシャル・ポエムのシリーズを開始。帰国後は、イベントをパフォーマンス・アートとしても発展させる。70年大阪へ移住。90年ヴェネチアのフルクサス・フェスティバルに参加したことから、国内外での多数のフルクサスの企画に携わるようになる。90年代には電子テクノロジーに興味を持ち、パフォーマンスに取り入れる。以後、音楽やパフォーマンス作品の作曲、視覚作品の制作など、活動は多岐にわたる。2014年より京都市立芸術大学・芸術資源研究センター特別招聘研究員。



(スペシャル・ポエム全集/本) 1976

三輪 美津子

Miwa Mitsuko

1958年愛知県生まれ。愛知県拠点。

アイデンティティというある種の呪縛からの解放を願って初期の頃から常に作品のスタイルを変えたりという方法を選択、現在に至る。「見る行為」そのものを浮かび上がらせたいという思いから、作り手である以上に完成した作品を最初に見る人間であるという立ち位置を意識した制作を行なっている。

1996-1997年フィリップ・モリス財団の奨学金によりクンストラーハウス・ベタニエン(ベルリン、ドイツ)に滞在、1998年IASPISのゲスト・アーティスト(ストックホルム、スウェーデン)。主な個展にロングハウス・プロジェクト(2014年、ニューヨーク、米国)、ギャラリーHAM(2009年、愛知)、グループ展に「消失点-日本の現代美術展」(2007年、国立近代美術館、ニューデリー/プロジェクト88、ムンバイ、インド)など。



《STATUE (彫像) No.6》2010
Photo: Keizo Kioku Courtesy of the artist

リタ・ポンセ・デ・レオン

Rita Ponce de León

1982年リマ(ペルー)生まれ。メキシコシティ(メキシコ)拠点。

ポンセ・デ・レオンは、アルゼンチンの活動団体リオ・アビエルトで身体と心の気づきについて学び、実践は状況にかかわる手段であり、アートや学習プロセスを通じて人と豊かな結びつきが生まれると考える。日本の前衛舞踊である暗黒舞踏など、身体性を知識や知恵の起源とする多様なワークショップを行い、身体の動きや他者との学びの経験をドローイングに凝縮し、ビジュアル・エッセイとして自身の思考を共有する。

第32回サンパウロ・ビエンナーレ(2016年、ブラジル)、クンストハレ・パーゼル(2014年、スイス)、80M2 Livia Benavides Gallery(リマ、ペルー)、メキシコ近代美術館(メキシコシティ)など展示多数。

現在はタニア・ソロモノフ(振付師)、Vacaciones de Trabajo(自己学習プロジェクト)、新納新之助(詩人)、ヤスキ・メルチャー(詩人)、エスパルタ&横尾咲子(舞踏家、紙芝居師)との共同プロジェクトなどに取り組む。



《知り合うことのないまま、ただひたすら続ける(Sin conocernos, sencillamente seguimos)》2018
Photo: Juan Pablo Murrugarra
Courtesy of 80M2 Livia Benavides Gallery, Lima, Peru

パブロ・ダヴィラ

Pablo Dávila

1983年メキシコシティ(メキシコ)生まれ。メキシコシティ(メキシコ)拠点。

従来のメディアムを起点に多分野に渡りながら、空間と時間の社会的構造を投影する作品を制作。メキシコシティを拠点とし、シンプルかつ豊かな直感を引き出すフォルムを用いるその作品は、干渉と曖昧さの空間を掘り起こす。映像、電子作品、ライトインスタレーション、写真、絵画、サイト・スペシフィック作品など様々な形で知覚、空間、時間意識を考察し、感覚と主観性を探る。その詩的なジェスチャーは、過ぎ去る時間に対する私たちの期待や、記憶の中の出来事を処理する心理的レンズに疑問を呈し、感覚的な知覚と認知的な理解を横断する。科学、音楽、詩、認知科学、物理現象を参照することで、知覚、時間の儚さ、歴史的解釈の概念を掘り下げる。

メキシコでの主な展示歴にルフィーノ・タマヨ美術館(メキシコシティ)、モンテレイ現代美術館、ホセ・ガルシア(メキシコシティ/メリダ)、トラヴェシア・クアトロ(グアダハラ)など。その他、ザ・ビル(イスタンブール)、ポール・カスミン(ニューヨーク)など多数。



《転移の調和 (Armonías de transferencia)》2020
Courtesy of the artist

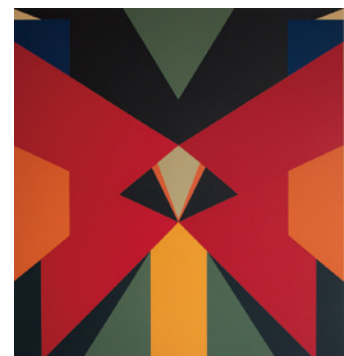
ファニー・サニン

Fanny Sanín

1938年ボゴタ(コロンビア)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

コロンビアの傑出した抽象画家で、過去50年で重要な芸術家の一人だとされる。ロス・アンデス大学(1960年卒業、コロンビア)で非具象に目覚める。イリノイ大学を経て、1963年にメキシコに移り、最初の展覧会(1964年、モンテレイ/1965年、メキシコシティ)と最初の美術館展を開催(1965年、ボゴタ)。ロンドンでの生活(1966年)が作品をより抽象化させる。ニューヨーク近代美術館の巡回展「The Art of the Real」(1968年、パリ、フランス)で幾何学的な作風を確立。1971年からニューヨーク在住。

ヒューストン美術館、ニューヨーク大学IFA、スミソニアン・アメリカ美術館、ワシントン国立女性美術館、ロサンゼルス郡美術館、パークレー美術館、コロンビア国立美術館、ボゴタ近代美術館、メキシコ近代美術館など、米国、南米、欧州の美術館が作品を所蔵。2019年に作品集『ファニー・サニン:色と構造の具体的な言語』を出版。



《アクリル No.1》2021
Courtesy of the artist

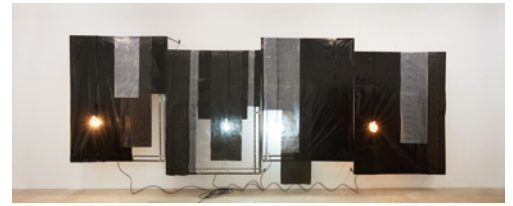
アンドレ・コマツ

André Komatsu

1978年サンパウロ(ブラジル)生まれ。サンパウロ(ブラジル)拠点。

1990年代のブラジルの民主主義の復興と新自由主義経済の導入を間近に見つめてきたアンドレ・コマツの作品は、世界中の人々のさまざまな生き方や、都市空間や権力との向き合い方に対して疑問を投げかける。「コマツは、どこにでも潜んでいる権力や社会的葛藤に関心を抱き、彼の彫刻・インスタレーション作品のテーマの原点となっている。作品タイトルの多くはミシェル・フーコーに拠っており、フーコーの「権力の微視的物理学(microphysics of power)」の理論は、作品タイトルの域を超え、コマツの関心事と世界観の中核を成している」(ジャコボ・クリヴェリ・ヴィスコンティ、キュレーター)。

主な展覧会に「Avenida Paulista」サンパウロ美術館(2017年、ブラジル)、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ(2015年、ブラジル館、イタリア)、「Beyond the Supersquare」ブロンクス美術館(2014年、ニューヨーク、米国)など。



《Fantasma #7》2017
Photo: Zhang Kai
Courtesy of Galleria Continua

カズ・オオシロ

Kaz Oshiro

1967年沖縄県生まれ。ロサンゼルス(米国)拠点。

高校卒業後ロサンゼルスに渡り、カリフォルニア州立大学で1998年と2002年にそれぞれ文学士と美術学修士を取得。ポップアートやミニマリズム、抽象的表現主義などを参考にしながら、それらの思想を独自に展開し、立体と平面、抽象と具象、リアリティとイリュージョンなど、さまざまな二項対立の上に立って、「絵画」と「芸術」の本質を探っている。トロンブルイユ(だまし絵)のテクニックを用い、キャビネット、スーツケース、アンブ、鉄骨などをキャンバスで忠実に再現し、観る者を惑わせながらも魅了する。国内外で精力的に展示を続けており、2014年にはロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)で個展「Chasing Ghosts」も開催された。



《オレンジスビーカーキャビネットとグレースケールボックス》2009
Photo: Naohiro Utagawa
Courtesy of MAKI Gallery

カデル・アティア

Kader Attia

1970年デュニー(フランス)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

カデル・アティアは、西洋文化の覇権主義と植民地主義が広範囲に及ぼす影響を探求しているアーティスト。その探求の中心には「損傷と修復」という概念があり、建築、音楽、精神分析、医学、ヒーリングや霊性思想など、様々な分野の知見を結びつけている。彫刻から映像インスタレーションまで、マルチメディアを駆使した彼の作品において、「修復」とは無傷の状態に戻るのではなく、心の傷の非物質的な痕跡を目に見える形にするもの。そのアプローチは、パリのバンリュー区域(banlieue = フランス都市郊外の低所得者向け住宅開発エリア)とアルジェリアで育ったアティア自身の経験に基づいている。



《リフレクティング・メモリー(Réfléchir la Mémoire)》2016
© Kader Attia
Courtesy of the Artist, Collection MACVAL, France, Collection MAC Marseille, France, Galleria Continua, Galerie Krinzinger, Lehmann Maupin and Galerie Nagel Draxler

ジミー・ロベール

Jimmy Robert

1975年グアドループ(フランス)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

人種やジェンダーを読み解く独自の手法で前衛パフォーマンスを再構築し、傍観者のポリティクスを探求する。2000年代初頭から黒人の身体のアイデンティティと表象を中心に据え、自身の身体と声を用い、文章、詩、ダンス、動き、イメージを織り交ぜたインスタレーションを発表。

ゴールドスミス校(ロンドン)とライクスアカデミー(アムステルダム)にて視覚芸術を学ぶ。主な展示にWIELS(ベルギー)、パレ・ド・トーキョー(フランス)、横浜トリエンナーレ(2008年)。近年はクンストヴェルケ現代美術センター(2019年、ドイツ)、Mミュージアム(2015年、ベルギー)、ザ・パワー・プラント(2013年、カナダ)、シカゴ現代美術館(2012年、米国)、ジュ・ド・ポーム美術館(2012年、フランス)、現代美術センターCCA北九州(2009年)で発表。2020年、ノッティンガム・コンテンポラリー(英国)にて個展開催後、2021年にムゼイオン近現代美術館(イタリア)、ORAS Occitaine(フランス)に巡回。



《反復》2010
Collection of Centre National des Arts Plastique, France
Courtesy of the artist, Stigter Van Doesburg, Amsterdam; and Tanya Leighton, Berlin and Los Angeles.

ホダー・アフシャール

Hoda Afshar

1983年テヘラン(イラン)生まれ。メルボルン(豪州)拠点。

ホダー・アフシャールは、ドキュメンタリー的な映像制作の本質と可能性を探究する。写真と映像にまたがる表現をととしてジェンダーや周縁性、移動について考察。作品では、イメージとの戯れやドキュメンタリー写真の概念的で演出的な側面を融合させることで、伝統的な映像実践を断ち切る試みを行う。近年の展覧会に「WE CHANGE THE WORLD」ビクトリア州立美術館、「PHOTO 2021」(共に2021年、メルボルン、豪州)、ラホール・ビエンナーレ02(2020年、パキスタン)、「Defining Place/Space: Contemporary Photography from Australia」サンディエゴ写真美術館(2019年、カリフォルニア、米国)、「Primavera 2018」オーストラリア現代美術館(シドニー)など。2015年にはNational Photographic Portrait賞、2018年にはBowness Photography賞を受賞(共に豪州)。



《リメイン》2018
© the artist and Milani Gallery

足立 智美

Adachi Tomomi

1972年石川県生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

パフォーマンスアートにも参加 ▶ p.45

パフォーマー／作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン(ロンドン、英国)、ハンブルガー・バーンホフ美術館(ベルリン、ドイツ)、ボンビトゥー・センター(パリ、フランス)、ベルリン・ポエジー・フェスティバル(ドイツ)など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。2012年DAADベルリン芸術家プログラムによりベルリンに招聘、アルス・エレクトロニカ(リンツ、オーストリア)より 優秀賞 を2019年に受賞。



《立体印刷されたテキスト》2017

横野 明日香

Yokono Asuka

1987年愛知県生まれ。愛知県拠点。

ダムや高速道路などの公共建築物から、ポットや花瓶といった日常にあるものまで、幅広いモチーフを油彩で描く。人がものを見ていかに空間を感じるのかということに関心があり、構図やタッチ、絵の具の重ね方や色彩など、絵画の基本的要素を用いてそれを表現している。

近年の主な展示に、「あざみ野コンテンポラリーvol.10 しかくのなかのリアリティ」横浜市民ギャラリーあざみ野(2019年、神奈川)、「瀬戸現代美術展」瀬戸サイト(2019年、愛知)、「組み合わせ」See Saw gallery + hibit(2018年、愛知)、「不自由なしかく」GALLERY ZERO(2018年、大阪)など。



《高速道路のある風景》2019

大泉 和文

Oizumi Kazufumi

1964年宮城県生まれ。愛知県拠点。

1991年以降、アンビト建築の三次元CGによる再現と併行して、オートマチック・ドローイング・マシンおよび大規模なインタラクティブ・インсталレーション作品を制作してきた。その特徴は、展示空間に応じた仮設の通路やステージを設置し、観客に空間体験を誘発する点、そして一連のドローイング・マシンに見られるように、作品要素が物理的に動く点である。また、美的センスに基づく設計と、自らアルミやアクリルを機械加工するディテールも大泉の作品を特徴づけている。近年の主な個展はStanding Pine(2020年、愛知)、N-Mark 5G(2019年/2018年、愛知)にて開催。その他にアルスエレクトロニカ・フェスティバル2019(リンツ、オーストリア)、神戸ビエンナーレ2007(兵庫)への参加など。



《可動橋/BH 20》2019
Courtesy of the artist

マルセル・ブロータース

Marcel Broodthaers

1924年ブリュッセル(ベルギー)生まれ。ブリュッセル(ベルギー)、デュッセルドルフ、ベルリン(ともにドイツ)、ロンドン(英国)を拠点に活動。1976年、ケルン(ドイツ)にて没。

1963年までは主に詩人として活動後、晩年の12年間に発表した多様で難解な作品の数々で、後のアーティストに大きな影響を与えた。ブロータース作品は、アートが規則やプロトコルによって決定されるという事実を諷刺的にすることで、美術館の中立性の神話を諧謔的に覆す。1969年以降は自らの「美術館部門」を立ち上げ、数々の展覧会に出品。言語、言葉とイメージ、レトリックの本質を巡るブロータースの作品は、詩、文章、映画、写真、スライド、ドローイング、絵画、彫刻など様々な表現形式に及ぶ。ドクメンタ5(1972年)、7(1982年)、10(1997年、以上全てカッセル、ドイツ)、ヴェネチア・ビエンナーレ(2015年、1980年、1978年、1976年、イタリア)に参加。2016年、ニューヨーク近代美術館(米国)にて回顧展を開催後、ソフィア王妃芸術センター(2016年、マドリッド、スペイン)、ノルトライン=ヴェストファーレン州立美術館(2017年、デュッセルドルフ、ドイツ)へ巡回。



《Entrance to the Exhibition (L'entrée de l'exposition)》1974
「Catalogue-Catalogus」パレ・デ・ボザール(ブリュッセル)
Photo: Philippe De Gobert Copyright Estate Marcel Broodthaers

ディムート・シュトレベ

Diemut Strebe

1982年ベルリン(ドイツ)生まれ。ボストン(米国)拠点。

マサチューセッツ工科大学(MIT)センター・フォー・アート・サイエンス・アンド・テクノロジー(CAST)のイダ・エリー・ルービン・レジデンスプログラムを近年修了したアーティスト。現代社会が抱える問題に取り組むべく、しばしば哲学や文学上の議論を取り込みながら、アートとサイエンスの交差点で制作活動を展開している。彼女が参照する科学的領域の多様さゆえに、それぞれの作品は異質に映り、コンセプト上の手法においても独特である。それらは作家の感性的で芸術的なレンズを通して見た、多様な科学的分野への幅広いと同時に深遠な関心を示している。こうした主題に取り組む中で、彼女はロマン主義の「新しいもの」を求めるパラダイムとともに、モダンアートの前衛的な野心を肯定する。マサチューセッツ工科大学(MIT)、ハーバード大学、コロムビア大学、米国航空宇宙局(NASA)、ロスリン研究所などの研究機関の第一線の科学者たちと共同作業を行っている。



《EL TURCO》2022
Diemut Strebe in collaboration with Steve DiPaola and Gary Marcus (Scientists)
Image Credits: Courtesy of the Artist Diemut Strebe in collaboration with Steve DiPaola

ケイト・クーパー

Kate Cooper

1984年リバプール(英国)生まれ。ロンドン(英国)及びアムステルダム(オランダ)拠点。

近年開催した個展は「Symptom Machine」SCAD美術館(2021年、ジョージア、米国)、「Screens Series: Kate Cooper」ニュー・ミュージアム(2020年、ニューヨーク、米国)、「Symptom Machine」ハイワード・ギャラリー(2019年、ロンドン、英国)、「Sensory Primer」ア・テイル・オブ・ア・タブ(2019年、ロッテルダム、オランダ)など。また、グループ展では台北市立美術館(2021年、台湾)、2021ニュー・ミュージアム・トライエニアル(ニューヨーク、米国)、デュッセルドルフ美術館(2021年、ドイツ)、パレ・ド・トーキョー(2020年、パリ、フランス)、ミシガン大学美術館(2019年、アナーバー、米国)、アムステルダム市立美術館(2018年、オランダ)、ボストン現代美術館(2018年、米国)などで作品を発表している。



《インフェクション・ドライバーズ》2018
Image courtesy of the artist

笹本 晃

Sasamoto Aki

1980年神奈川県生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

ニューヨーク在住。10代で渡英、その後米国にて美術、ダンス、彫刻等を学ぶ。個人の心理状況やパーソナリティの表徴としての癖や習慣に興味を抱くようになり、以後、日常的な行為や手順をテーマにしたパフォーマンス、彫刻、インスタレーションを発表している。ビジュアルアーティストやミュージシャン、振付師、科学者、学者等幅広い分野の人間とのコラボレーションも多数展開し、自他の作品の中で笹本はダンサー、彫刻家、ディレクターとして様々な役割を演じる。現在イエール大学の彫刻科で教鞭をとっている。

主な展覧会歴には「Delicate Cycle」スカulptチャーセンター(2016年、ニューヨーク、米国)での個展、「開館40周年展 トラベラー:まだ見ぬ地を踏むために」国立国際美術館(2018年、大阪)、ホイットニー・ビエンナーレ2010(ホイットニー美術館、ニューヨーク、米国)など。



《ランダム・メモ・ランダム(random memo random)》2017
© Aki Sasamoto
Courtesy of Take Ninagawa, Tokyo

ディードリック・ブラッケンズ

Diedrick Brackens

1989年メヒア(米国)生まれ。ロサンゼルス(米国)拠点。

アフリカ系アメリカ人とクィアである自身のアイデンティティを軸に、アメリカ史などの幅広いをテーマを扱い、寓話や物語を題材にしたタペストリー作品で知られる。西アフリカの織物、米国南部のキルト、欧州のタペストリーなどを用い、抽象かつ具象な表現を展開。残酷な歴史を抱える「綿」を自ら染め、「男性の優しさ」をテーマにアフリカ人やアフリカ系アメリカ人による文学、詩、民話などを参照しながら、労働や移民の複雑な歴史と、アフリカ系アメリカ人として生きることの豊かさや繊細さを示す。市販染料に加えワイン、茶葉、漂白剤など独自の染料も用いた色鮮やかな作品は、マジック・リアリズム的な世界観と現在が交差し、空白の歴史を考察する。

近年の展示に「Diedrick Brackens: Ark of Bulrushes」スコッツデール現代美術館(2021年、米国)、「Diedrick Brackens: darling divined」ニュー・ミュージアム(2019年、ニューヨーク、米国)など。



《summer somewhere (for Danez)》, 2020 Private collection, New York, NY.
© Diedrick Brackens. Courtesy of the artist, Jack Shainman Gallery, New York and Various Small Fires, Los Angeles.

百瀬 文

Momose Aya

1988年東京都生まれ。東京都拠点。

パフォーマンスアートにも参加 ▶ p.47

映像によって映像の構造を再考させる自己言及的な方法論を用いながら、他者とのコミュニケーションの複層性を扱う。近年は映像に映る身体の問題を扱いながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。

主な個展に「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」EFAG East Factory Art Gallery(2020年、東京)、「サンプルボイス」横浜美術館アートギャラリー1(2014年、神奈川県)、グループ展に「彼女たちは歌う」東京藝術大学大学美術館陳列館(2020年)、「六本木クロッシング2016展」森美術館(東京)、「アーティスト・ファイル2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(2015年、国立新美術館、東京/2016年、韓国国立現代美術館、果川)など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨークに滞在。



《Jokanaan》2019
愛知県美術館蔵

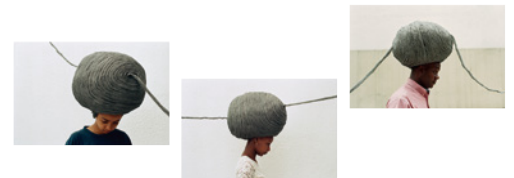
リリアナ・アングロ・コルテス

Liliana Angulo Cortés

1974年ボゴタ(コロンビア)生まれ。ボゴタ(コロンビア)拠点。

アフリカ系アーティスト、リリアナ・アングロ・コルテスは、コロンビア国立大学卒業後、イリノイ大学シカゴ校にて美術の修士号を取得。様々な地域のアフリカ人ディアスポラで活動し、グループ型の手法と批判的な芸術実践を通じてアフリカ系コミュニティの抱える困難を浮き彫りにすることを目指す。

彼女は、表象やアイデンティティにまつわる問いや、人種や脱開発論についての議論に関する問いから、記憶や権力のあり様を考察する。それらの課題と向き合うため、プロジェクトに参加する人々の身体や、イメージ、経験を通して、ジェンダー、民族性、言語、歴史、政治について考えていく。彼女の芸術実践は、複数のメディア、パフォーマンス型な活動、文化的慣習、歴史的賠償、また社会組織との共同制作などの要素を包含する。これまでコロンビア国内外で個展やグループ展に参加。芸術活動は必要不可欠であるという理解のもと、芸術分野のあらゆる側面で活躍する。ボゴタ市の文化部門とも協働したことがある。



《Un negro es un negro》「Porters Wigs」シリーズ、1997-2001
Courtesy of the artist

モハンマド・サーミ

Mohammed Sami

1984年バグダッド(イラク)生まれ。ロンドン(英国)拠点。

モハンマド・サーミは、2005年までインスティテュート・オブ・ファインアーツ(バグダッド、イラク)で絵画を専攻。2007年にスウェーデンに移住。2015年には、アルスター大学ベルファスト校芸術学部(北アイルランド、英国)で優等学位を取得。2018年にはロンドン大学ゴールドスミス校(英国)にて、美術学修士を取得した。

モハンマド・サーミは、紛争や暴力の持つ過激なイメージに対抗する寓意的な表現としての絵画に取り組む。彼の絵画は、日常のものやありふれたものから想起される在りし日の記憶、つまり故郷のイラクから難民としてスウェーデンに移住してきたときの記憶を辿ろうとするものである。



《難民キャンプ》2020
Courtesy of the artist and Modern Art, London

潘逸舟(ハン・イシュ)

Han Ishu

1987年上海(中国)生まれ。東京都拠点。

幼少期に上海から青森に移住した経験をきっかけに、異なる環境の中で生まれた土地と人間、共同体と個人の見えない関係性を、自らの身体を軸に考察してきた。作品においては映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真などの様々なメディアを用いて表現している。

これまでに、水戸芸術館、弘前れんが倉庫美術館、東京都現代美術館など国内各地の他に、ボストン美術館(米国)、ユダヤ博物館(ニューヨーク、米国)、上海当代美術館(中国)などで展示し、豪州と米国でアーティスト・イン・レジデンスに参加。また、日産アートアワード2020にてグランプリ受賞。



《ほうれん草たちが日本語で夢を見た日》2020、神戸アートビレッジセンター
Photo: 表恒匡

シュエ ウツ モン(チー チー ターとのコラボレーション)

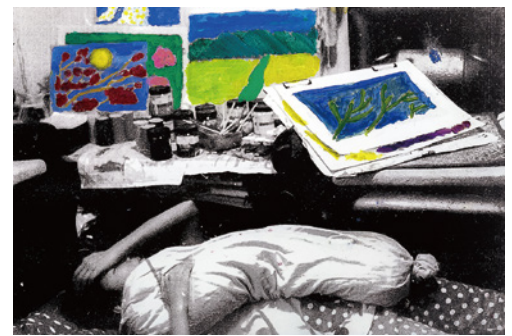
Shwe Wutt Hmon in collaboration with Kyi Kyi Thar

1986年ヤンゴン(ミャンマー)生まれ。チェンマイ(タイ)拠点。

シュエ ウツ モンはビルマの写真家、アーティストである。彼女の作品は、フェミニズム、集合的アイデンティティ、人間関係を主題にメンタルヘルスを探究し、身近な人や場所について親密に物語る。写真を中心にビデオや文章、詩、絵画、ドローイングも手がけ、作家以外の人々と共同制作することもある。

彼女の妹でありアーティストであるチー チー ターとの共同制作による《Noise and Cloud and Us》は、写真と様々な技法を組み合わせたものだ。パンデミックと政治不安の影響下、精神の不調に苦しむ愛する人をケアした個人的な経験から生まれた作品で、トラウマ、共感、親族関係に関わっている。

シュエは、著名な写真と芸術の賞であるオブジェクティブ・ドキュメンタリー・アワード2020(オープン・カテゴリー)や、ジュリアス・ベア・ネクスト・ジェネレーション・アート・プライズに入賞。作品は、ミャンマー、タイ、シンガポール、バングラディッシュ、インド、スイスのアートスペースや芸術祭にて展示されている。



《Noise and Cloud and Us》2021
シュエ ウツ モンとチー チー ター 蔵
Courtesy of the artist

小寺 良和

Kodera Yoshikazu

1957年愛知県生まれ。愛知県拠点。

小寺良和は40年近く、福祉施設で生活しながら作陶を続けている。戦争のニュース映像に強い衝撃を受けたことが発端になり、爆弾をかたどったシリーズを長年制作している。ただし、小寺の作る「バクダン」シリーズは多くの突起や穴を備え、あたかも木の根や海洋生物のような形をしている。恐ろしさ以上に不敵なユーモアを同時に感じさせる点が特徴である。1999年より特定非営利活動法人フール会の主催する公募展「生(いのち)の芸術 フール展」(1999年~2008年)に毎年出展。愛知県知的障害児者生活サポート協会による公募展「ふれあいアート展」(2008年~)の第8回と第9回にて名古屋社会福祉協議会会長賞、第10回に大賞を受賞する。また、「あいちアール・ブリュット展優秀作品」(2014年~)への選出も重ねている。



《バクダン》制作年不明
Photo: 城戸保

ミルク倉庫+ココナッツ

mirukusouko (Milk Warehouse) + The Coconuts

2015年東京都結成。東京都拠点。

メンバー: 宮崎直孝(1974年~)、松本直樹(1982年~)、坂川弘太(1976年~)、篠崎英介(1980年~)、西浜琢磨(1978年~)、田中丸善一(1984年~)、瀧口博昭(1974~2016年)

2009年に結成したミルク倉庫に、2015年よりアーティストユニットのココナッツが加わり、7名でミルク倉庫+ココナッツとして活動。メンバーそれぞれが、建築系技術をはじめとして、電設技術、音楽、エディトリアルデザインなどの専門的技能を有し、自ら、共同のアトリエや、展示・イベントスペース/住居として「milkyeast」(2011-2016年)の改修や改装を行い運用する。ものに備わる潜在的な機能の発見や、道具と身体の連関から着想された作品を特徴とし、各地で展示やイベントなども企画する。

主な展覧会に「タイムライン 時間に触れるためのいくつかの方法」京都大学総合博物館(2019年)、「東京計画2019 vol.4 ミルク倉庫+ココナッツ scratch tonguetable」gallery aM(2019年、東京)などがある。



《scratch tonguetable》2019
「東京計画2019 vol.4 ミルク倉庫+ココナッツ scratch tonguetable」
gallery aM(企画: 藪前知子) Photo: 森田兼次

荒川 修作+マドリン・ギンズ

ARAKAWA and Madeline Gins

荒川 修作 1936年愛知県生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2010年、同地にて没。
マドリン・ギンズ 1941年ニューヨーク(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2014年、同地にて没。

美術家の荒川修作と詩人のマドリン・ギンズは、共に哲学・科学・芸術を統合する創造家を意味する「コーデノジスト」を称した。荒川は初期の立体作品から一連のダイアグラム絵画作品を経てギンズとの建築作品に至るまで、一貫して世界を多様に認知する方法を、身体を中心とした環境を創造し模索し続けた。代表作に「意味のメカニズム」(1963年-)、「問われているプロセス/天命反転の橋」(1973-1989年)、建築作品に奈義町現代美術館の「遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体」(1994年)、「養老天命反転地」(1995年)、「三鷹天命反転住宅 In Memory of Helen Keller」(2005年)などがある。
主な個展は「荒川修作展 絵画についての言葉とイメージ」(1979年、西武美術館、東京)、「荒川修作の実験展—見られるものがつくられる場」(1991-92年、東京国立近代美術館他)、「Reversible Destiny — Arakawa/Gins」(1997年、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、米国)など。



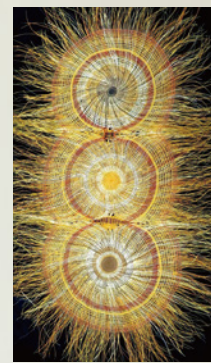
《問われているプロセス/天命反転の橋》1973-89
Photo: 上野則宏 ©2016 Estate of Madeline Gins. Reproduced with permission of the Estate of Madeline Gins.

メアリー・ダパラニー

Mary Dhapalany

1950年ガルビル(豪州)生まれ。ラミンジニグ(豪州)拠点。

メアリー・ダパラニーは誇り高きマンダラ族の女性として、40年以上芸術活動を続けている。彼女の編む作品は、先祖の女性たちが代々編み手として受け継いできた伝統工芸の象徴である。現在70代のダパラニーは、タコノキの葉で作った作品(ガンガ)を染めるため、土顔料や植物の根から抽出した天然染料を用いる。ダパラニーの作品は、ビクトリア州立美術館(メルボルン、豪州)、アートバンク(シドニー、豪州)、シカゴ大学プース・スクール・オブ・ビジネス(米国)など多数のコレクションに収蔵されている。



《マット》2020
Courtesy of BulaBula Arts

バイロン・キム

Byron Kim

1961年サンディエゴ(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

バイロン・キムはしばしば、抽象的崇高と形容されるような領域で創作を行う。彼の作品は、抽象と具象、コンセプチュアル・アートと純粋絵画のはざまに存在する。20年以上続く制作期間で1000を超える作品数となった「サンデー・ペインティング」シリーズでは、毎週の空模様を記録し、絶えず変化する、広大な宇宙とささやかなアーティストの日常を対比する。このシリーズは、河原温の《Today》シリーズにおける「デイト・ペインティング」(1966-2013年)や、ポストカードのシリーズ《I Got Up》(1968-1979年)などに大きく影響を受けたものである。

キムの作品で最も知られているのは、1993年のホイットニー・ビエンナーレに出品され、現在も制作継続中の絵画《提喻(Synecdoche)》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー、米国に収蔵)だろう。人間の肌の色を表した何百ものパネルがグリッド上に構成され、単色の抽象画であり、集団の肖像画とも言える作品だ。



「サンデー・ペインティング、2001年1月7日~2018年2月11日」の展示風景
2018年1月5日~2月17日
Courtesy of the artist and James Cohan

アブドゥライ・コナテ

Abdoulaye Konaté

1953年デレ(マリ)生まれ。バマコ(マリ)拠点。

故郷のマリ共和国や世界各国から集めた衣服を用いた大型のテキスタイル・インスタレーションを制作するアーティスト。抽象性と具象性を併せ持つその作品は、美しさを探求しながら社会・政治・環境などの多様な問題にも言及する。

織物を「コミュニケーション手段」とする西アフリカの伝統を参照しつつ、地球規模の問題と自らの生活や国といった身近な事例のバランスをとるコナテは、戦争、権力闘争、宗教、グローバル化、生態系の変化、エイズなどの様々な要因が、社会や個人にどのように影響してきたかを問いかける。

第57回ヴェネチア・ビエンナーレ(2017年、イタリア)、ドクメンタ12(2007年、カッセル、ドイツ)などの国際展の他、アルケン近代美術館(2016年、コペンハーゲン、デンマーク)での個展、スミソニアン協会国立アフリカ美術館(2015年、ワシントンD.C.、米国)、ボンビドーワ・センター(2007年、パリ、フランス)、森美術館(2007年、東京)でのグループ展などに参加。



《祖国の子供たちのための風》2019
Courtesy of the artist, Primo Marella Gallery and STANDING PINE

岸本 清子

Kishimoto Sayako

1939年愛知県生まれ。東京都及び愛知県を拠点に活動。1988年愛知県にて没。

岸本清子は大学進学のために上京し、高校の先輩である赤瀬川原平や荒川修作とともにネオ・ダダイズム・オルガナイザー(ネオダダ)に参加。1960年代を通し前衛芸術シーンにて精力的に活動した。1979年に名古屋に帰郷してからは、愛による社会変革を説く気宇壮大な絵巻物を制作。また、それらの絵画を掲げながら、独自の世界観を訴える大胆なパフォーマンスを多数行う。これらパフォーマンスは公園や路上でもたびたび実施され、既存の美術の領域にとどまらないものであった。1988年に49歳で亡くなるが、絵画からパフォーマンスまでジャンル横断的に行われた彼女のエネルギッシュな表現は、今改めて注目されつつある。



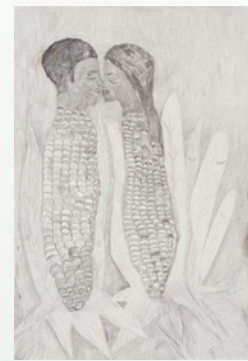
《赤嵐革命第2弾》のパフォーマンス記録写真、1980
愛知県美術館蔵
Photo: 入義紋四郎

クラウディア・デル・リオ

Claudia Del Río

1957年ロザリオ(アルゼンチン)生まれ。ロザリオ(アルゼンチン)拠点。

アート、詩、教育の狭間にいる彼女のプロジェクトは幅広く多面的だが、共通する興味はアートと人々の幸福との関係だ。絵画を学び、パフォーマンス、メール・アートなどの活動に参加し、コミュニケーション、人との交流、社会ネットワークに関心を抱く。ローカルとグローバルの緊張関係に触発され、国民性やジェンダーのアイデンティティがいかに形成され変容するかという疑問から多くの作品を制作。コラージュ、ドローイング、刺繍、フォトモンタージュなどによる作品は、政治的かつユーモラスで、消費主義、学校教育、新聞等のパブリックな想像体が集団生活に及ぼす影響を追求する。2002年以降、他のアーティスト、機関、一般市民との関わりが結実して共同設立したClub del Dibujo(ドローイングクラブ)を思索と行動の場とする。アルゼンチン代表としてサルト(2014年、ウルグアイ)、メデジン(2013年、コロンビア)、メルコスール(2012年、ブラジル)、ハバナ(1997年、キューバ)の各ビエンナーレに参加。



《コーン・キッズ》2015 Photo: Viviana Gil
Courtesy of Museo de Arte Moderno de Buenos Aires, Argentina

ヤコバス・カポーン

Jacobus Capone

1986年パース(豪州)生まれ。フリーマントル(豪州)拠点。

ヤコバス・カポーンは、パフォーマンスや写真、ビデオ・インスタレーション、絵画、サイト・スペシフィック作品などを取り入れた活動を継続して行う。詩的な表現が特徴的な彼の表現の根底には、他者にどのように知覚されようとも、すべての行為を一つの生きた経験へと統合しようとする全体論的な性質がある。2007年には、豪州を徒歩で横断し、インド洋の海水を太平洋に注いだ。

作品は台北市立美術館(台湾)、タラワラ美術館(豪州)、MOMENTUM(ベルリン、ドイツ)など世界各地で展示されており、パース・インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート(豪州)ではパース国際芸術祭2017の一部として個展「Forgiving Night for Day」を開催した。その他、数多くの国際的なフェスティバルやフェローシップ、アーティスト・イン・レジデンスに参加しており、2016年にはJohn Stringer賞を受賞。



《Forewarning, Act 2 (Sincerity & Symbiosis)》2019
Courtesy of the artist and Moore Contemporary

ローリー・アンダーソン&黄心健 (ホアン・シンチェン)

Laurie Anderson & Huang Hsin-Chien

本展で展示する《トゥー・ザ・ムーン》は、両アーティストによるコラボレーションの最新作。デンマークのレイジアナ近代美術館による委嘱作品で、来場者はVRで作品を体験した。没入型のインスタレーションにVRが組み込まれた本展で展示されるバージョンは、2019年にマンチェスター国際フェスティバルで初めて発表された。

ローリー・アンダーソン

1947年シカゴ(米国)生まれ。ニューヨーク(米国)拠点。

パフォーマー、演奏家、作曲家、作家、映画監督、ビジュアル・アーティストといった多彩な顔を持つアーティスト。1970年代よりコンセプチュアル・アート等に触発を受け、美術、劇場、実験音楽、テクノロジーなど多領域で活動を行う。言語、音声、身体表現とテクノロジーの関係性に着目したパフォーマンスを次々と展開。「オー・スーパーマン」(1981)以降の長い経歴には、「ホーム・オブ・ザ・プレイグ」(1986年)や「ライフ・オン・ア・ストリング」(2002年)が含まれる。日本へは1984年に初来日し、東京と大阪で公演を行う。

2002年には《トゥー・ザ・ムーン》につながるNASA初のアーティスト・イン・レジデンス、2005年愛知県で開催の世界博「愛・地球博」では、委嘱インスタレーション作品《WALK》やパフォーマンス作品《10枚のポストカード》の上演。さらに同年、NTTインターコミュニケーションセンター[ICC]にて日本での初個展「時間の記録」も開催。最新の大規模個展はスミノニアノ／ハーシェホン美術館(2022年、ワシントンD.C.)での「The Weather」。

黄心健 (ホアン・シンチェン)

1966年台北(台湾)生まれ。台北(台湾)拠点。

アート、デザイン、エンジニアリング、電子ゲームの素養を積んだニューメディア・クリエイター。大規模で領域横断的なインタラクション、パフォーマンス、機械的な装置、アルゴリズム計算、そしてビデオ・インスタレーションなどのプロジェクトを手がける。国立台湾師範大学設計学部の教授を務める傍ら、学際的な共同教育STEAMや出版にも力を注ぐ。2005年愛知県で開催の「愛・地球博」万博プロジェクトや《トゥー・ザ・ムーン》など、ローリー・アンダーソンと数々のコラボレーションを実現してきた。

黄の作品は、ヴェネチア映画祭、カンヌ映画祭、台北市立美術館、国立台湾美術館、上海ビエンナーレ、ヴェネチア・ビエンナーレ、ニューヨーク近代美術館、アルスエレクトロニカ・フェスティバルなど、世界各地のギャラリー、美術館、国際芸術祭で展示公開されている。



マンチェスター・インターナショナル・フェスティバルでの展示風景
Photo: Michael Pollard

渡辺 篤 (アイムヒア プロジェクト)

Watanabe Atsushi (I'm here project)

1978年神奈川県生まれ。神奈川県拠点。

大学時代から自らの経験を根幹とする、社会からタブーや穢れとしても扱われかねない要素を持ったテーマを批評的に取り扱ってきた。ひきこもりの経験を持つ渡辺は、主宰する「アイムヒア プロジェクト」によって、孤立・孤独の立場にある人々の声やその事情について、当事者との協働制作を通じて顕在化し、アートが社会に直接的な作用をもたらす可能性を模索している。

主な個展／プロジェクト展に「同じ月を見た日」R16 studio(2021年、神奈川県)、「修復のモニュメント」BankART SILK(2020年、神奈川県)など。主なグループ展に「Looking for Another Family」国立現代美術館(2020年、ソウル、韓国)など。2020年度横浜文化賞 文化・芸術奨励賞受賞。



《月はまた見る》2021、プロジェクト「同じ月を見た日」
(月の写真:アイムヒア プロジェクト メンバー)
「同じ月を見た日」R16 studio(神奈川県) Photo: 井上桂佑

縄 (愛知県芸チーム initiated by 奈良美智)

Nawa (Aichi Kengei Team initiated by Nara Yoshitomo)

2022年結成。愛知県拠点。

縄(愛知県芸チーム initiated by 奈良美智)は、参加作家のひとりである奈良美智が発した「三英傑」という言葉と、国際芸術祭「あいち2022」のテーマ「STILL ALIVE」に回答して、奈良の母校である愛知県立芸術大学にゆかりのある若手や学生たちによって結成されたコレクティブである。

異なる感覚をもつ各々の若手たちが、これらの言葉から飛躍してアイデアを模索し、お互いの表現を組み合わせ、その実現を試みる。こうした互いの表現を縄の様により合わせることで、「現在」と「三英傑」とを結びつけていく。



織物の街として知られる尾張地方の中核都市・一宮市では、尾張国の「一宮」として知られる真清田神社へ向かう参道、本町通り沿いのオリナス一宮、市役所などから、神社の裏手にある旧一宮市立中央看護専門学校や旧一宮市スケート場にかけて作品が配置されます。ここでは、祈り、誕生、病、死、メンタルヘルス、ウェルビーイング、ケア、多様な性やジェンダー、自然界と人間の関係といったテーマを、作品を通して連鎖的に想像しながら「STILL ALIVE」を考えます。また、尾西エリアにあるノコギリ屋根の工場や愛知県内唯一の丹下健三建築である墨会館などを会場に、愛知県の地形や地理、産業史、モダニズムや一宮市の繊維業の歴史を掘り下げ、空間の建築的特性などに応答したダイナミックなインスタレーションやパフォーマンス、映像作品が展示されます。

一宮市で展示するアーティスト

アーティスト紹介は推奨する鑑賞ルート順に記載しています。

オリナス一宮	奈良 美智
つむぎロード	バリー・マッキー
一宮市役所	眞田 岳彦
旧一宮市立中央看護専門学校	近藤 亜樹 小杉 大介 西瓜姉妹(ウォーターメロン・シスターズ) 升山 和明 ケイリーン・ウイスキー ジャッキー・カルティ ローター・バウムガルテン 許家維(シュウ・ジャウエイ) 石黒 健一 ニヤカロ・マレケ
旧一宮市スケート場	アンネ・イムホフ
一宮市豊島記念資料館	遠藤 薫
のこぎり二／旧一宮市立中央看護専門学校	塩田 千春
国島株式会社	曹斐(ツァオ・フェイ)
一宮市尾西生涯学習センター墨会館	迎 英里子 レオノール・アントゥネス

奈良 美智

Nara Yoshitomo

1959年青森県生まれ。栃木県拠点。

愛知県立芸術大学で絵画を学び、同大学院卒業後は、12年間ドイツを拠点に制作。1990年代半以降からヨーロッパ、アメリカ、日本、そしてアジアの各地で規模に関わらず様々な場所で展示発表を続ける。見つめ返すような印象的な絵画、日々自由に描き続けるドローイング作品のほか、木、FRP、陶、ブロンズ、そしてインスタレーションなど多様な素材や空間に生命を吹き込む様な彫刻作品を制作。また、制作の日々や旅先での出会いを収めた写真作品も発表している。

作品はニューヨーク近代美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、ボストン美術館、ナショナルギャラリー（ワシントンD.C.）、大英博物館（ロンドン）など世界中の美術館に所蔵されている。



(Fountain of Life) 2001/2014
「奈良美智 for better or worse」豊田市美術館、2017
© Yoshitomo Nara Photo: Mie Morimoto

バリー・マッギー

Barry McGee

1966年サンフランシスコ(米国)生まれ。サンフランシスコ(米国)拠点。

サンフランシスコ芸術大学の絵画・版画専攻卒業。アーバン・リアリズム、グラフィティ、アメリカン・フォーク・アートの影響を主に受けた社会的なムーブメント「ミッション・スクール」と関わる。作品はいずれも、現代社会に対する率直で本質を捉える観察力で制作され、「ツイスト」(グラフィティ用の署名)時代から世界的アーティストとなった現在に至るまで、社会の周縁にあるコミュニティに能動的に貢献するという目的が一貫している。

個展をプラダ財団(ミラノ、イタリア)、ハマー美術館(ロサンゼルス、米国)、カリフォルニア大学バークレー美術館&パシフィック・フィルム・アーカイブ(米国)、ボストン現代美術館(米国)、フォートワース近代美術館(テキサス州、米国)、ワタリウム美術館(東京)、サンタバーバラ現代美術館(カリフォルニア州、米国)で開催。



リボンアート・フェスティバル2019(宮城県)の展示風景
Photo: Nori Ushio
© Barry McGee; Courtesy of the artist, Perrotin, and Reborn Art Festival

眞田 岳彦

Sanada Takehiko

1962年東京都生まれ。東京都拠点。

ISSEY MIYAKEでデザインを学び、渡英、彫刻家リチャード・ディーコンにアートを学び独立。北極圏グリーンランドに滞在した30歳の時「或る狩人の死」と遭遇した体験から、「生命・存在とはなにか」という根源的問いと向き合う。以来、繊維を媒体にした造形作品を国内外ギャラリー、美術館に出品。同時に繊維研究者として各地の伝統繊維、先端繊維の調査を行い日本の繊維文化、歴史に光を当て、自治体や繊維関連企業とのプロジェクト、繊維を通じた教育、防災など社会支援企画を開催。

主な活動は、日本最古の布を再興する越後の「アングインプロジェクト」(2002年-)、日本各地で棉栽培から作品制作までを行う「コットンプロジェクト」(2008年-)など。



展示作品イメージ
Courtesy of the artist

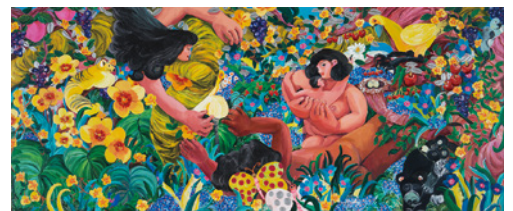
近藤 亜樹

Kondo Aki

1987年北海道生まれ。山形県拠点。

東北芸術工科大学大学院を修了後、国内外の展覧会に多数参加。躍動感あふれる筆遣いと力強い色彩の絵画作品とともに、油絵アニメーションと実写による短編映画「HIKARI」(2015年)や、パークホテル東京の客室に描いた「おたふくルーム」(2015年)の制作、音楽家とのライブペインティングなど、形式にとらわれない活動で注目される。2021年3月、初作品集『ここにあるしあわせ』(T&M Projects)を刊行。2022年の「VOCA展」(上野の森美術館、東京)に選出。

主な展覧会に「近藤亜樹一星、光る」山形美術館(2021年、山形)、作品集刊行記念展「ここにあるしあわせ」シウゴアーツ/フィリップス東京/現代芸術振興財団/代官山蔦屋書店(2021年、東京)、「高松市美術館コレクション+ 身体とムービング」高松市美術館(2020年、香川)など。



(星、光る) 2021
Photo: 奥山茂俊 © Aki Kondo, Courtesy of ShugoArts

小杉 大介

Daisuke Kosugi

1984年東京都生まれ。オスロ(ノルウェー)拠点。

小杉は、オスロ芸術大学卒業後、映像作品を中心に、彫刻、インスタレーション、パフォーマンスやテキストなどを通じて、社会を制御する制度や規律の中で揺れ動く個の主体性を探求してきた。身体的または精神的痛みの伝達可能性を問う彼の作品は、物語の描写や、感情移入を促すような表現からは慎重に距離をおく。小杉の作品を構成する、記憶と現実と想像の境界を揺るがすかのような風景は、個が生きている時間や空間に接近し、到達することのない内的領域の存在を示唆する。

近年の主な個展にジユド・ポーム国立美術館(2019年、パリ、フランス)、国際展には光州ビエンナーレ(2016年、韓国)など。国内では2021年に東京都現代美術館の「MOTアニュアル2021 海、リビングルーム、頭蓋骨」にて紹介された。



《グッドネーム(バッドプレース)》2017
Photo: Kjell Ove Stovrik/LIAF 2017
Courtesy of the artist

西瓜姉妹 (ウォーターメロン・シスターズ)

Watermelon Sisters

2017年にコラボレーション開始。台北(台湾)／ベルリン(ドイツ)拠点。

余政達(ユ・チェンダ)1983年台南(台湾)生まれ。／黃漢明(ミン・ウォン)1971年シンガポール生まれ。

台湾出身アーティストのユ・チェンダとベルリン在住シンガポール人アーティストのミン・ウォンのコラボレーション。自分たちの分身であるウォーターメロン・シスターズは、自らの性自認を流動させつつ、ブッチ／フェム(男性的／女性的)集団出身のティア姉妹として、人間の性的解放への道をヒップホップダンス「ワーク」で応援する。1960年代の京劇映画や台湾の映画監督蔡明亮(ツイ・ミンリヤン)の作品からインスピレーションを受けたこのプロジェクトは、ラップミュージック・ビデオ、写真シリーズ、ライブパフォーマンスで構成され、2017年9月にサンブライド財団と台北現代美術館が共同で開催したアジアの国立美術館における初のLGBTQをテーマとしたサーベイショーを記念するために結成された。

これまでに参加した主な展覧会・イベントは、「Queering Now: Dreamality, Chinese Arts Now」(2021年、ロンドン、英国)、「Diagonal」Magician Space (2020年、北京、中国)、「Queering Umwelt」Tao Art Space (2020年、台北、台湾)、「Watermelon Sisters Go Camping in Paris」国立ダンスセンター(2019年、パリ、フランス)など。



《ウォーターメロン・ラプ》2017
Courtesy of the artist

升山 和明

Masuyama Kazuaki

1967年岐阜県生まれ。愛知県拠点。

升山和明はカラフルなコラージュ作品で注目を集めているアーティスト。愛知県の犬山市にかつてあったデパート「清水屋」の外観が主なモチーフであり、作品の多くがこのデパートの外観とタクシー、そして自身の名前でしめられている。周囲のサポートのもと、モチーフを描く、切り抜く、貼る、さらに描くと言う複雑なプロセスを経て作られた作品は、多彩な色と質感にあふれており、デパートや車のイメージが自在に浮遊する中で遊ぶかの様である。愛知県で開催されている「あいちアールブリュット展」や「ふれあいアート展」などの公募展への出展を重ね、「第59回小牧市民美術展」にて市議会議長賞(2018年)を受賞。「アール・ブリュット -日本人と自然- in 東海・北陸ブロック」ミューゼ雪小町(2020年、新潟)に参加。



《SHIMIZUYA TAXI 2》2017
Photo: 林育正

ケイリーン・ウイスキー

Kaylene Whiskey

1976年ムバントワ(豪州)生まれ。インドゥルカナ(豪州)拠点。 ※ムバントワ(Mparntwe)は東アラダ語でアリスプリングスを指す。

オーストラリアの先住民族コミュニティで現代生活を送るケイリーン・ウイスキーは、アナング族の伝統文化とポップ・カルチャーを掛け合わせた作品を制作。長老たちの伝統文化と、ココ・コーラやミュージック・ビデオの影響を受けて育った若い世代たちの経験を遊び心たっぷりに結びつけている。

例えばドリー・パートンやティナ・ターナーといった象徴的アイコンを描くことで英雄的女性やシスターフッド(女性の絆)を称えながら、彼女らを人里離れたコミュニティの砂漠の風景に移植し、自生する植物や野生動物と交流させたり、狩猟、ブッシュ・タッカー(先住民族アボリジニーが伝統的に利用している同国原産の動植物)の採取、ミングルパ(自生するタバコの木)の栽培など、伝統的なアナング族の活動に従事させたりもする。ロック、ポップス、カントリーのサウンドに合わせて制作された破天荒なユーモアに溢れるウイスキーの作品は、異文化や異世代など大きく隔たる全ての人々を招き入れながら、みんなで楽しもうと呼びかける。



《セブン・シスターズ・ソング(Seven Sisters Song)》2021
ビクトリア州立美術館蔵
Courtesy of the artist, Iwantja Arts and Roslyn Oxley9 Gallery

ジャッキー・カルティ

Jackie Karuti

1987年ナイロビ(ケニア)生まれ。ナイロビ(ケニア)拠点。

ジャッキー・カルティは、ケニアのナイロビを拠点に活動するアーティスト。作品をHow Clouds Are Formed(雲はいかに生成されるか)というメソッド、すなわち複数の入力アングルを提供して、何かが出現する場を作り出すという作業方法で制作している。様々な場所にあるオブジェ、スペアパーツ、ムーブメントを組み合わせ、機械、地図、図面、図書カードをツールとして援用した気象・観測機器によって、地理的・社会的気候を読み解く。2020年にヘンリケ・グロース賞を受賞し、2021年にフォロー・フルクサス・アフター・フルクサス奨学金を獲得。彼女の実践に呼応する他のプロジェクトに、図書館プロジェクト「In The Case of Books」、オンライン・ワークスペース「I've been working on some MAGIC」がある。



展示風景《Shapeshifting and the Impossibility of Weathered Wood》2021
Photo: Christian Lauer
Courtesy of the artist

ローター・バウムガルテン

Lothar Baumgarten

1944年ラインスベルグ(ドイツ)生まれ。ベルリン(ドイツ)、ニューヨーク(米国)を拠点に活動。2018年ベルリン(ドイツ)にて没。

バウムガルテンの作品は、民族学的・人類学的な考察から、見るものがそこにある課題に対峙する空間を創り出す。様々なメディアを使い、残すことができない彫刻作品、スライド投影を用いた作品、映像、音による作品、作品としての本、あるいはサイト・スペシフィックな作品や壁画を通して、記憶や表象にまつわる視覚や言語に基づく諸制度について思索を続けた。1977年から80年にかけて、ベネズエラとブラジルの国境地帯に住むヤノマミ族と共に過ごす。その経験は、1960年代後半から70年代にかけての想像上の旅や風景を扱った作品から、その後の文化的差異を検証する作品へと移行するきっかけともなった。

第41回ヴェネチア・ビエンナーレ(1984年、イタリア)にドイツ代表として参加し、金獅子賞を受賞。世界の主要美術館で個展を開催し、ドイツのカッセルで開催されるドクメンタには第5回(1972年)、第7回(1982年)、第9回(1992年)、第10回(1997年)に参加した。



《Tetrahedron》1968
© Lothar Baumgarten Estate, VG Bild Kunst

許家維(シュウ・ジャウエイ)

Hsu Chia-Wei

1983年台中(台湾)生まれ。台北(台湾)拠点。

ル・フレノワ国立現代芸術スタジオ(フランス)を卒業後、アーティスト、映像作家、キュレーターとして現代アートと映像の言語を融合させ、映像制作の裏にある複雑な制作メカニズムを解き明かす作品を発表。作品を通して従来の歴史的ナラティブで見落とされ排除されてきた人間、素材、場所のつながりを紡ぎ出す。これまでに開催した個展は、Liang Gallery(2021年、台北、台湾)、「銅鐘藝術賞:熊貓、鹿、馬來貘與東印度公司」国立台北教育大学博物館(MoNTUE)(2019年、台湾)、「MAMスクリーン009」森美術館(2018年、東京)。シンガポール・ビエンナーレ(2019年)、「A Tale of Hidden Histories」アイ・フィルムミュージアム(2019年、アムステルダム、オランダ)、そして上海、光州、釜山、シドニー(2018年)のビエンナーレにも参加。さらに「台湾国際ビデオアート展」鳳甲美術館(2018年、台北、台湾)のキュレーター、「2019 アジア・アート・ビエンナーレ」国立台湾美術館(台中)の共同キュレーターをホー・ツーニエンと務める。



《ミネラル・クラフツ》2018
Image courtesy of the artist / Provided by Hsu Chia Wei Studio

石黒 健一

Ishiguro Kenichi

1986年神奈川県生まれ。京都府及び滋賀県拠点。

歴史的テーマや物質などの土地に根差した事象を資源として扱い、それらの結節点として彫刻や映像を制作。鉱物や失われゆく技術への関心を軸に、これまで出会うことがなかった各対象が関係するようなインスタレーションを展開している。

近年の主な展示に「余の光 / Light of My World」旧銀鈴ビル(2021年、京都)、「Soft Territory かかわりのあわい」滋賀県立美術館(2021年)、「Sustainable Sculpture」駒込倉庫(2020年、東京)、「本のキリヌキ」瑞雲庵(2020年、京都)などがある。また、2014年に京都と滋賀の県境に位置する「山中suplex」を共同で立ち上げ、現在も同スタジオを拠点に活動している。



《石貨の島と我が彫刻》2020
Photo: ニコラス・ロック

ニヤカロ・マレケ

Nyakallo Maleke

1993年ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。ヨハネスブルグ(南アフリカ)拠点。

ニヤカロ・マレケは、ヨハネスブルグを拠点に活動するアーティスト兼文筆家。空間、動き、そして歩くことを語る手段として「拡張されたドローイング」の概念に基づいて活動する。マレケのドローイングはメディウム、技法、分野などを超越し、インスタレーション、パフォーマンス、サウンドピース、プリント、彫刻などの形で発表されている。近作では物質性を重視し、従来のドローイングのメディウムと、刺繍を想起させる緻密なステッチやワックスペーパーなど異質な素材との組み合わせが多くみられる。

パレー美術大学(スイス)修士課程にて公共空間表現を専攻し、ドローイングを媒体に移民、脆弱性、公共空間についての論究を深め、2019年同課程を優秀な成績で修了。2015年ウィットウォーターズランド大学(南アフリカ)卒業。NGO(ヨハネスブルグ、南アフリカ)、スティーブソン(ケープタウン、南アフリカ)、Modzi Arts Gallery(ルサカ、ザンビア)などでのグループ展に参加。



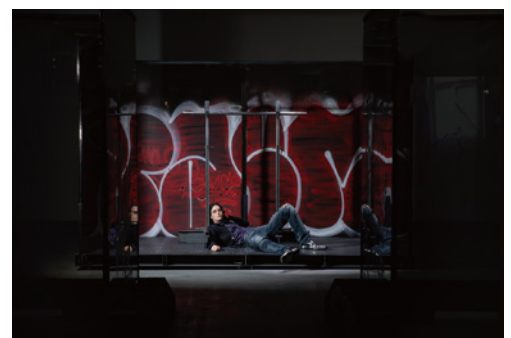
《Enclosed》2020
Photo: Andrew Wessels
Courtesy of the artist

アンネ・イムホフ

Anne Imhof

1978年ギーゼン(ドイツ)生まれ。ベルリン(ドイツ)/ニューヨーク(米国)拠点。

アンネ・イムホフは、過去10年の間に頭角を現し、同世代のアーティストの中で最も高く評価される一人となった。現在、ベルリンとニューヨークを拠点に活動するイムホフは、幼少期をフランクフルトで過ごし、地元のナイトクラブで警備員として働きながら、独学で絵と音楽を学んだ。フランクフルトの美術大学シュテューデルシュレーレに入学する前に、風俗街のクラブで一夜限りのパフォーマンスを行い、それを自身初の作品として、後にカタログ・レゾネに掲載している。パフォーマンスには、ボクサー2人とバンドが参加した。ボクサーは、音楽が鳴っている間は試合を続けるように指示され、逆にバンドは、ボクサーが試合をしている間は演奏を続けるように指示された。イムホフはこう説明する。「テーブルダンスバーも、鼻も、全部真っ赤だった。思い返せば、あれも絵を描く一つの方法だったのだ。」



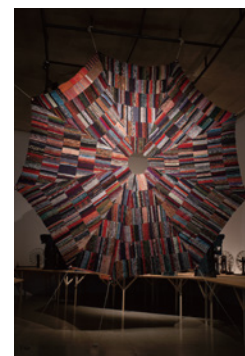
《Natures Mortes》2021
Palais de Tokyo, Paris Cast: Eliza Douglas Photo: Nadine Fraczkowski
Courtesy of the artist and Palais de Tokyo

遠藤 薫

Endo Kaori

1989年大阪府生まれ。大阪府及び沖縄県拠点。

2013年沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科卒業。2016年志村ふくみ(紬織、重要無形文化財保持者)主宰、アルスシムラ卒業。ベトナムと沖縄、東京と各地方を拠点に、その地に根ざした工芸と歴史、生活と密接な関係にある政治の関係を紐解き、主に染織技法を用いて、制作発表を続けている。主に雑巾や落下傘、船の帆を制作し「使う」ことで布の生と人々の生を自身の身体を用いてパフォーマンスタイプにトレスし、工芸の本質を拡張することを制作の核とする。最近の主な展示に「第13回 shiseido art egg」資生堂ギャラリー(2019年、東京)、「Welcome, Stranger, to this Place」東京藝術大学大学美術館(2021年)など。「第13回 shiseido art egg」ではart egg大賞を受賞した。



《閃光と落下傘》2020、国際芸術センター青森
Photo: Delphine Parodi

塩田 千春

Shiota Chiharu

1972年大阪府生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

生と死という人間の根源的な問題に向き合い、「生きることは何か」、「存在とは何か」を探求しつつ、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体、写真、映像など多様な手法を用いた作品を制作。

2008年、芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2015年には、第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展(イタリア)の日本館代表に選ばれる。また、ニュージーランド国立博物館テ・ハパ・トンガレウ(2020年、ウェリントン)、森美術館(2019年、東京)、南オーストラリア州立美術館(2018年、アデレード)、ヨークシャー彫刻公園(2018年、英国)、国立国際美術館(2008年、大阪)を含む世界各地の個展のほか、国際展などのグループ展にも多数参加。



《不確かな旅》2016/2019 個展「魂がふるえる」森美術館、東京
Photo: Sunhi Mang, Courtesy of Mori Art Museum
©JASPAR, Tokyo, 2021 and Chiharu Shiota

曹斐 (ツァオ・フェイ)

Cao Fei

1978年、広州(中国)生まれ。北京(中国)拠点。

国際的に名のある現代美術家。社会批評、ポップカルチャー、ドキュメンタリーの手法を織り交ぜ、シュルレアリスムも参照しつつ、今日の中国社会の急激な発展や変化を反映した映画やインスタレーションを制作。

近年の主な個展に、ニューヨーク近代美術館 PS1 (2016年、米国)、大館現代美術館 (2018年、香港)、K21 州立美術館 (2018年、デュッセルドルフ、ドイツ)、ボンビドゥー・センター (2019年、パリ、フランス)、サーベントイン・ギャラリー (2020年、ロンドン、英国)、ユーレンス現代美術センター (2021年、北京、中国)、MAXXI (2021年、ローマ、イタリア)。これまで参加した国際展に、上海ビエンナーレ (2004年、中国)、モスクワ・ビエンナーレ (2005年、ロシア)、台北ビエンナーレ (2006年、台湾)、第15/17回シドニー・ビエンナーレ (2006/2010年、豪州)、イスタンブール・ビエンナーレ (2007年、トルコ)、横浜トリエンナーレ (2008年)、第50/52/56回ヴェネチア・ビエンナーレ (2003/2007/2015年、イタリア) など。



《新星》2019

Courtesy of the artist, Vitamin Creative Space and Sprüth Magers

迎 英里子

Mukai Eriko

1990年兵庫県生まれ。秋田県拠点。

屠畜や石油の採掘、国債の仕組みや水蒸気の循環など、不可視のシステムをモチーフとしたパフォーマンスを制作している。素材の物質性を強く受け取れる状態を彫刻と考え、モチーフとしたシステムのメカニズムを等身大の装置へ変換し、動作させる。抽象化された行為への推測と身体感覚を横断しながら対象へたどり着く場所をつくり出す。主な展覧会に「ARTS & ROUTES -あわいをたどる旅-」秋田県立近代美術館 (2020年)、「不純物と免疫」トーキョーアーツアンドスペース本郷 (2017年)、「新しいループ・ゴールドバード・マシーン」(2016年、KAYOKOYUKI/駒込倉庫、東京) など。



《アプローチ 6.1》2020

Photo: 草薨 裕

レオノール・アントゥネス

Leonor Antunes

1972年リスボン(ポルトガル)生まれ。ベルリン(ドイツ)拠点。

20世紀の建築、デザイン、アートの歴史と向き合うレオノール・アントゥネスは、日用品の機能を見つめ直し、モダニズムのフォルムを彫刻で表現する可能性を考察する。制作の過程では、オブジェに埋め込まれたコード化された価値や見えないアイデアの流れを追究し、抽象的な新たな形に組み立て直す。また南米、メキシコ、ポルトガルの伝統の職人技を取り入れながら、合理的なデザインの裏にある構造原理や、幾何学的な形に還元することで現実を抽象化するというプロセスの理解も試みる。主なインスピレーション源は、社会的・政治的にラディカルなだけでなく、アートやデザインを通じた日常生活の向上を願う、女性アーティストの実践だ。最近の個展はMudam (2019年、ルクセンブルク)、The Box (2019年、プリマス、英国)、サンパウロ美術館 (2019年、ブラジル)。第58回ヴェネチア・ビエンナーレ (2019年、イタリア) ポルトガル館代表で、パリのフェスティバル・ドートンヌ (2021年、フランス) にも参加。



《the homemaker and her domain》2021

「フェスティバル・ドートンヌ」パリ国立高等美術学校(フランス)

Photo: Nick Ash / Courtesy of the artist; Air de Paris, Romainville and Marian Goodman Gallery, New York, Paris, London

常滑市は、平安時代末期頃から「古常滑」と呼ばれる焼き物の産地として知られ、同じ愛知県内の瀬戸と並び日本遺産に認定された日本六古窯の一つです。また、海に面していることから海運業も発展しました。「あいち2022」では昭和初期の風情を随所に残す「やきもの散歩道」を巡り、旧家・廻船問屋瀧田家、常滑の焼き物の歴史を体験できるINAXライブミュージアムに続くエリアに作品を点在させます。

焼き物は、大地や火、水、空気といった自然の力や摂理によって生まれます。常滑で考える「STILL ALIVE」は、生命を育むこれら根源的な要素や生きることそのものを考える作品が、世界の多様な文化や歴史を越えてどのように対話できるのかを探ります。また、常滑の産業史、陶芸と美術、人間と自然、産業や労働と政治経済の関係などを掘り下げた新作も多数展示されます。さらには、海運の要所でもあった常滑の歴史に呼応し、人々の移動や時に強いられた移住の背景にある多様な歴史や物語を紐解きます。

常滑市で展示するアーティスト

アーティスト紹介は推奨する鑑賞ルート順に記載しています。

旧丸利陶管	デルシー・モレロス ティエリー・ウッス グレンダ・レオン シアスター・ゲイツ 服部 文祥+石川 竜一
廻船問屋 瀧田家	トゥアン・アンドリュウ・グエン ニーカウ・ヘンディン
旧急須店舗・旧鮮魚店	尾花 賢一
旧青木製陶所	黒田 大スケ フロレンシア・サディール
常々(つねづね)	田村 友一郎
INAXライブミュージアム	鯉江 良二

デルシー・モレロス

Delcy Morelos

1967年コルドバ(コロンビア)生まれ。ボゴタ(コロンビア)在住。

幼少期に過ごしたコロンビア北部のティエラルタで、内戦による暴力と薬物の横行を目の当たりにする。同時に、先住民出身の父方の祖母から、植栽や土に関わる仕事について学ぶ。暴力に常に晒される緊迫したなかで、感情表現ができる場所や、人間と環境との関わりを探求。作品では、土やハチミツ、シナモンなどの天然由来の材料で、祖先の宇宙観、死生観をつむぐ。絵画、彫刻、インスタレーションで構成される作品を大地や天然素材の可能性を提示する「子宮」のような空間であると考えている。主な展示に現代アートギャラリーのRöda Sten Konsthall(2018年、ヨーテボリ、スウェーデン)やNC arte(2018年、ボゴタ、コロンビア)がある。2023年秋にディア・チェルシー(ニューヨーク、米国)で新プロジェクトの展示予定。



《大地(Enie) - ウイト族の言葉で - 》2018
Photo: Ernesto Monsalve
Courtesy of the artist

ティエリー・ウッス

Thierry Oussou

1988年アラダ(ベナン)生まれ。アムステルダム(オランダ)拠点。

ティエリー・ウッスは、近年、ヴィジュアル・コンセプチュアル・アーティストとしてプロジェクト「インポッシブル・イズ・ナッシング」の制作を行った。プロジェクトの核となったダホメ王国(現ベナン共和国)最後の王となったベハンジン王(1845-1906年)の玉座からは、王の地位と同時に19世紀末に植民地勢力が王国を滅ぼした経緯を読み取ることができる。ここでは玉座は権力の象徴として使われ、文化遺産を利用したり所有したりする権利に疑問を投げ、文化財から派生する工芸技術や学問の意味についても問いかける。

本展では、アフリカ最大の綿花生産国であるベナンの綿花生産をテーマにしたプロジェクト「イクイビウム・ウィンド(均衡の風)」を発表予定。綿花プランテーションに手作業で従事する労働者たちに光を当てることで、アフリカの工業化について問題提起し、奴隷貿易の歴史を辿りながら、かつて奴隷たちから土地を奪った行為が現代社会に与えている影響を視覚的に提示する。



《真っ白な金塊》「イクイビウム・ウィンド(均衡の風)」プロジェクト、2021
Courtesy of the artist

グレンダ・レオン

Glenda León

1976年ハバナ(キューバ)生まれ。マドリッド(スペイン)拠点。

レオンの作品群は、多分野に渡る学際的知見と精神的探求により形成される。幼少期からダンスや振付に興味を持つレオンは、心、身体、空間、音や静寂で構成される「全体」への理解を深め、美術史を学ぶことでさらに自身の興味を深化、拡張してきた。ケルン・メディア芸術大学ニュー・メディア科修士課程のなかで、メディアムや素材の幅を広げ、実験的な表現を確立。自然の摂理を可視化させること、あるいは進化の過程に必須と位置付ける「聴く」行為に着目して人々の世界への認識を覆す作品は、世界各地の美術館に収蔵されている。

近年では、ビーゴ現代美術館で個展「Música de las formas」(2021年、スペイン)を開催。第55回ヴェネチア・ビエンナーレ(キューバ代表、2011年、イタリア)に参加。



《コンクリート・ミュージック(Música concreta)》2015
Installation view in 「Centro de Desarrollo de las Artes Visuales (CDAV)」
第12回ハバナ・ビエンナーレ、2015
Courtesy of Estudio Glenda León

シアスター・ゲイツ

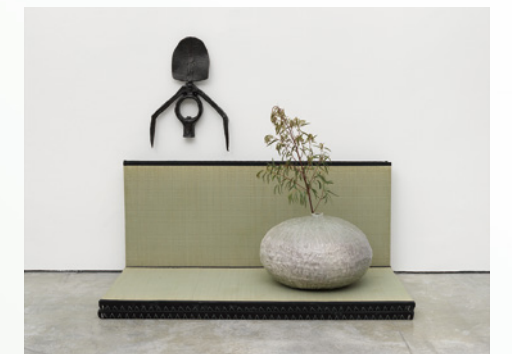
Theaster Gates

1973年シカゴ(米国)生まれ。シカゴ(米国)拠点。

シアスター・ゲイツは彫刻、パフォーマンス、そして空間理論や土地開発に従事した作品を創り出している。彼の作品では、コミュニティなどの集団の願望、芸術の主体性、実践主義的な戦略から定義される黒人文化の空間がテーマになっている。

世界各地で作品を発表するゲイツは、2021年王立英国建築家協会にて名誉研究員に選ばれたほか、受賞歴に第26回クリスタル賞(2020年、スイス)、J.C. Nichols Prize for Visionaries in Urban Development(2018年、米国)、ナッシャー彫刻賞(2018年、米国)など多数。シカゴ大学視覚芸術学部の教授を務め、同学の文化革新シニア・アドバイザーを兼任する。

2010年には、非営利財団ビルド・ファウンダーションをシカゴのサウスサイド地区に設立。アートや文化の発展、地域改革を目的に、無料アートプログラムなどを通じ、アーティストの支援やコミュニティの活性化も展開している。



《アフロ・イケバナ》2019
© Theaster Gates Photo: Theo Christelis, Image courtesy of White Cube

服部 文祥+石川 竜一

Hattori Bunsho + Ishikawa Ryuichi

必要最小限の装備で、狩猟や釣りなどで食料を調達しながら旅をするサバイバル登山家の服部文祥は、写真家の石川竜一とともに2015年から二人で登山を行う。その体験を服部は書籍『獲物山』と『獲物山II』（2016、2019年）、石川は展覧会「CAMP」（2016年）や写真集『いのちのうかがわ』（2021年）で発表。「あいち2022」では再びタッグを組み、2021年に北海道西部で臨んだサバイバル登山をもとに新作を制作。



服部文祥《2016年北海道増毛山塊徳富川》2016
Photo: 亀田正人

服部 文祥

1969年神奈川県生まれ。神奈川県拠点。

東京都立大学在学中より本格的な登山を始める。1996年にK2(8611m)登頂、その後、冬の北アルプス剣岳で初登攀などを経て、『サバイバル登山』と自ら名付けた登山を開始。山行記『ツンドラ・サバイバル』で第5回梅棹忠夫・山と探検文学賞(2016年)、小説『息子と狩猟に』(2017年)が31回三島由紀夫賞候補。近著に『サバイバル家族』(2020年)、書評集『You are what you read あなたは読んだものに他ならない』(2021年)など。

石川 竜一

1984年沖縄県生まれ。沖縄県拠点。

沖縄国際大学社会文化学科在学中に写真と出会う。2010年に写真家勇崎哲史に師事。2011年には、東松照明デジタル写真ワークショップに参加。第35回写真新世紀佳作(2012年)、第40回木村伊兵衛写真賞(2015年)。近年の展示にリボン・アートフェスティバル2019(宮城)、『Ohマツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ビーボー』兵庫県立美術館(2019年)、『日産アートアワード2017:ファイナリスト5名による新作展』BankART Studio NYK(神奈川)など。



石川竜一《雉の背と尾 北海道》2018、『いのちのうかがわ』より
Courtesy of the artist

トゥアン・アンドリュウ・グエン

Tuan Andrew Nguyen

1976年サイゴン(ベトナム)生まれ。ホーチミン市(ベトナム)拠点。

カウンターメモリー(国家やマスメディアにおける「正史」に相反する記憶)やポストメモリー(社会的トラウマにおける当事者の子孫たちが生きていくなかでさらに広がっていく事後記憶)によって行われる政治的抵抗の方法を探求するアーティスト。史実や超自然現象から物語を抽出し、再構築することでつくられる映像や彫刻作品は、事実とフィクションのどちらもが同等の重要性を持つ。

近年の発表歴にマニフェスタ13(2020年、マルセイユ、フランス)、シャルジャ建築トリエンナーレ(2019年、アラブ首長国連邦)、『SOFT POWER』サンフランシスコ近代美術館(2019年)、シャルジャ・ビエンナーレ2019、ホイットニー・ビエンナーレ2017(米国)など。カレ・ダール(ニーム、フランス)、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)、サンフランシスコ近代美術館、ニューヨーク近代美術館、ソロモン・R・グッゲンハイム美術館、ホイットニー美術館など作品収蔵多数。



《ザ・ボートピープル》2020
© Tuan Andrew Nguyen 2022
Courtesy of the artist and James Cohan, New York.

ニーカウ・ヘンディン

Nikau Hindin

1991年オークランド(タマキ・マカウラウ)、ニュージーランド(アオテアロア)生まれ。

ギズボーン(ツランダヌイ・ア・キア)、ニュージーランド(アオテアロア)拠点。 ※ ()内はマオリ語での名称

こうぞ

楮(アウテ)を打ち延ばしてできる樹皮布(パーククロス)の作り手であり、旧暦、言語、部族系図のほか、伝統的知識を継ぐ者と土地、植物、水との関係性をテーマに制作。ハワイで航海術、天測航法、現地の樹皮布カバについて学び、2018年の帰国後は百年以上途絶えていたマオリの楮布を再現した。先住民の習わしと現代アートにまたがる実践を試みる。

近年の活動に『Naadohū』ウイニペグ美術館(2021-2022年、カナダ)、カトマンズ・トリエンナーレ2021(ネパール)など。個展『Kōkōrangī ki Kōkōwai』ダウズ美術館(2020年、ニュージーランド)では、マオリ旧暦において方角だけでなく時を示す天体の動きをもとにした作品を発表。



《十三夜にうかぶ牡羊座β星の新月(Mutuwhenua. Te Ngahurumāturu o Ruahanui.)》
[部分] 2020

尾花 賢一

Obana Kenichi

1981年群馬県生まれ。秋田県拠点。

人々の営みや、伝承、土地の風景や歴史から生成したドローイングや彫刻を制作。虚構と現実を往来しながら物語を体感していく作品を探求している。近年の主な展示に「200年をたがやす」秋田市文化創造館(2021年)、「奥能登国際芸術祭2020+」(2021年、石川)、「VOCA展2021」上野の森美術館(2021年、東京)、「表現の生態系」アーツ前橋(2019年、群馬)など。また、「VOCA展2021」ではVOCA賞を受賞。



《上野山コスモロジー》2021
Photo: 上野則宏

黒田 大スケ

Kuroda Daisuke

1982年京都府生まれ。京都府拠点。

様々なリサーチを通じて、社会の中に佇み忘れられ無視された幽霊のような存在を見出しビデオやインスタレーションとして姿を与えるような作品をつくる。近年は自らが長く学び、制作の拠り所としてきた「彫刻」について、各地でリサーチを進めその再解釈を試みている。

主な個展に「未然のライシテ、どげざの目線」京都芸術センター(2021年)、「ハイパーゴースト・スカulptチャー」Kanzan Gallery(2019年、東京)、「不在の彫刻史2」3331 Arts Chiyoda(2019年、東京)。グループ展に「対馬アートファンタジア2020-21」対馬市内各所(2021年、長崎)、「本のキリヌキ」瑞雲庵(2020年、京都)、「瀬戸内国際芸術祭2016」小豆島(香川)など。



《ドゲザのためのプラクティス》2020

フロレンシア・サディール

Florencia Sadir

1991年サン・ミゲル・デ・トゥクマン<トゥクマン>(アルゼンチン)生まれ。カフアヤテ、サルタ(アルゼンチン)拠点。

アルゼンチン(サルタ、カフアヤテ)出身。アルゼンチンのトゥクマン国立大学にて造形芸術を学ぶ。トルクェット・ディ・テラ大学(ブエノスアイレス)でアーティスト・プログラム(2020-2021年)、フローラ・アルス+ナトゥーラ・スクール(ボゴタ、コロンビア)でスタディ・プログラムを修了。

サディールは、活動と生活拠点にしている地元のカルチャキエス渓谷との対話や継承されてきた知恵、培われてきたコミュニティを作品の題材にしている。インスタレーションや彫刻、ドローイングは、さまざまな建設用の粘土から、実用性を削ぎ落した籠細工のオブジェに使われる多様な植物繊維に至るまで、すべて自然素材によってつくられており、生産と労働と消費がライフサイクルから切り離されてしまった現代に内省を促し、人間と自然の解離という誤った理解を正すよう見る者に問いかける。アルゼンチン、チリおよびコロンビアのさまざまな公立美術館およびプライベート・コレクションに作品が所蔵されている。



《朱を歩く(Caminar sobre lo rojo)》2021

田村 友一郎

Tamura Yuichiro

1977年富山県生まれ。京都府拠点。

既存のイメージやオブジェクトを起点に、写真、映像、インスタレーション、パフォーマンス、舞台まで多様なメディアを横断し、土地固有の歴史的テーマから身近な大衆的テーマまで、幅広い着想源から現実と虚構を交差させた多層的な物語を構築する。それによりオリジナルの歴史や記憶には新たな解釈が付与され、作品は時空を超えて現代的な意味を問う。近年の主な個展に「Milky Mountain/裏返りの山」Govett-Brewster Art Gallery(2019年、ニュープリマス、ニュージーランド)、「叫び声/Hell Scream」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA(2018年)。国際展の参加はヨコハマトリエンナーレ2020、2019アジア・アート・ビエンナーレ(台中、台湾)、釜山ビエンナーレ2018(韓国)、SeMAビエンナーレ・メディアシティ・ソウル2014(韓国)など。



《The Spider's Threads/蜘蛛の糸》2018
Courtesy of the artist

鯉江 良二

Koie Ryoji

1938年愛知県生まれ。愛知県および岐阜県を拠点に活動。2020年愛知県にて没。

生地の常滑市で土管工場でのアルバイトで初めて土に触れて以降、常滑高等学校窯業科を卒業後はタイル製造業に携わりながら陶を学び、1966年には常滑市立陶芸研究所から独立した。自分の顔をかたどった《土に還る》シリーズ(1971年)や、反核を訴えた《証言》(1973年)、《チェルノブイリ》シリーズ(1989-90年)など、社会への強いメッセージを核に据えた作品を発表した。金属やガラスなど多様な素材を用いて制作しながらも、土を炎で焼くという行為を問い直し続け、因習的な「陶芸」の枠にとどまらない活動は、国内外で高く評価されている。「現代の陶芸 I いま、土と炎で何が可能か」山口県立美術館(1982年)、「現代の陶芸 1950-1990」愛知県美術館(1993年)などをはじめとした数々の展覧会に参加。



《チェルノブイリ》シリーズ
1989-1990
愛知県陶磁美術館蔵

有松地区 (名古屋市)

有松は慶長13年(1608年)、尾張藩が東海道の鳴海宿と池鯉鮒宿ちりゅうの間に開いた街です。以来400年以上にわたって有松・鳴海絞りの伝統が継承されてきました。「あいち2022」では、江戸と京都を繋いだ東海道沿いの町並み保存地区を中心に作品を配置します。名古屋市の町並み保存地区、国の重要伝統的建造物群保存地区であり、日本遺産にも選定された歴史的な風景には、江戸時代の浮世絵が蘇ったかのようなカラフルで祝祭的な絵画が屋外に展示されます。

有松における「STILL ALIVE」の考察としては、この地で継承されてきた伝統的な手仕事に対して、先住民文化を含む世界各地の多様な文化圏で受け継がれる手工芸、コミュニティの繋がり、口承伝承などに着目し、対話を試みます。また、伝統的な日本家屋の建築空間に応答しながら、インスタレーション、パフォーマンス、映像作品を通して、歴史、記憶、蓄積、移動、政治などに関わるさまざまな物語を紐解きます。

有松地区(名古屋市)で展示するアーティスト

アーティスト紹介は推奨する鑑賞ルート順に記載しています。

複数箇所	ミット・ジャイイン
旧加藤呉服店	イー・イラン 宮田 明日鹿
竹田家住宅	プリンツ・ゴラーム
竹田家茶室 栽松庵	ガブリエル・オロスコ
川村家住宅蔵	タニヤ・ルキン・リンクレイター
岡家住宅	ユキ・キハラ AKI INOMATA
株式会社張正	イワニ・スペース

ミット・ジャイイン

Mit Jai Inn

1960年チェンマイ(タイ)生まれ。チェンマイ(タイ)拠点。

少数民族ヨン族出身。1970～76年、パタヤのジッタパワン・カレッジで仏教を修行。1983年からバンコクのシラパコーン大学で美術専攻。1986年に渡欧、1988年ウィーン応用美術大学修士課程に入学。1988～92年、フランチ・ヴェストのスタジオ・アシスタント。1992年、タイに戻り、アーティスト数名とチェンマイ・ソーシャル・インスタレーション(CMSI)を開始。第4(最終)回のCMSIで、市民参加のための「Week of Cooperative Suffering」に着手。2015年、アーティストやキュレーターがタイや東南アジアの歴史や現在と向き合うためのカーテル・アートスペースをバンコクに設立。

個展に「Dreamworld」アイコン・ギャラリー(2021年、バーミンガム、英国)、「Color in Cave」マカン美術館(2019年、ジャカルタ、インドネシア)、グループ展に「SUNSHOWER」森美術館(2017年、東京)、第15回と21回(2012、2018年)のシドニー・ビエンナーレ(豪州)など、アーティスト主催の展覧会、美術館、ギャラリー、大規模展等で作品を発表。



©People's Wall 2019
Photo: Jim Thompson Foundation
Courtesy of the artist and Jim Thompson Foundation

イー・イラン

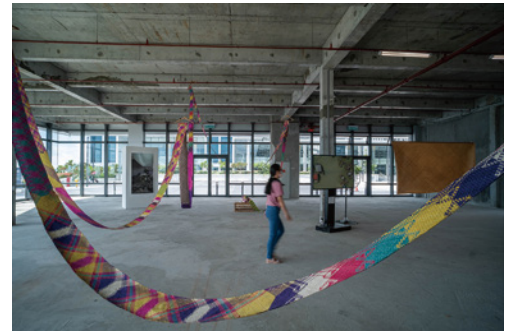
Yee I-Lann

1971年コタキナバル(マレーシア)生まれ。コタキナバル(マレーシア)拠点。

イー・イランは、東南アジアの歴史を題材に、植民地主義、権力、歴史の記憶などが現代社会に与える影響に言及する作品を制作。近年は、サバ州の先住民族らのコミュニティとの共同制作も行っている。

イーは、1994年からマレーシアの映画業界で美術の仕事を手掛け、2003年から2008年にかけてプロダクションデザイン部門を設立し、アカデミ・セニ・ブダヤ・ダン・ワリサン・ケバンサーン(国立文化遺産アカデミー/ASWARA)で講義も担当。foreversabah.orgのボードメンバーであり、コタキナバルにあるKota-K Studio & Kota-K Art Gallery(10×10×10ftのギャラリー・スペース)の共同設立者。

2021年に実施した展覧会は「Yee I-Lann & Collaborators: Borneo Heart」サバ国際会議場(コタキナバル、マレーシア)、「Yee I-Lann: Until We Hug Again」CHAT(香港)、インド洋工芸トリエンナーレ、ジョン・カーティン・ギャラリー(パース、豪州)、「Art Histories of a Forever War」台北市立美術館(台湾)、第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)など。



《ティカ・レーベン(マットのリボン)》2020
With weaving by Kak Roziah, Kak Sanah, Kak Kinnuhong, Kak Koddil
Private collection Photo: Flanagan Bainon

宮田 明日麿

Miyata Asuka

1985年愛知県生まれ。三重県拠点。

ニット、テキスタイル、手芸などの技法で作品を制作。自分や他人の記憶を用いて新たな物語を立ち上げ、顧みることなく継承されてきた慣習や風習に疑問を投げかけている。近年では、手芸文化を通して様々なまちの人とコミュニティを形成するプロジェクトを各地で継続している。おしゃべりしながら編む手を動かし、様々な世代が学び合い、何気ない会話を交わすなかで、見過ごされてきた出来事や家のなかの事柄も社会と密接につながっていることを参加者自身が再認識する作業を試みている。

近年の活動には「名古屋×ベナン同時開催展:名古屋文化発信局」Minatomachi POTLUCK BUILDING(2021年、愛知)、「金石手芸部」金沢21世紀美術館主催「自治区 金石大野アートプロジェクト『かないわ楽座』」金石地区(2021年、石川)、「織り目の在りか 現代美術 in 一宮」旧林家住宅(2018年、愛知)、「港まち手芸部」(2017年-進行中、愛知)など。



「こんにちは!港まち手芸部です。Vol.4」2021
Photo: 三浦和也
Courtesy of 港まちづくり協議会

プリンツ・ゴラーム

Prinz Gholam

2001年コラボレーションを開始。ベルリン(ドイツ)拠点。
ヴォルフガング・プリンツ 1969年ロイトキルヒ(ドイツ)生まれ。/ミシェル・ゴラーム 1963年ベイルート(レバノン)生まれ。

ヴォルフガング・プリンツとミシェル・ゴラームによるアーティスト・デュオ。2001年より活動を始め、身体表現と共同作業を基盤にライブ・パフォーマンスやビデオ、ドローイング、オブジェ、写真、テキストによるインスタレーションを発表。文化の規範とこの世界との間で、自己と身体を再び呼び起こし、配置し、調整することを現在進行形で試みる。

作品は文化的な枠組みの下で、意識的かつ意図的にその姿を顕在化させる。パフォーマンスでは、二人による現代人の身体動作を通して、精神と身体の問題を提起。また、双方の異なる文化を背景に、年齢、個性、教育、社会的背景や地理的出自にまつわる問いも投げかける。

主な発表歴として、マツトイオ(2021年、ローマ、イタリア)、ドクメンタ14(2017年、アテネ、ギリシャ/カッセル、ドイツ)などがある。



《時代の精神 L'esprit de notre temps(サンパオロ・デル・ブラジャーレ通り、ローマ)》2021
© Prinz Gholam

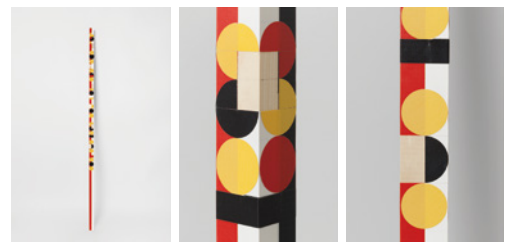
ガブリエル・オロスコ

Gabriel Orozco

1962年ベラクルス(メキシコ)生まれ。東京/メキシコシティ(メキシコ)拠点。

ガブリエル・オロスコは、60年代と70年代の壁画、写真、政治文学と関わりのあるメキシコの左派的な文化環境で育った。90年代初めにドローイング、写真、彫刻、インスタレーションによって、そして後に絵画においても評価を得た。彼の作品は、アートと日常との境界をあいまいにしつつ、複雑な幾何学と有機的な素材や偶然の要素とのバランスをとるものであることが多い。

2009年から2011年にかけてニューヨーク近代美術館(米国)、バーゼル市立美術館(スイス)、ポンピドゥー・センター(パリ、フランス)、テート・モダン(ロンドン、英国)を巡回した回顧展を含め、幅広く展覧会を開催。最近では、アスペン美術館(2016年、コロラド、米国)、東京都現代美術館(2015年、日本)でも作品を展示。2019年、メキシコ大統領は、メキシコシティのチャプルテペック公園内に文化センターを新設するにあたり、オロスコが文化事務局と共同で建設の監督にあたりと発表した。



《Roto Shaku 26》2015
Photo: Cathy Carver
Courtesy of the artist and Marian Goodman Gallery

タニヤ・ルキン・リンクレイター

Tanya Lukin Linklater

1976年コディアック(米国)生まれ。ノースベイ(カナダ)拠点。

タニヤ・ルキン・リンクレイターは、パフォーマンス、写真、映像、インスタレーション、テキストなど、先住民の暮らし、土地、生計の歴史を主軸に置いた作品を発表している。展示品、楽譜、先祖代々の持ち物に関連した彼女のパフォーマンスは、彼女の言う「感じられた構造」を生み出し、作品のコンセプトとその実践を執拗に探求している。

主な展覧会にニュー・ミュージアム・トライエニアル(2021年、ニューヨーク、米国)、サンフランシスコ近代美術館(米国)、シカゴ・ビエンナーレ国際建築展(2019年、米国)、EFAプロジェクト・スペース+パフォーマンス(ニューヨーク、米国)、アートギャラリー・オブ・オンタリオ(トロント、カナダ)、リマイ・モダン(サスカトゥーン、カナダ)など。2020年、初の詩集『Slow Scrape』を発表。受賞歴にHerb Alpert Award in the Arts for Visual Art(2021年、米国)。アラスカ南西部の先住民族アリユティーク人として、同地方のコディアック島で生まれ育つ。



《たくさんの心から生まれる増幅》2019
Courtesy of the artist and Catriona Jeffries

ユキ・キハラ

Yuki Kihara

1975年アピア(サモア)生まれ。アピア(サモア)拠点。

日本とサモアにルーツを持ち、領域横断的に活躍するアーティスト。ビジュアル・アート、ダンス、キュレーション活動を通して、アイデンティティ、政治、脱植民地化、エコロジー間の交差性を探り、支配的で一方的な歴史的ナラティブに疑問を投げかける。

2008年にメトロポリタン美術館(ニューヨーク、米国)の近現代美術部門ライラ・アチソン・ウォレス・ウィングで、彼女の芸術活動のハイライトとなる個展「Living Photographs」を開催。作品はその後、同館の収蔵品となる。

キハラ作品は、ロサンゼルス・カウンティ美術館(米国)、大英博物館(ロンドン)、クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館(ブリスベン、豪州)、高雄市立美術館(台湾)、ニュージーランド国立博物館テ・パバトンガレワ(ウェリントン)などに所蔵されている。第59回ヴェネチア・ビエンナーレ(2022年、イタリア)のニュージーランド代表。



《サモアのうた (Sāmoa no uta) A Song About Sāmoa - Fanua (Land)》2020/21
Photo: Glenn Frei Courtesy of Yuki Kihara and Milford Galleries Dunedin and Queenstown, Aotearoa New Zealand

AKI INOMATA

AKI INOMATA

1983年東京都生まれ。東京都拠点。

生きものとの関わりから生まれるもの、あるいはその関係性を提示している。主な作品に、都市をかたどった透明なヤドカリの殻をつくり実際に引っ越してもらった《やどかりに「やど」をわたしてみる》、近代以前には貨幣としても使用された貝殻を現代の通貨と結びつけ「貨幣の化石」を作りだす試みである《貨幣の記憶》など。

主な展覧に、十和田市現代美術館(2019年、青森)、北九州市立美術館(2019年、福岡)、ナント美術館(2018年、フランス)。国際展・グループ展に、「Broken Nature」ニューヨーク近代美術館(2021年、米国)、第22回ミラノ・トリエンナーレ(2019年、トリエンナーレデザイン美術館、イタリア)、タイ・ビエンナーレ2018(クラビ)など。



《彼女に布をわたしてみる》2021
Courtesy of Maho Kubota Gallery

イワニ・スカーセ

Yhonnie Scarce

1973年ウーメラ(豪州)生まれ。メルボルン(豪州)拠点。

豪州の先住民族アボリジニーのコカタとヌクスに出自をもつスカーセの領域横断的な創造活動は、ガラスや写真が内包する政治性と芸術性を探求する。作品ではアボリジニーの人々が植民地化政策のもとで長く被ってきた影響を扱う。なかでも、居住地からの強制移住や移転、家族から強制隔離された児童について言及。一族の歴史を軸に据えた作品は、祖先の力を借りながら、自らがパイプ役となり歴史の過ちを共有する場を提示する。

最近の発表歴に、「Exposure: Native Art and Political Ecology」IAIA現代先住民芸術美術館(2022年、サンタフェ、米国)、「Yhonnie Scarce: Missile Park」(2021年、オーストラリア現代美術センター、メルボルン/インスティテュート・オブ・モダンアート、ブリスベン、豪州)、「Looking Glass: Judy Watson and Yhonnie Scarce」(2020年、タラワラ美術館/フリンダース大学美術館、アデレード、豪州)など。



《霧箱 (Cloud Chamber)》[部分] 2020
展示風景: タラワラ美術館(豪州)
Photo: Andrew Curtis Image courtesy of the artist and THIS IS NO FANTASY

国際芸術祭「あいち2022」のパフォーミングアーツでは、演劇・ダンス・音楽といった従来の舞台芸術に加え、これまで現代美術の文脈で語られてきたパフォーマンス・アートにも注目します。とりわけ1960年代以後に花開いたパフォーマンス・アートが、既存の表現形式やジャンルを乗り越える芸術的探究から誕生した歴史へのオマージュとして、領域横断性と実験性に富んだプログラムを展開します。現代美術展参加作家によるパフォーマンスや、パフォーミングアーツ参加作家によるパフォーマティブな展示などが相互に響き合い、会期を通じて芸術祭にダイナミズムを作り出します。

具体的には以下の3つの特徴のもと、愛知県芸術劇場を中心とした会場で展開します。

歴史的なパフォーマンスを「再演」することで現代を捉え直す

フルクサス、実験音楽、舞踏など、20世紀の芸術史を更新した数々の前衛芸術。それらの代表的なパフォーマンスや行為、思想を現代に「再演」ないし「再解釈」することで、歴史から現在を照射します。また、実際の上演には立ち会っていない多くの観客が、歴史を学び現代との接続を楽しむためのツールとして、レクチャーやトークなどを企画します。

VRなど最新のテクノロジーによって「パフォーマンス」の領域を拡張する

パフォーマンスを構成する身体の動きや身振り、声、ナラティブ、音、映像など時間的な要素に加え、VRなど最新のテクノロジーを駆使し、パフォーマンスの領域を拡張する新たな創作に取り組みます。仮想と現実が交錯する地点に生成する、未知の体感を探究します。

コロナ禍を経て、生とケアをめぐる問いを開く

長期化するパンデミックで個々の身体に関する状況が激変する中、身体に立脚する表現においても、生や生存をめぐる様々な問いが生まれているはずです。健常者と障害者、ケアする者とされる者など、近代的な価値観で引かれた境界線を揺さぶり、身体をめぐる新たな倫理を模索するアーティストの挑戦に立ち会います。

	アーティスト名 (グループ名を含む)	生/結成年(没年)	出身/結成地	活動拠点	掲載頁
NEW ○	足立 智美 ADACHI Tomomi	1972	日本	ドイツ	20, 45
NEW	バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre	1991結成	豪州	豪州	44
NEW	ジョン・ケージ John CAGE	1912(1992)	米国	米国	45
NEW	トラジャル・ハレル Trajal HARRELL	—	—	ギリシャ/ スイス/米国	43
NEW	今井 智景 IMAI Chikage	1979	日本	日本	46
NEW ○	百瀬 文 MOMOSE Aya	1988	日本	日本	22, 47
NEW	ラビア・ムルエ Rabih MROUÉ	1967	レバノン	ドイツ	48
NEW	中村 蓉 NAKAMURA Yo	1988	日本	日本	46
NEW	スティーヴ・ライヒ Steve REICH	1936	米国	米国	43
NEW ○	塩見 允枝子 SHIOMI Mieko	1938	日本	日本	17, 44
NEW	アピチャツポン・ウィーラセタクン Apichatpong WEERASETHAKUL	1970	タイ	タイ	47

○は現代美術展へも参加。

アーティスト名は原則として姓のアルファベット順。ただし、出身国や地域の慣習またはアーティスト自身の希望により、姓名順ではない表記も一部あります。参加アーティストの生没年、出身地、活動拠点は、作品制作の背景にある社会的、文化的な文脈の参考として表記しています。

現代美術展で展示に付随したパフォーマンスを予定しているアーティスト

シアスター・ゲイツ ▶ p.34

迎 英里子 ▶ p.32

プリンツ・ゴラーム ▶ p.39

笹本 晃 ▶ p.21

現代美術展で展示に付随したVR作品を予定しているアーティスト

ローリー・アンダーソン&黄心健(ホアン・シンチェン) ▶ p.26

荒川 修作 + マドリン・ギンズ ▶ p.24

許家維(シュウ・ジャウエイ) ▶ p.30

スティーヴ・ライヒ Steve Reich

ジュリアード音楽院、ミルズ・カレッジにて音楽を学ぶ。ダリウス・ミヨー、ルチアーノ・ベリオらに師事。それ以前にはコーネル大学にてルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの哲学を学んでいる。1965年テープ作品《イツ・ゴナ・レイン》、1966年《カム・アウト》発表。1966年より自身のアンサンブルを結成し、世界各国で演奏活動を行う。1991年、自身のアンサンブル「スティーヴ・ライヒ・アンド・ミュージシャンズ」で初来日し、東京と大阪でコンサートを行う。1997年には、複雑なユダヤ教／キリスト教／イスラム教の関係をテーマに据えた『ザ・ケイヴ』を映像作家のベリル・コロットと制作し、東京でも来日公演を行う。音楽というジャンルを超え、広くアートに多大な刺激を与え続ける現代作曲家の一人である。

今回は、《ダブル・セクステット》《ディファレント・トレインズ》を中心に、古代中世の音楽から現代のヴィジュアルアート、コンセプチュアル・アートまで深いつながりのあるライヒの代表作にあらためて光を当てる。彼の作品が有する音楽性と今日性を十全に体感できるコンサートを、ライヒの音楽を敬愛する経験豊富な精鋭演奏家により行う。

- 2009 《ダブル・セクステット》ピューリッツァー賞(米国)、音楽部門受賞
- 2006 第18回高松宮殿下記念世界文化賞、音楽部門受賞
- 1990 《ディファレント・トレインズ》グラミー賞(米国)、最優秀コンテンポラリー・ミュージック賞受賞

Photo: Jeffrey Herman



公演情報

『スティーヴ・ライヒ〜スペシャル・コンサート』

- | | |
|----------------|------------------|
| 出演: 中川賢一(ピアノ) | 山田岳(エレクトリックギター) |
| 石上真由子(ヴァイオリン)* | 早田類(ヴァイオリン) |
| 福富祥子(チェロ)* | 若林かをり(フルート)* |
| 上田希(クラリネット)* | 畑中明香(ヴィブラフォン)* |
| 有馬純寿(エレクトロニクス) | ほか * = アンサンブル九条山 |

監修: スティーヴ・ライヒ

トラジャール・ハレル Trajal Harrell

振付家、ダンサー、研究者として、世界の複数の都市を拠点に活動するトラジャール・ハレル。ダンスの歴史、とりわけ1960年代のニューヨークで生まれたポストモダンダンスやヴォーギング*を交差させた独自の振付で、21世紀の舞踊史にあらたな刺激を与え続けている。2019年からはスイスのシャウシュピール劇場のハウスディレクターであり、シャウシュピールダンスアンサンブルの初代演出家である。

そのハレルにとって特別な存在が、舞踏の創始者である土方巽(1928-1986年)だ。2013年より継続してきた舞踏研究とその再解釈が、ついに2022年の最新作『Sister or He Buried the Body』として結実する。私たちは、ハレルが自身の身体と身振りを媒介に「土方巽をヴォーギングする」特別な瞬間に立ち会うことになるはずだ。さらに今回は2019年のソロ作品『Dancer of the Year』とのダブルビル上演を行う。

*ヴォーギング

1960年代にニューヨークの有色人種とラテン系のLGBTコミュニティから生まれたダンスのスタイル。ファッション誌『VOGUE』に由来し、モデルがランウェイでポーズを決めるように、ボーjingの連続と反復で魅せる身振りが特徴的。

- 2022 『Solo Performance Exhibition』 クンストハレ・チューリッヒ、チューリッヒ(スイス)
- 2020 『Dancer of the Year Shop #3』 サンパウロ・ビエンナーレ、サンパウロ(ブラジル)
- 2017 『Hoochie Koochie』 バービカンセンター、ロンドン(英国)
- 2016 『Caen Amour』 アヴィニョン演劇祭、アヴィニョン(フランス)
- 2013 『Used Abused and Hung Out to Dry』 MoMA、ニューヨーク(米国)
- 2012 『Antigone Sr./Twenty Looks or Paris is Burning at The Judson Church (L)』 ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス・アワード(ベッシー賞)(米国)

Photo: Orpheas Emirzas



バック・トゥ・バック・シアター Back to Back Theatre

[ODDLANDS] 2017
Photo: Jeff Busby



知的障害のある俳優を中心に、30年以上オーストラリアを拠点に活動続ける劇団。2013年フェスティバル/トーキョー『ガネーシャVS.第三帝国』で初来日。2018年東京芸術劇場主催『スモール・メタル・オブジェクト』で再来日。社会の闇の部分に鋭く照射する作品は世界的に高い評価を得ている。インクルーシブ・シアターの先駆けであり「息苦しい現代社会」でいかにしたたかに生きることが可能かを常に問いつける稀有な創作集団が見せるフィクションの力は、私たちへの大きな投げかけとなる。

今回は、最も奇妙な場所で小さな希望を見つけることができた2人のありそうもないヒーローについての物語『ODDLANDS』と『SHADOW』の2本を日本語字幕付きで本邦初公開。さらに、脚本&監督のブルース・グラッドウィンらによるポスト・トークも併せて実施を予定している。

2014 エディンバラ国際フェスティバル、エディンバラ(英国)、ヘラルド・エンジェル批評家賞受賞
2012 ヘルプマン・アワード(豪州)、最優秀オーストラリア作品賞受賞
2008 ニューヨーク・ダンス・アンド・パフォーマンス・アワード(ベッシー賞)(米国)
2005 シドニー・マイヤー・パフォーマンス・アーツ・アワード(豪州)、グループ賞受賞

塩見 允枝子 Shiomi Mieko

現代美術展にも参加 ▶ p.17

Photo: 前澤秀登
提供: 東京都現代美術館



1961年東京藝術大学楽理科卒業。在学中より級友達と「グループ・音楽」を結成し、テープ音楽の制作や即興演奏を行う。1964年渡米し、フルクサスの活動に参加。1965年スペシャル・ポエムのシリーズを開始。帰国後は、イベントをパフォーマンス・アートとしても発展させる。1970年大阪へ移住。1990年ヴェネチアのフルクサス・フェスティバルに参加したことから、国内外での多数のフルクサスの企画に携わるようになる。1990年代には電子テクノロジーに興味を持ち、パフォーマンスに取り入れる。以後、音楽やパフォーマンス作品の作曲、視覚作品の制作など、活動は多岐にわたる。2014年より京都市立芸術大学・芸術資源研究センター特別招聘研究員。

今回は、1966年から2022年(新作)までのイベント作品から、塩見自身が芸術祭のテーマに合わせて上演作品を選び、「詞と概念を演奏する」、及び「ピアノ×パフォーマンス」の2プログラムを上演する。

2014 「フルクサス・イン・ジャパン 2014」東京都現代美術館、東京
2013 「塩見允枝子とフルクサス」国立国際美術館、大阪
2001 「フルクサス裁判」国立国際美術館、大阪
1995 個展「フルクサス・バランス&バランス・ポエム」J&Jドングエイ画廊、パリ(フランス)
1994 「フルクサス・メディア・オペラ」ジーベックホール、神戸
1990 フルクサス・フェスティバル、ヴェネツィア(イタリア)

公演情報

塩見允枝子パフォーマンス作品

『～音と詞と行為の時空～』

出演: 植松琢磨 大井卓也 上中あさみ 中村圭介
橋爪皓佐 橋本玲子 森本ゆり 山根明季子

足立 智美 Adachi Tomomi

現代美術展にも参加 ▶ p.20

Courtesy of the artist



パフォーマー／作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン(ロンドン、英国)、ハンブルガー・バーンホフ美術館(ベルリン、ドイツ)、ポンピドゥー・センター(パリ、フランス)、ベルリン・ポエジー・フェスティバル(ドイツ)など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。

今回は、ジョン・ケージが晩年に取り組んだ『ユーロペラ3&4』を演出する。また音響詩をはじめとするソロ・パフォーマンスを行う。

- 2021 オペラ『ロミオがジュリエット』文化庁芸術祭、音楽部門大賞受賞(関西参加公演の部)
- 2019 アルス・エレクトロニカ、リンツ(オーストリア)、優秀賞受賞
- 2012 DAADベルリン芸術家プログラム招聘
- 2009 ACCの招聘によりニューヨーク滞在
- 2007 『ユーロペラ5』(日本初演)演出、サントリーサマーフェスティバル、東京

公演情報

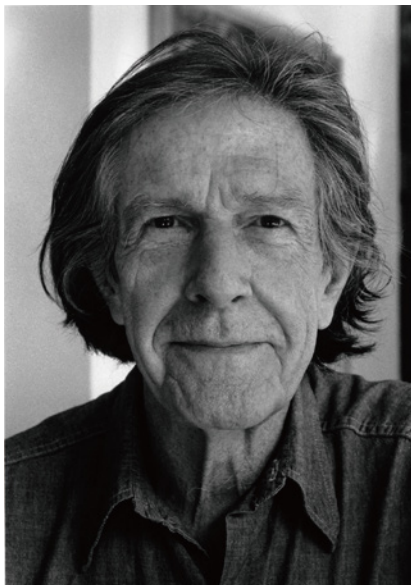
『ユーロペラ3&4』 ジョン・ケージ公演情報を参照 ▶ p.45

足立智美パフォーマンス

『音響詩ソロ・パフォーマンス』

ジョン・ケージ John Cage

Photo: Christopher Felver



20世紀を代表する作曲家、詩人、思想家、キノコ研究者。マース・カニングハムら舞踊家、マックス・エルンストラ美術家、バックミンスター・フラーら思想家・建築家とも深い交流があった。1940年代に禅を学び東洋思想への関心を深める。作曲過程に中国の易経を用いる「チャンス・オペレーション」、演奏や聴取の過程に偶然性が関与する不確定性の音楽を開始し、作曲家が音のコントロールを行わない、偶然性の音楽を確立する。またグランドピアノの弦にゴム・ボルトなどを挟んで音色を打楽器的なものに変化させるアリペアド・ピアノを考案した。

今回は、ケージが晩年に取り組んだ『ユーロペラ』シリーズから、『ユーロペラ3&4』を、足立智美の演出により上演する(日本初演)。『ユーロペラ』は、オペラ歌手の歌、ピアノ、蓄音機、音響、照明などの要素が、コンピューターから出力された乱数に沿って演奏される、ケージの大規模な演劇的作品の代表作。今回、歌手パートのうち2名は能楽師が担当する。

- 1994-1995(没後) 「ローリーホーリーオーバー・サーカス」水戸芸術館、茨城
- 1989 京都賞(思想・芸術部門)受賞、京都
- 1987 『ユーロペラ1&2』フランクフルト歌劇場委嘱初演、ドイツ
- 1952 『4分33秒』マーベリック・コンサートホール、ウッドストック、ニューヨーク(米国)

公演情報

『ユーロペラ3&4』

演出: 足立智美

出演: 佐野登(能楽師シテ方) 松田若子(能楽師シテ方) 西本真子(ソプラノ)
福原寿美枝(メゾ・ソプラノ) 中井亮一(テノール) 駒田敏章(バリトン)
黒田亜樹(ピアノ) 矢野雄太(ピアノ) 有馬純寿(音響)
中山奈美(照明)

中村 蓉 Nakamura Yo

中村蓉ソロダンス公演『ジゼル』2021
Photo: 前澤秀登



2000年代より、本格的に活動を開始。映画や小説の名作を独自の解釈でダンス作品として再構築したのも多く、小津安二郎の映画や松本清張の小説『顔』を基にした作品でも注目を浴びる気鋭の振付家兼ダンサー。近藤良平、小野寺修二、室伏鴻らの振付アシスタントも務め、室伏鴻振付『墓場で踊られる熱狂的なダンス』等に出演。ヨーロッパやアジアなどでも公演を重ね、近年ではオペラの振付や演出なども精力的に行っている。

今回上演する『ジゼル』は、言わずと知れた古典バレエの代名詞ともいべき名作を、今を生きるひとりの女性としてのダンス作品へと昇華させようとする意欲的な試み。ジゼルとアルプレヒト、そしてヒラリオンの複雑な関係を軸に展開する「愛と生死」をめぐる物語は良く知られているが、中村のそれは、本作に宿るテーマを、極私的な解釈で大胆に再構築し、ヴァージニア・ウルフの詩的テキストなどを引用しつつ、現代人に刺さるソロ・ダンス作品としてユーモラスかつシリアスに踊ってみせる。

2021 二期会ニューウエーブ・オペラ劇場『セルセ』めぐろパーシモンホール大ホール、東京
2020 『ジゼル 特別ver.30分版』(映像作品)
2019 『理の行方vol.3 Pendulum』横浜ダンスコレクション青空ダンス、神奈川
2016 第5回エルスール財団新人賞、コンテンポラリーダンス部門受賞
2013 横浜ダンスコレクションEX、審査員賞、シビウ国際演劇祭受賞

公演情報

『ジゼル』

振付・出演：中村蓉

今井 智景 Imai Chikage

© Junichi Takahashi / Martin Boverhof



2002年愛知県立芸術大学作曲科卒業、2009年アムステルダム音楽院修士課程修了。作曲を湯浅譲二、松井昭彦、ウイム・ヘンドリクス、ファビオ・ニーダー各氏に師事。「音楽におけるベクトル (Vector in music)」を探求し、音楽自身が有機体であることを意識して作曲する。その延長線上に、映像や写真、コンテンポラリーダンス、舞台美術などとの交流を深めた作品が多数あり、演出も手がける。近年では「社会と共存する芸術活動」を追求し、愛知における現代音楽の裾野を広げるレクチャー&コンサートシリーズ「クロスバウンダリー」や現代音楽アカデミーなどの開催、中川運河助成事業ARToC10やあいちトリエンナーレへの参加など地域に根ざす活動を行っている。

今回は、演者がつけてこそ生きるといわれる能面に、現代音楽と写真と映像で息を吹き込むことにチャレンジした《トランセンドント - mirror》を含め、5つの今井作曲作品から構成する舞台作品を上演。豊橋市魚町能楽保存会の協力により400年以上前の能面打師による作品「愛知県指定文化財(一部重要文化財)」に現代芸術家が対峙する。

2020 《Morphing of Es ist ein Ros' entsprungen》
アンサンブル・モデルン40周年記念公演作品献呈、フランクフルト(ドイツ)
2016 《Masque》今井智景作品個展<HANATSUmiroir定期公演>、ストラスブール(フランス)
2012 《towards G》ミュージック・フロム・ジャパン委嘱作品初演、ニューヨーク(米国)
2009 《Simulgenesis》第4回アンサンブル・モデルン国際作曲家セミナー参加作品初演、フランクフルト(ドイツ)
2008 《Vectorial Projection IV - fireworks》フェスティバル・ドートンヌ委嘱作品初演、パリ(フランス)

公演情報

出演・スタッフ： マリベス・デイグル(ソプラノ) 江頭摩耶(ヴァイオリン)
畑中明香(打楽器) 稲田優太(映像・オペレーション)
マーティン・ボヴァーホフ(映像) たかはしじゅんいち(写真)

アピチャポン・ウィーラセタクン Apichatpong Weerasethakul

これまで30年にわたり、『ブンミおじさんの森』(2010年カンヌ国際映画祭パルムドール受賞)や最新作『MEMORIA メモリア』(2021年同審査員賞受賞)をはじめ、数々の傑作で人類の映画史を更新し続ける映画監督アピチャポン・ウィーラセタクン。タイのチェンマイを拠点とする映画制作と並行して、映像インスタレーションやパフォーマンスなどのアート作品も次々と発表し、世界中に静かな熱狂をもたらし続けている。

今回日本のクリエイターたちとの国際共同制作のもと、初のVRパフォーマンスの制作に着手する。目には見えない霊的な存在たちとの交感、眠りや病とともにある身体、宙吊りのまま円環する時間感覚など、あたかもパンデミック後を先取りしてきたかのような彼の映像世界は、VRという技術によってどのように拡張するのだろうか。作曲家・坂本龍一が手がけるサウンドやインタラクティブな光の波動がもたらす新境地に、期待が高まる。

Image photo
Courtesy of Apichatpong Weerasethakul



- 2019 アルテス・ムンディ、カーディフ(英国)、アルテス・ムンディ8受賞
- 2015 『フィーバー・ルーム』アジア芸術劇場、広州(韓国)
- 2013 第11回シャルジャ・ピエンナーレ、シャルジャ(アラブ首長国連邦)、金賞受賞
- 2012 ドクメンタ(13)、カッセル(ドイツ)
- 2010 『ブンミおじさんの森』第63回カンヌ国際映画祭、カンヌ(フランス)、パルムドール受賞

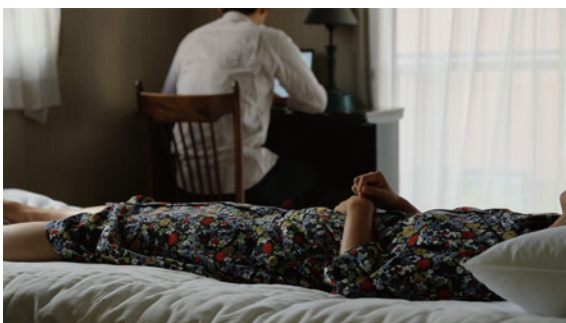
百瀬 文 Momose Aya

現代美術展にも参加 ▶ p.22

自他の身体から生まれる違和感やコミュニケーションの不均衡、そこに生じるセクシャリティやジェンダーをめぐる問い、それらを「演じること」を通じて考察する映像やパフォーマンスを制作する百瀬文。近年では「セラピーパフォーマンス」と銘打ち、東洋医学に基づく鍼治療を取り入れたパフォーマンスをはじめ、ケアと演劇的体験が両立する作品も開拓している。

今回、愛知県美術館に収蔵された近年の代表作《Jokanaan》の展示上映に加えて、パフォーマンス部門でも新作を発表する。接触がタブーとなったコロナ禍において、ケアする者とされる者、施術者と患者、健常者と障害者といった、近代的な価値観によって分離された関係を超越し、欲望の根源に触れるセラピー／パフォーマンスの創作を試みる。

《Social Dance》2019
大阪中之島美術館蔵



- 2021 『鍼を打つ』シアターコモンズ21、東京
- 2021 『I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U』パフォーマンスフェスティバルZIPPED、東京
- 2016 「六本木クロッシング2016展:僕の身体、あなたの声」森美術館、東京
- 2015 「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」国立新美術館、東京
- 2014 個展「サンプルボイス」横浜美術館アートギャラリー1、神奈川

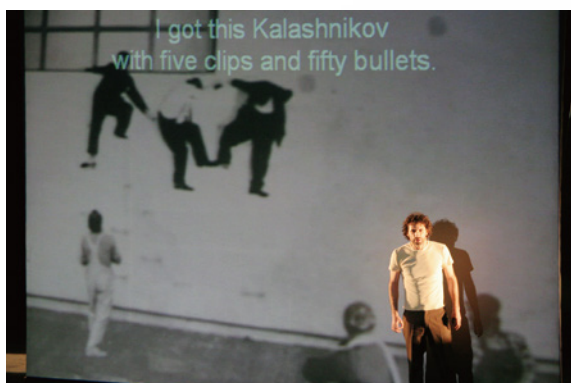
ラビア・ムルエ

Rabih Mroué

レバノン出身で、ベルリンを拠点に活動するアーティスト、ラビア・ムルエ。過去30年にわたり、今日の中東アラブ世界の混迷と歴史の空白を批評するパフォーマンスを発表し続けてきた。共同体の歴史と個人の物語、虚構と現実の境界線上で戯れる作品群は、これまで世界の主要な劇場や美術館、フェスティバルで注目され続け、日本でも2004年以来6度の来日公演を重ねている。

今回「あいち2022」のテーマに応答し、パフォーマンス・アート史を題材にした代表作『Who's Afraid of Representation? (表象を恐れるのはだれ?)』(2005年)を、17年の時を経てアップデート上演する。1960-70年代に花開いたボディアートの自傷的アクションの数々を舞台上に召喚しながら、実際にベイルートで起こった殺人事件を併置することで、西洋視座で編まれ続ける芸術の概念と歴史に水を差す。

『Who's Afraid of Representation?』2005
Photo: Houssam Mchaimch



- 2019 『Borborygmus』 Home Works Forum 8、ベイルート(レバノン)
- 2012 ドクメンタ(13)、カッセル(ドイツ)
- 2009 『フォト・ロマンス』 アヴィニョン演劇祭、アヴィニョン(フランス)
- 2007 『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』 東京国際芸術祭、東京
- 2002 『BIOKHRAPHIA-ビオハラフイア』、ベイルート(レバノン)

「あいち2022」のラーニング・プログラムは、「アートは一部の愛好家のためのものではなく、すべての人がそれぞれのやり方で楽しみ享受するもの」という基本的な考え方に基づいています。

例えば、揃いの青いハッピを着て神輿を担いだり、銀玉鉄砲やクラッカーで遊んだりした地元の神社の祭りのような芸術祭。それは、芸術祭を見に来た人、参加した人がコミュニティの一員として参加している実感、社会に空間的・時間的に包摂されていると感じることなのではないでしょうか。そのために「難解な現代アート」というイメージやレッテルを払拭し、素の目で作品と向き合い、アートとの直接的な関わりを促すことを、「あいち2022」のラーニング・プログラムでは実践していきたいと考えています。

そもそも現代アートは、私たちと同じ様に、世界の何処かに暮らす個人やグループが作り出したものです。鑑賞者はそこにある作品を通して、どこかの誰かが見つけ出した視点から世界に出会う機会を得るのです。そうすることで、普段は見過ごしていた物事に新しい価値を発見したり、自分と歴史・社会がつながっていることに気づいたり、生きていることの尊さとおかしみを感じたり、と様々な反応が自らの内に起こってくる。アートに触れることと、世界を知ること、そして自らを知ることとは不可分に結びついているのです。

欧米、アジア太平洋、ラテンアメリカ、アフリカなど世界各地から現代アートが集まるこの芸術祭は、たくさんの地域のたくさんのアーティストたちの作品と出会い、たくさんの視点から物事を見たり考えたりするチャンスです。世界についての認識を広げ、深め、翻って自分自身を見つめ直す、そうした活動の総体を「ラーニング／学び」と位置づけ、それを実現するためのプログラムを提供していきます。

アートを通じた学びによって、これからも起こり続けるであろう未知の事態を乗り越える力、まさに「今、を生きる力」を一人一人が獲得し、多様な未来の可能性に開かれた世界を実現するために。

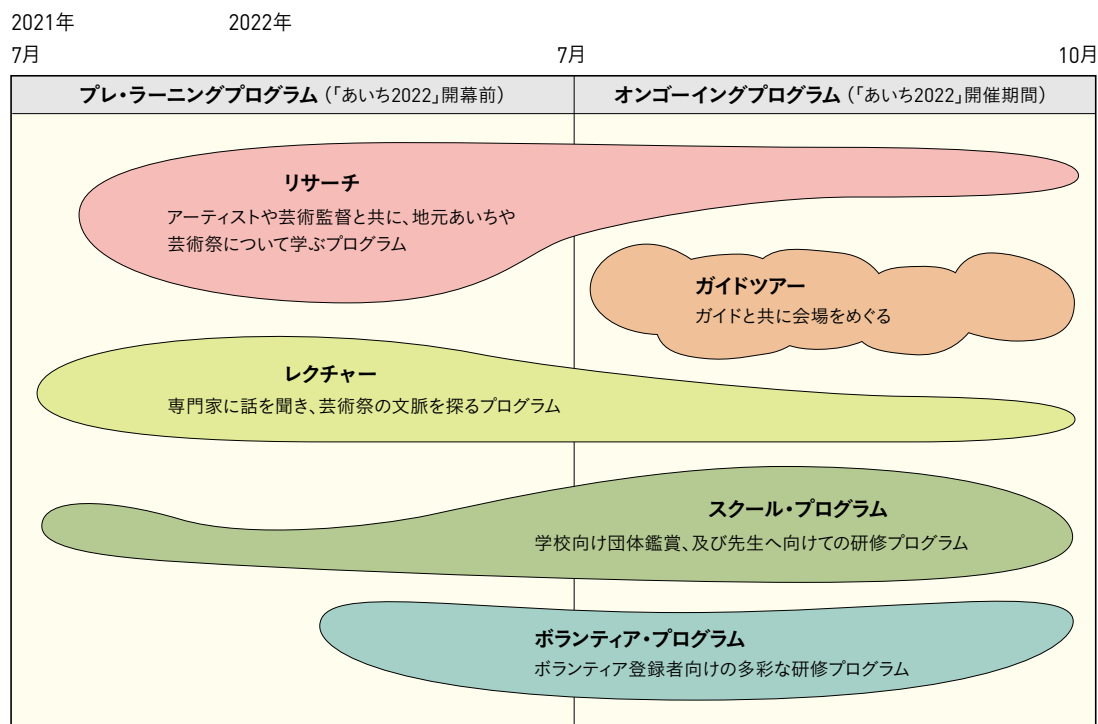
ラーニング・チーム

ラーニングのコンセプト

1. 包摂：参加することで、自らが祝福されていると感じることができる
2. 多様性の肯定：同時代を生きる作家によって表現される多様な「ALIVE(生きている)」のあり方、その視点に触れる
3. 自分を知り、世界を知る：愛知という地域の歴史的・文化的背景を知り、ローカル独自の視点を持つことで、世界中から集まってくる様々な作品を通じた世界の見方との出会いの準備とする

これらを実現するため、プレ・ラーニングプログラムとして昨年の夏より活動を続けてきました。今後は、芸術祭出品作品との様々な出会い方を提供するプログラムを企画しています。

ラーニングのプログラム



プログラム概念図

リサーチ

世界のあらゆる表現と向き合うために、自分たちの立っている場所を知ることを重視し、芸術祭が開催される「愛知」についてリサーチするプロジェクトです。アーティストと公募によって集まった参加者が歴史・文化・生活などの観点から数ヶ月かけてリサーチし、その結果は芸術祭会期中に展示され、ワークショップ等を通してさらに発展します。

レクチャー

芸術祭や愛知、美術や舞台芸術を、歴史的かつ批評的に捉えることで、多角的な視点から「芸術祭」にアプローチするレクチャーです。2021年から始まったこのシリーズは、アーカイブを公式Webサイトで公開しています。芸術祭開幕後は、アーティストやキュレーター、キュレトリアル・アドバイザーによるトークやディスカッションも予定しています。

ガイドツアー

来場者が様々な形で作品と出会う機会を作ります。作品解説や対話型鑑賞を通じて、作品の見方や理解、鑑賞体験を広げ、深めていきます。キュレーターやボランティアなどが日本語以外の言語や視聴覚に障害のある方々なども含め多様なニーズに合わせて「芸術祭」をガイドします。

スクール・プログラム

芸術祭と学校現場をつなぐため、教育関係者向けの研修プログラムや、児童・生徒向けの団体鑑賞プログラムを用意します。

ボランティア・プログラム

研修を通じて「対話型鑑賞」の手法を学んだボランティアが、来場者と対話的な鑑賞の機会を創出します。また、「会場運営」や「対話型鑑賞による案内」そして「ガイドツアー」など様々な活動を通して芸術祭を支えます。

リサーチ

愛知と世界を知るためのリサーチ

2021年秋より、6組のアーティストが公募による参加者と共に、フィールドワーク、ワークショップ等、グループごとのテーマに沿って自由な形式でリサーチ・プロジェクトを順次スタートしています。「あいち2022」の開催期間中にはその成果を展示・発表するほか、ワークショップやイベントなどを開催します。

展示会場：愛知芸術文化センター 8F J室

※以下、アーティスト名の姓のアルファベット順に紹介。

Åbäke & LPPL 『Fugu Gakko (河豚学校) 』

2000年にパトリック・レイシー、ベンジャミン・ライヘン、カイサ・ストール、マキ・スズキによって結成されたコレクティブ・アバケは、主にアート、デザイン、建築、音楽、あるいはダンスという領域において活動、そしてその手法を彫刻、パフォーマンス、展覧会制作、執筆、またはワークショップへと広げている。「あいち2022」では2003年にトルコ沖で不思議にもフグが見つかったことが出発点になりイスタンブールで行なった「河豚学校」(2018年)を愛知にて展開。フグを起点に問いをたて、環境問題や地政学、人類学、現代美術などさまざまな分野を探索し学ぶことを提案する。

Åbäke & LPPL Åbäke 2000年結成/LPPL 2011年生まれ。ロンドン拠点。

2021年には東京のCLEAR GALLERY TOKYOにて「河豚学校 part1 2021」、また、ソフィ・デアレンとラディム・ベスコと協働し、東京藝術大学大学美術館にて藝大生と共につくり出した「Which Mirror Do You Want to Lick?(どの鏡を舐めたい?)」のキュレーションを行う。

(Fugu Gakko) 2021, CLEAR GALLERY TOKYO



AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ] 『ドライブ・レコーダー(仮)』

市井の人々の私的な記録と記憶に着目したアーカイブづくりに取り組んできた活動団体のAHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]は、近年注目されている運転免許証の「自主返納」という制度に着目し、免許証返納の岐路に立つ当事者とその家族の経験を振り返ることで、現代社会に生きる私たちと自動車との関わりを見つめ直す。

AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]

2005年に大阪にて始動。主な活動として、日本最長寿記録を樹立したアジアゾウ、はな子との記念写真を一般から公募して制作した記録集『はな子のいる風景 イメージを(ひっ)くりかえす』武蔵野市立吉祥寺美術館(2017年)、ひとりの女性が記し続けた10年間の育児日記をたよりに、東日本大震災後の10年間を振り返る展覧会「わたしは思い出す 10年間の子育てからさぐる震災のかたち」せんだい3.11メモリアル交流館(2021年)などがある。

8ミリフィルムの提供者宅で実施する「出張上映会」のひとつ



井上 唯 『"ほの国"を知るためのプロジェクト(仮)』

古代から海や河川、陸路の交通を介して東西を結ぶ人・モノ・文化・情報が盛んに行き交う場所だった「ほの国」(*)でのフィールドワークを通して、資源(知恵、技法、素材、民話、文様など)を収集・活用し、土地の物語を含んだ新たな交易品を作り、「市」を開くことで、「移動」や「交易」について考え、この世界の在り方を改めて想像していくプロジェクトを展開する。

井上 唯 Inoue Yui

愛知県豊橋市生まれ。滋賀県在住。主な展覧会に「Soft Territory かかわりのあわい」滋賀県立美術館(2021年)、ヨコハマ・パブリックエンターテインメント2017(神奈川県)、「SOKO LABO」瀬戸内国際芸術祭2016(香川)などがある。

*「ほの国」とは

日本列島のちょうど真ん中にあたる愛知県の東部にある東三河地域のこと。古代、この地に存在した「豊かな実り」を意味する「穂の国」に由来。奥三河の山々から豊川の流れを中心に豊橋平野から渥美半島までをさす。

『暮らしと作るのあわい』2021
Photo: Koji Tsujimura



眞島 竜男『MA・RU・GO・TO あいち feat. 三英傑』

愛知が生んだ戦国時代の「三英傑」(織田信長、豊臣秀吉、徳川家康)に着目し「MA・RU・GO・TO あいち feat. 三英傑」と題した巨大壁画を制作するプロジェクトを始動。リサーチでは、研究者に会いに行ったり、フィールドワークに出かけたりなど、共に考え手を動かし実践していく活動を展開する。

眞島 竜男 Majima Tatsuo

1970年東京都生まれ。滋賀県拠点。近年の主な発表に、「山と群衆(大観とレニ)／四つの検討(TPAM 2019 Version)」blanClass (2019年、横浜)、「開く、折られたむ、反転する、閉じる:河原温ダイアグラム(粘土)」ラレー街11番地のFoujita／藤田」豊田市美術館(2016年、愛知)、「岡山芸術交流2016」岡山県天神山文化プラザ(2016年)、「PARASOPHIA: 京都国際現代芸術祭2015」京都市美術館(2015年)がある。

「眞島竜男 踊ります 2016年参議院選挙」



猩々コレクティブ『猩々大発生』

アーティストで「あいち2022」ラーニング・キュレーターの本山高之を中心として「猩々コレクティブ」を結成し、愛知県の南部の一地域のお祭りに登場する大人形 猩々(*)に焦点をあてたプロジェクトを実施。コレクティブでは、猩々のリサーチや制作、芸術祭会期中のイベント企画など様々なプログラムを展開する。愛知県児童総合センターと協働し、県内の児童館で猩々を制作するワークショップも実施。

*「猩々(しょうじょう)」とは

愛知県の名古屋市区(鳴海、有松)や南区(笠寺)、東海市、大府市、豊明市などの地域で、主に秋に開催される祭礼において登場する大人形のことを指す。地域や時代によって扱われ方は異なるが、お祭りで練り歩きながら、参列した子どもたちを追いかけ、手に持つ棒で叩いたり撫でたりすることで、その子どもの無病息災を願うものとされている。

笠寺猩々保存会の猩々



徳重 道朗『穴あきの風景』

私たちのアイデンティティの指標となりえる風景に着目。移民労働者など多くの在留外国人の方々暮らし地域において、普段は見逃してしまう事象に目を向けることで浮かび上がってくる風景をリサーチしていく。

徳重 道朗 Tokushige Michiro

愛知県生まれ。愛知県拠点。主な展覧会に、個展「ゆきゆきて神戸」兵庫県立美術館アトリエ1 (2020年)、グループ展に「パラドクス ケープ風景」をめぐる想像力の現在」三重県立美術館(2019年)、あいちトリエンナーレ地域展開事業「Windshield Time-わたしのフロントガラスから 現代美術 in 豊田」豊田駅周辺の様々な施設(2019年、愛知)、Assemblage NAGOYA 2016「パノラマ庭園 一動的生態系にするすー」ポットラックビル及び名古屋港一築地口界隈(2016年、愛知)、「Diamonds Always Come in Small Packages」Kunst Museum Luzern(2015年、スイス)などがある。

「ゆきゆきて神戸」2020、兵庫県立美術館アトリエ1
Photo: 高嶋清俊



片岡 真実『監督と学ぶ』

本芸術祭の片岡真実芸術監督自身が「あいち2022」の開催会場である一宮、常滑、有松を中心に、専門家や地域の方々をゲストに迎え、他アーティストと同様に「愛知」について学ぶシリーズ。ゲストとの対談形式で、地域の歴史や文化、産業について話を伺い、後日、その様子を「あいち2022」公式Webサイト上で公開することで、芸術祭が開催される「愛知」についてオーディエンスも一緒に学ぶ。

監督と学ぶ第1回「一宮が繊維の街になったのはなぜ?」より



リサーチ

社会とアートと自分をつなぐプラクティス

2022年4月から、10代から20代を対象としたプロジェクトを展開します。「アート」「芸術祭」「社会」についてのリサーチを多角的に行い、自分で見て伝えるスキルを身に付け、会期中には配信やイベントなどを実施します。

展示会場: 愛知芸術文化センター 10F プラスキューブ

うら あやか+小山 友也「勝手に測る、挟まる、抜け出す」

展覧会やアート作品とその周りがある状況を見て、自分で考える術として表現をやる、10代から20代に向けたプログラム。社会とは何で、自分たちとどう関係しているのか。街や美術館で作品を観察したり、表現したりしながら関係性を測り、その関係の中に自分がどう挟まっているのかを確かめ「勝手にやる」方法をアートから学ぶ。芸術祭会期中には、参加者が企画したワークショップや配信などのイベントを実施。

うらあやか、小山友也はそれぞれ神奈川県を拠点として、それぞれのアーティスト活動を通し、集まりやラーニング領域において研究、発表を重ねている。それぞれ東京造形大学CSLAB、Ongoing School、森美術館Meet the Artists、などでワークショップやクラスを展開。

うら あやか Ura Ayaka

1992年神奈川県生まれ。神奈川拠点。集まりのあり方を検討。ワークショップなど参加型の作品を多く制作。美術関係者の女性たちのネットワーク「female artists meeting」の企画と運営。CSLAB管理人。

小山 友也 Koyama Yuya

1989年埼玉県生まれ。神奈川拠点。交感の仕方から抽出したりブレンドしたりして、既存の枠組みに従属している身体の可視化と侵食によって、未来を模索する。

うらあやか《差異と差別、何も関係のない、切り離された、別の仕事 (猫っばいアイスクリームショップ)》2019



小山友也《一緒に歩く/労働や余暇の身振りについて》2018



レクチャー

2021年より実施してきた、「愛知」や「美術史」、「芸術祭」について考えるレクチャーシリーズをオンラインで配信しています。会期中には参加アーティストやキュレーターらによるレクチャー、未来のラーニングのあり方についてディスカッションするイベントを開催します。

オンライン配信するプログラム:

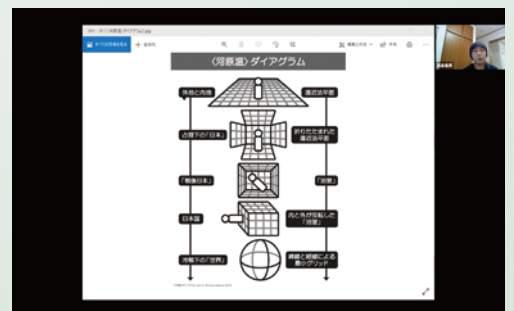
- アーティストによる美術史講座 [第1回 | 眞島竜男(アーティスト) 第2回 | 岡田裕子(現代美術家) 第3回 | 番外編 相馬千秋(国際芸術祭「あいち2022」キュレーター(パフォーミングアーツ)) 第4回 | 森村泰昌(美術家)]
- 「芸術祭」をひも解く: 近代化と万博-オリンピック-芸術祭 [第1回 | 吉見俊哉(社会学者)* 第2回 | 辻田真佐憲(評論家・近現代史研究者)* 第3回 | アイゼア・パルセニエラ(キュレーター・批評家)]

*2022年3月30日時点、オンライン配信中

今後の予定:

- knowing me knowing you 世界のアートの知の技法: オルタナティブなアートスクール/ラーニング・プログラムのリサーチ
- 今週のコンセプトアート
- パフォーマンス・アート/パフォーミング・アーツって何?
- 「あいち2022」アーティスト、キュレーターによるトークやディスカッション

アーティストによる美術史講座のひとコマ



ガイドツアー

「あいち2022」のアーティストによる会場でのトークやキュレーター、ボランティアなどが案内するツアー、複数の言語によるツアーを実施します。また、赤ちゃんとそのご家族、視覚や聴覚に障がいのある方など様々な人々を対象にしたツアーも行います。

「あいちトリエンナーレ2019」ベビーカーツアーの様子
Photo: Yasuko Okamura



スクール・プログラム

教職員や美術教育関係者へ向けて、今後の教育活動の参考としてもらうことを目的に、2021年には教職員に向けた「サマー・スクール」を実施しました。会期中には、未来のラーニング・プログラムについて共に考えるプログラムや地域の教育機関との連携を図り、学校向け団体鑑賞プログラムも開催します。

「あいちトリエンナーレ2019」学校団体鑑賞の様子



ボランティア・プログラム

今回の芸術祭において、主に案内や誘導を行う「会場運営」・来場者との対話を通じて鑑賞の補助を行う「対話型鑑賞による案内」・各会場で実施されるツアーを担う「ツアーガイド」などで活動します。そのため事前の期間に研修を重ね、一方的な解説型案内とは異なる、対話型鑑賞[Visual Thinking]の手法を修練します。

「あいちトリエンナーレ2019」ボランティア研修の様子



「あいちトリエンナーレ2019」ガイドツアー（円頓寺会場）の様子
Photo: あい・撮りカメラ部



連携事業

◆「あいち2022」ポップ・アップ!

国際芸術祭「あいち2022」参加アーティストのうち10組程度が、主に本展とは異なる作品を県内4市の文化施設などで巡回展示します。(入場無料)

日程	開催市	会場
9月2日(金)～9月4日(日)	長久手市	長久手市文化の家
9月7日(水)～9月12日(月)	蒲郡市	蒲郡市生命の海科学館
9月16日(金)～9月19日(月・祝)	半田市	旧中笠半六邸、半六庭園、半田市役所
9月23日(金・祝)～9月25日(日)	西尾市	西尾市文化会館

◆ 舞台芸術公募プログラム

企画公募により選考された7組の地元文化芸術団体と共催で、舞台公演を行います。

愛知芸術劇場 コンサートホール

公演日	公演団体	公演名	ジャンル
9月24日(土)	名古屋音楽大学	Concentus Musicus Meion 第1回コンサート[Gloria～グローリア～]	合唱とオーケストラ
9月25日(日)	名古屋市民バンドフェスティバル 実行委員会	第8回名古屋市民バンドフェスティバル 時空を超えた音楽の世界へ～多世代参加型大合奏の挑戦～	吹奏楽

愛知芸術劇場 小ホール

公演日	公演団体	公演名	ジャンル
8月23日(火)	試験管ベビー	試験管ベビー extra capsule『命かけたり、かけなかつたり』 ～菅原伝授手習鑑より寺子屋と紀伊國屋文左衛門、宝の入船～	演劇
8月24日(水)	PlaTEdGE(プラテッジ)	M・A・C・H・I	コンテンポラリーダンス
8月25日(木)	人形劇団むすび座	一人人形芝居 洞熊学校を卒業した三人	人形劇
9月26日(月)	ニンフェアール	ニンフェアール第17回公演「クセナキス 生誕100年記念:究極の弦」	現代音楽(クラシック)
9月27日(火)	ラストラダガンパニー	らふいゆれふいゆ	道化×音楽

◆ 芸術大学連携プロジェクト

国際芸術祭「あいち2022」会期中に、地元芸術大学(愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学)と連携したプロジェクトを「アートラボあいち」で開催します。

アートラボあいちと四芸大による連続個展

本事業では、愛知県内4つの芸術大学とアートラボあいちがプロジェクトチームを組み、各大学を卒業・修了後10年以内の今後の活躍が期待されるアーティストを1名ずつ選出し、「あいち2022」に合わせて4つの個展を連続で開催します。

アートマネジメントアカデミー

展覧会の企画運営を実践的に学ぶ約1年間の人材育成プログラムを開催します。実践内容に即したゼミを開講することで、現場で必要なスキルを学び、また、定期的に読書会を設け、現代美術等に関する知見を補強します。さらに、アーティストへのインタビューや、展覧会の企画・運営をとりまく実務にも取り組んでいきます。

アートラボあいち | 「あいち2022」及び現代アート等に関する情報発信拠点

名古屋市中区丸の内三丁目4-13 愛知県庁大津橋分室2～3階

<https://aichitriennale.jp/ala/> TEL: 052-961-6633

◆ 連携企画事業

国際芸術祭「あいち2022」と同時期に愛知県内で開催される、芸術祭のテーマや企画等と連携した内容で実施される事業を「連携企画事業」とし、相互に広報展開を図ります。

愛知県関係事業

期 間	事業名	会 場	主 催
7月16日(土)～10月2日(日)	特別展「ホモ・ファーベルの断片—人ものづくりの未来—」	愛知県陶磁美術館(瀬戸市)	愛知県陶磁美術館
7月23日(土)～8月31日(水)	あなた・わたし・みんな 2022	愛知県児童総合センター(長久手市)	愛知県児童総合センター (公益財団法人愛知公園協会)
7月26日(火)～8月5日(金)	あいちアール・ブリュット・サテライト展 ～国際芸術祭連携企画展～	愛知芸術文化センター 12階アトスペースG・H(名古屋市東区)	
9月15日(木)～9月19日(月・祝)	あいちアール・ブリュット障害者アーツ展 (作品展「あいちアール・ブリュット展」)	名古屋市民ギャラリー矢田(名古屋市東区)	愛知県障害者芸術活動 参加促進事業実行委員会
9月15日(木)～9月17日(土)	あいちアール・ブリュット障害者アーツ展(舞台企画)	名古屋市東文化小劇場(名古屋市東区)	
未定(8月下旬～9月中旬)	第26回アートフィルム・フェスティバル	愛知芸術文化センター 12階アトスペースA(名古屋市東区)	愛知県美術館
9月8日(木)～9月11日(日) 予定	あいち国際女性映画祭2022	ウィルあいち(名古屋市東区)、 ミッドランドスクエア シネマ(名古屋市中村区)	公益財団法人あいち男女共同参画財団、 あいち国際女性映画祭2022運営委員会

会場周辺事業

期 間	事業名	会 場	主 催
7月16日(土)～8月14日(日)	国登録文化財 葛利毛織工業工場とのこぎり屋根	一宮市博物館(一宮市)	一宮市博物館
7月30日(土)～10月10日(月・祝)	絵本原画ニヤール! 猫が歩く絵本の世界	一宮市三岸節子記念美術館(一宮市)	一宮市三岸節子記念美術館
7月30日(土)～10月10日(月・祝)	国際芸術祭会場のまちの歴史と文化 ～一宮市・常滑市・名古屋市長	一宮市尾西歴史民俗資料館(一宮市)	
7月30日(土)～10月10日(月・祝)	木曾川アートトライアングル	ツインアーチ138、旧林家住宅、 ウッドデザインパークいちのみや・紡(一宮市)	一宮市尾西歴史民俗資料館
7月30日(土)～10月10日(月・祝)	学校 de アート	一宮市尾西歴史民俗資料館(一宮市)	
4月9日(土)～8月30日(火)	タイル名称統一100周年記念 巡回企画展 「日本のタイル100年——美と用のあゆみ」	INAXライブミュージアム(常滑市)	INAXライブミュージアム
7月30日(土)～10月10日(月・祝) 予定	Kizuki-au 築き合う -Collaborative Constructions	常滑やきもの散歩道 一菁陶園近く(常滑市)	在日スイス大使館
7月29日(金)～8月9日(火)	ON KAWARA -I GOT UP-	KONMASA The Art Building (名古屋市長松地区)	KONMASA
8月11日(木・祝)～10月10日(月・祝)	早川嘉英 STILL ALIVE in ARIMATSU		

その他の地域事業

期 間	事業名	会 場	主 催
4月～10月	ART FARMing TV	YouTubeチャンネルで配信/ 長者町コトビルほか(名古屋市中区)	長者町スクール・オブ・アーツ
6月7日(火)～9月4日(日)	コレクション展 色、いろいろ	豊田市美術館(豊田市)	豊田市美術館
未定(6月～11月頃)	アッセンブリッジ・スタジオ2022	旧・名古屋税関港寮(名古屋港区)	アッセンブリッジ・ナゴヤ実行委員会
7月16日(土)～9月25日(日)	ボテロ展 ふくよかな魔法	名古屋美術館(名古屋市中区)	名古屋美術館、中京テレビ放送
9月10日(土)、11(日)	朗読会「ガジマル樹の下に」——往還Ⅲ	七ツ寺共同スタジオ(名古屋市中区)	二村・篠田共同プロデュース
9月13日(火)～12月4日(日)	藍染の絞り 片野元彦・かほりの仕事	豊田市民芸館 第1・2民芸館(豊田市)	豊田市民芸館
未定(9月頃)	農村舞台アートプロジェクト	未定(豊田市)	公益財団法人豊田市文化振興財団
未定(9～10月頃)	瀬戸現代美術展2022	未定(瀬戸市)	瀬戸現代美術展実行委員会
10月1日(土)～11月20日(日)	吉村芳生展 一超絶技巧を超えて—	松坂屋美術館(名古屋市中区)	松坂屋美術館、日本経済新聞社、テレビ愛知
10月8日(土)～10月30日(日)	とよたまちなか芸術祭	豊田市駅まちなかエリア(豊田市)	公益財団法人豊田市文化振興財団、豊田市

※2022年3月22日時点

国際芸術祭「あいち2022」アンバサダー ※姓のアルファベット順、敬称略

い ま **imma**(バーチャルモデル) かわせ なおみ **河瀬 直美**(映画作家) こんどう せいいち **近藤 誠一**(近藤文化・外交研究所代表、元文化庁長官) くま けんご **隈 研吾**(建築家) くのき みつよ **草野 満代**(フリーアナウンサー)

にしたかつじ のぶひろ **西高辻 信宏**(太宰府天満宮宮司) のざき もえか **野崎 萌香**(モデル、タレント)

ナガオカケンメイ(D&DEPARTMENTディレクター、デザイン活動家)

チケットの種類と制度

フリーパス 会期中、記名ご本人様に限り、各会場を何回でもご覧いただけます。

1DAYパス 入場当日に限り、各会場を何回でもご覧いただけます。

※会期中、一定金額(一般1,200円、学生800円)をお支払いいただくことで、1DAYパスからフリーパスへアップグレードができます。

券種 (販売期間)		前売券 (4月1日～7月29日)	会期中販売券 (7月30日～10月10日)
フリーパス Passport	一般	¥2,500	¥3,000
	学生(高校生以上)	¥1,700	¥2,000
1DAYパス One-Day Pass	一般	¥1,500	¥1,800
	学生(高校生以上)	¥1,000	¥1,200

- ・中学生以下は無料です。障害者手帳をお持ちの方とその付添者1名は無料です。
- ・学生区分適用の場合、チケット確認時に学生証の提示が必要です。
- ・学校向け団体鑑賞プログラムで来場される場合、学生及び引率者は無料です。(要事前申込)
- ・パフォーミングアーツについては、別途チケットが必要です。

特別販売券

チケットを10万円分以上もしくは100枚以上まとめて購入いただく場合、特別価格にて販売いたします。詳しくは公式Webサイトをご確認ください。

フリーパス	一般	¥2,100
	学生(高校生以上)	¥1,400
1DAYパス	一般	¥1,200
	学生(高校生以上)	¥800

ミロ展セット券

愛知県美術館で開催される「ミロ展-日本を夢見て」(4月29日～7月3日)と「1DAYパス」のお得なセット券。

販売期間：4月1日(金)10:00～28日(木)22:00

販売場所：Boo-Wooチケット(オンライン)のみ

一般	¥2,800
学生(高校生以上)	¥1,800

INAXライブミュージアムセット券

常滑会場の展示場所のひとつである「INAXライブミュージアム」内共通入館チケットと「1DAYパス」のお得なセット券。

販売期間：4月1日(金)～10月10日(月・祝)

販売場所：INAXライブミュージアム、常滑市観光プラザ(観光案内所)、常滑市陶磁器会館

一般	¥2,000
学生(高校生以上)	¥1,500

※いずれのセット券でご購入いただいた「1DAYパス」についても「アップグレード」が可能です。

チケットの販売場所

国際芸術祭「あいち2022」公式Webサイト(電子チケット)

Boo-Wooチケット、ローソンチケット(Lコード:41122)、チケットぴあ(Pコード:686-019)、イープラス、セブンチケット(セブンコード:094-293)、JTB、楽天チケット

愛知県美術館、愛知芸術文化センター内など主要プレイガイド、オアシス21iセンター、名古屋市金山観光案内所、一宮市観光案内所、一宮市三岸節子記念美術館、一宮市博物館、一宮市尾西歴史民俗資料館、常滑市観光プラザ(観光案内所)、常滑市陶磁器会館、INAXライブミュージアム

コンビニエンスストア(セブンイレブン、ファミリーマート、ミニストップ、ローソン)

※チケットの取扱い先は、今後も拡充を予定しています。

現代美術展チケット問合せ先

国際芸術祭「あいち2022」入場券管理センター

TEL:052-307-6650(4月1日～)

(10:00～18:00/土日祝休み/会期中は無休)

特別販売券問合せ先

国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局

TEL:052-971-3111

(9:00～17:30/土日祝休み/会期中は無休)

※最新の情報及び詳細は、公式Webサイトをご覧ください。

